その嘘つきの男は……

目目連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その嘘つきの男は……

【Ｎコード】
Ｎ５３５１Ｎ

【作者名】
目目連

【あらすじ】
とある男は転生ライフを手に入れた。しかし、そこには大きな落とし穴が……。
彼は間違ったチートでどこまで生き延びれるのかッ！？

1話　転生は計画的に……（前書き）

どうも。初めましての人も、前作からの人も、こんにちは。目目連です。

無謀にも2作同時進行という暴挙に出ました。

出来れば生温かい目で見ていただければ幸いです。

ちなみに主人公は男です。男ですよ。

大事なことなので二回言っておきます。

1話　転生は計画的に……

―――――――――――――――――――――

「すまない。殺してしまった」

「転生させてくれるなら許す！？チートもふんだんにヨロシク！！」

こうして神に殺された僕のヘンテコな転生ライフが始まった。

ふふふのふ。

やったぜ。ついに私はフロンティアを手にいれたのだ。←意味不明。

僕の回りは荒野。これは、この世界は……もしかすると――――。

「おい。そこの兄ちゃん」

はい。キタァーーーー！！！！！！！！

恋姫の世界だぁぁぁぁぁぁ。

無印か真かどちらかが重要だな。

「おい。聞いてんのか？」

「……フヒヒ」

「うわ、気味悪いな、コイツ……」

「アニキ、さっさと剥いじまいましょうぜ」

「そうだな。おい、デク」

「ご、ごめんなんだな。アニキの命令だから……」

「ふふふ。ちょいと待ちな、三人よ」

「……あ？命乞いでもしようってのか？」

ふふふ。コイツらは知らないな。この俺がチート主人公だと。

さぁ、初公開だ。これが俺の能力だ。

統率　２（精一杯に）
魅力　２（男を磨け）
政治　２（怠けるな）
知力　２（勉強しろ）
武力　－２（不変動だ）
運　　１０（笑）

――――――は？

いやいや、待て待て。

これは何？ほとんど麗羽レベルじゃん。

いや、武力　－２ってなんだよ。

そして肝心なのは……運　１０。

……チートの使いどころが違ぇぇぇぇぇ！！

あの腐れ神め！アイツは馬鹿か、馬鹿なのか！？

「アニキ、なんか百面相し始めましたよ」

「もう構うことはねぇ。剥いじまえ」

「ちょ、ちょっと待って下さい」

くそッ予定が狂ったぜ。こうなったら……。

「く。……お前ら本当に俺とヤろうってのか？」

精一杯の虚勢。

「なんだ？いきなり強気になりやがって。第一手ぶらのお前に何ができるってんだ？」

「……手ぶら。それがなんだと言うんだ？」

震える手足を気力で止める。

「奪刀術を知っているか？字の通り、刀を奪い、それを武器にする術だ。つまりアンタらが持ってるのが俺の武器だ」

形だけ構えてみる。

「あ、アニキ。見たことねえ構えですぜ」

あ、今、僕が考えた構えです、すみません。

「考えてみろよ。こんな手ぶらの優男が荒野で一人だぜ。普通、不審に思わねえか？俺はアンタらみたいな考えなしが来るのを待ってたのさ。今日の俺は血に飢えている」

中二全開だぜ。←自棄です。

「さぁ、来いよ。見せてやるぜ、奪刀術をな。ただしその頃にはアンタは八つ裂きになっているだろうけどな……」

うっはぁ！言ってみたかったんだよな、このセリフ。

「ヤベぇよ、アニキ。なんだか分からないけど」

「あぁなんだか分からないが、ヤバそうだな。ずらかるぞ、オメェら」

おぉ！ハッタリ効いたぜッ！？

これも運１０のお陰か？

逃げる三人を見送る。

「はぁー。助かったぁ～」

いや、転生ライフ開始早々で終了なんて洒落にならないよな。

うははは。

……さて、どうしよう。

2話　浮かれていると足元を掬（すく）われる

―――――――――――――――――――――

「春蘭、首をはねなさい」

「はっ」

あれ？どうしてこうなった？

あれは確か……。

少し時間は戻りまして。

三人組の賊を口先で撃退？した後、僕はとりあえずテキトウに歩い

ていた。

――ドドドド。

「じ、地面が揺れてるッ！？地震だッ。机の下に隠れなきゃ……
……ってここ荒野ッ！？」

ビシッと一人でツッコむ僕だった。

「止まれ！……おい、貴様」

あややや？あれは……。

「そこの貴様だ。聞いているのか？」

「姉者、そうも頭ごなしに怒鳴るものではないよ」

「うっ。それもそうだが……。もしかしたら、こやつが賊の仲間
だとも……」

「ただ、畏縮、と言うか唖然としてるようにしか見えないけど？」

「か、華琳様ッ！？危のうございます。まだこやつが賊でないと決
まったわけでは……」

「私には殺気を感じさせないほどの達人には見えないのだけれど？
秋蘭、貴女は？」

「いえ、私にも見えません」

「だ、そうよ？」

「う……」

「それで、貴方は何者かしら？」

「……」

「聞いているの？」

「え、あ、すみません、華琳さ――――」

あ。

そして冒頭に戻ります。

「貴様ーッ！？華琳様の神聖な真名を汚した罪、万死をもって償うがいいッ！！」

うっきゃーッ！！間違えた、間違えた。

あまりの感激につい……てか、ヤバいヤバいヤバい。

死ぬ、マジで死ぬ。武力－２の僕が夏侯惇に敵うわけないじゃん。

あぁ、もうここまでか……。折角の転生ライフ、短い繁栄だった。

『困っておるの、お主』

はっ。これはまさに天の助けか！？

助けて、神様。

『うむ。仕方ないの』

イェーイ。さっすが神様だぜ。僕は今日から貴方を信仰するよ。

『現金なやつじゃの。そうだの……刀語の完成形変体刀の十二本をやろうかの』

マジでッ！？

『呼べば、出てくるようにしておくでの。それでは頑張るのじゃ』

さんくす、神様。愛してんぜッ。

「さぁ、覚悟は決まったか」

目前に大剣を構える夏侯惇。

「く。少しは話を聞いてはいただけませんか？」

「問答無用ッ！？」

斬りかかってきた夏侯惇。

仕方ない。

「来いッ、絶刀『鉋』ッ！？」

僕が手を横に出すと手に何かの感触があり、それを掴み、引き抜く。
すると僕の手に鞘のない刀。『鉋』が現れた。
「「「なッ！？」」」
突然、出現した『鉋』に驚愕する三人。
「貴様、五胡の妖術使いかッ」
「あ、えーと。チガイマスヨ？」
なんて説明すればいいのかな？まぁとりあえず……。
「種も仕掛けもある奇術ですよ」
はい。口からでまかせ。舌先三寸口先八丁とは僕を表す言葉だＺＥ☆
「この刀はとある鍛冶屋が作った頑丈さを主に作られた刀です。叩き折れるなら折ってみやがれッ！？」
僕は出鱈目に『鉋』を構える。
「素人な構えだな」
「ふっ。自分の知らぬ構えをそう判断するのは早計ではありませんかね？」
僕の特技が段々ハッタリになっていく。

「なにをぉぉ！」

簡単にハッタリに乗ってくる夏侯惇。

そこが可愛いよね。……って今はそれどころじゃねぇよ。

くっ。とりあえずしのぐしか……。

――ガキンッ。ヒュンヒュンヒュン。グサ。

最初のはぶつかり合う音です。

え？後の２つは、って？

……力負けして手から飛んでいって地面に刺さる音。

「……」

マジ、パネェっス、夏侯惇さん。

「もうおしまいか？やはり口だけのようだな。さっさとその首を差し出すがいい」

「くっ。まだまだ。次、斬刀『鈍（なまくら）』」

――――サクッ。

ひゃわっ！なんで目の前に現れるかな！？後、薄皮一枚で足に刺さってたよ、これ。

だがこれならッ！？

「くくっ。『鈍』は切れ味に主をおいた刀。斬れぬものはありはしないッ！！てやぁー！！」

先手必勝！

――――スポッ。サクッ。

うぎゃーッ！？手からすっぽ抜けて足下に刺さった『鈍』

武力－2、恐るべし。

「なにをしているのだ、貴様？」

「う、うるさいっ。こっちも必死なんだよッ」

涙目ですが、なにか？

「次、千刀『ツルギ』」

サクッ、サクッ、サクッ、サクッ、サクッ――――――。

見渡す限りの刀の山。

「ふふふ。これなら……って、単なる刀じゃねぇかこれッ！？

はい、次」

薄刀『針』

「だから単なる刀も使えねぇのにこんなの使えるかぁぁぁぁ！！」

賊刀『鎧』

「入れるかぁぁぁぁ！！」

双刀『鎚』（かなづち）

「重いわ、ボケッ！！」

悪刀『鐚』

「痛っ、静電気ハンパねぇ！？」

微刀『釵』

「うわっ。こっち襲ってきたッ！？」

王刀『鋸』

「ふぅー清々しい気持ちに……だから単なる木刀だろがッ！？」

誠刀『銓』（はかり）

「柄だけじゃねえかッ！？」

毒刀『鍍』（めっき）

「うむ。この毒々しさが……だからなんだよッ！？刀使えねぇんだよッ！！」

一人ツッコミ頑張りました。

「はぁはぁはぁ……」

「だ、大丈夫か？」

うぅ。夏侯惇にとても可哀想な目をされてますよ、僕。

「つ、次で最後ですから」

そうだ。あれなら使えるはず……。

「炎刀『銃』」

僕はありったけの願いを込めて叫ぶ。

――――ズドン。

あれ？なにやら目の前が真っ暗に？

え？なに、これ？

なんだ、どうしたんだ？

僕の目の前の真っ暗……いや、微かに明かりが……上から？

僕は上を見上げると……。

「うわぁ、空が高ーい」

僕はどうやら円柱状の物の中に入っているらしい。

例えるなら土管の中みたいな？

あれ？なんで、こうなった？確か、僕は炎刀『銃』を呼んだはず……。

炎刀『銃』……えんとう、じゅう……えんとじゅう……えんとじゅ……えんとつ……煙突ッ！？

「無理矢理過ぎるわッ！？親父ギャグかッ！？しかも寒すぎるわッ！？」

僕はその場に座り込む。

―――ヒュン。

その時、僕の頭の上を風か掠める。

そして遅れて、目の前の煙突が斜めに傾き始める。

―――ズドーン。

「茶番はもう仕舞いか？」

煙突が斜めに倒れる中、大剣を降り下ろした夏侯惇がいた。

あぁ、駄目だ、僕。死んだ。

――いや、まだだ。僕にはアレがある。

僕は煙突から出て正座する。そして両手を前に着き、頭を下げる。

日本人の伝家の宝刀、『土下座』だぜ。

「数々の非礼、お詫び申し上げます」

「今更、命乞いかしら？」

青筋立てた曹操が僕を見下ろす。

「いえ。もう首をはねられるのは覚悟しております。ただ一つ確認を……」

「……何かしら？」

「――――楽しんで頂けましたか？」

「なッ！？貴方、私を馬鹿にしているのッ！？」

「いえ。そのようなことは決して。ただ、わたくしは道化師を生業にしておりますので……」

頑張れ、僕。

「路銀も底を尽き、陳留にて稼ぎをしようとしていた際、運良く曹孟徳様にお会いしましたので、我が命を賭けまして孟徳様に楽しんで頂こうと思いまして、このようなことをしました。そのことについては重ね重ねお詫び申し上げます」

「今までのやり取りは貴方の芝居だと？」

「はい」

「それで私を楽しませて貴方になんの得があると言うのかしら？」

「いえ。特には。わたくしはただ人を楽しませるだけで御座います。もし楽しまれたのなら、その後首をはねられたとしても本望。もし楽しまれなかったのならそれは我が力量不足からなるもの、首をはねられても文句はありません」

「ほう」

「願わくば孟徳様が楽しまれておれば良いとそう思う所存で御座います」

「そう。春蘭……」

「はっ」

「――この者に謝礼を渡しなさい」

「はっ……えっ！？よ、よろしいのですか？」

「いいわ。この曹孟徳に対してこのような肝の据わったことをする

道化師への敬意を示したまでよ。そこの者、名は？」

「はい。我が名は……」

あれ？名前何だろう？今までの名前で良いのかな？

「……我が名は『劉璋（りゅうしょう）』です」

あれ？誰か僕の名前に被せなかった？

て、いうか今、劉璋って……。

「――って劉璋ッ！？」

「な、なに？いきなり声を出して……」

「あ、すみません。自分の名前に驚きまして……」

劉璋って確か、劉備に攻めいられて呆気なく蜀を奪われる、あの劉璋？

公孫賛より哀れなあの人ですか？

え？僕、そんな役なの？

「そ、そう。（なんだか変わった男ね）……まぁいいわ。劉璋、三人組の賊を見なかったかしら？」

「あ、はい。それならあちらに行きました」

「そう。なら追うわよ、二人とも」

そう言って曹操たちが去っていった。

あれ？これ、魏ルートじゃないの？

夏侯惇から礼金を頂いた僕は荒野にポツンと立っていた。

『ククク。お主は蜀へ行くのじゃからの。他の国に属してもらっては困るのじゃ』

出たな、糞神がッ！？

テメェ、なんで炎刀だけ親父ギャグなんだよ。

『ふぉっふぉっふぉ。お約束じゃ』

意味わかんねぇよ。くそ、こうなったら意地でも蜀になんて行かねぇからな。

『ほぉう。神に逆らうのか。それも面白いの』

3話　太守はツラいよ

―――――――――――――――――――――

「劉璋様ッ」

あーうー。

何故こうなった。

僕は玉座の間にて肘をつき、顎を置く。

確かに僕は蜀に行かないはずだったのに、どうして僕は今、蜀の地方を治める太守をしているのだろう？

「劉璋様、聞いておられますかッ！？」

目の前には数々の武官や文官が並んでいる。

「あぁー。うん、聞いてますよ。確か、董卓さんがなんやかんやと

かなんとか？」

「最初だけではないですか、それ！？」

うん？そうだっけ？

「まぁ、それは置いとくとしておいて。でなんなわけ？ちょっと難しすぎ、簡略化して」

あ、全員から冷ややかな視線が注がれる。

いや、皆さん。少しは考えてね。僕の能力かなり低いのよ？

「簡単に申し上げますと、袁紹が各諸侯へ招集を命じて、董卓を討とうとしているのですわ」

そう答えたのは黄忠。

「なんで董卓を討とうとしているのか、分かりませんが？」

「文には董卓が都で悪政をしているとのことですが、真偽は分かりません」

「大方、袁紹が董卓への妬みに乱を起こそうとしておるのじゃ」

と黄忠の言葉に付け足したのは厳顔。

「こちとら内乱の制圧で疲弊しとると言うのに迷惑なことじゃ」

わざとらしく肩を叩く厳顔。

「ふむ。では我が国は不参加で」

『――――はぁ？』

「いや、まだまだ内乱もありますし、蜀は田舎ですから都まではかなり距離がありますからもし何かあったら大変だし、後面倒だし、面倒だし、面倒だし」

「劉璋様、言葉に出ております」

「うん。出したから……」

おぉう。全員から白い目で見られてるよ、僕。

「まぁ、いいじゃんか。はい、この話終わり。袁紹さんには適当に謝罪文と少し軍資金でも渡しときゃいいんじゃない？」

てなわけでよろしく～、と僕は玉座を立つ。

「劉璋様、どちらへ？」

「ん、厠」

僕は手をヒラヒラとさせて玉座の間を退出する。

「ふぅー。スッキリだね」
僕は手を洗い、自然乾燥中。
「さて、部屋に戻り……あれ？」
部屋、どっち？
ヤバい、迷った。
劉璋は混乱している。
「お兄ちゃん、どうしたの？」
「……え？」
声を掛けられた気がするが姿が見ない。
まさかの幻聴ッ！？
「お兄ちゃん、璃々はこっちだよー」
うん？下、かな？
そこには青みの強い紫の髪を短めに切り揃え、頭の両サイドに結んだ少女……否、幼女がいた。
ふわふわの服に身を包んだ幼女がこちらを見上げている。

服の上からでもそのぷっくりとした幼児体型が分かります。

ロリータ？大好物ですッ！？

グへへへ。

———シュパンッ！？

ヒッ！見えない矢が今、横を掠めたッ！？

「お兄ちゃん、どうしたの？」

無垢な瞳が僕を見つめてくる。

止めて、つい出来心だったんです。

「お兄ちゃん、まいごなの？」

「うむ。その通りだ」

とりあえず胸を張って答えておいた。

「そうなんだ。じゃあ璃々が連れていってあげるね。璃々、お城の中詳しいんだよ」

「おぉ！まさに天使ッ！？ありがとう、ありがとう」

とりあえず幼女を拝んでいる僕。

「璃々はね、璃々っていうの。お兄ちゃんは？」

「うん？僕ですか？僕は……」

う～ん。ここは劉璋と答えるべきか？

「……リュウリュウって言います」

とりあえず偽名で……。

いや、偽名とも少し違うのかな？

「リュウリュウお兄ちゃん？」

「ハッフッ！？」

うぅ、夢にまで見た幼女のお兄ちゃん呼び、僕、死んでもいいかも……。

フフフ、この劉李玉（りゅうぎぎょく）、一片の悔い無し！！

「どうしたの？」

「いや、なんでもないんだよ。それにしても璃々ちゃんはなんでお城に詳しいのかな？」

普通、城の間取りは極秘じゃないのかな？よく知らないけど……。

「璃々のお母さんがはたらいてるの。それでね、たまにあそびにくるんだよ」

「あはは、そうなのかー」
あれ？ウチの警備ざるじゃね？
「それで今日も遊びに来たのかな？」
「ううん。今日はね、お母さんがお弁当をわすれていったからとどけにきたんだよ。それでお母さんをさがしてたの」
「おぉ、偉いな、璃々ちゃんは」
僕は璃々ちゃんの頭を撫でてやる。
それにしても璃々ちゃんのお母さんって誰だろう。
なんか知っているような気もするんだけど……。
「そうだ。じゃあ僕もお母さんを探すのを手伝ってあげよう」
「え？いいの？」
「うむ。璃々ちゃんは玉座の間まで案内してくれ。玉座の間ならお母さんのことを知ってる人もいるかも知れないから聞いてみよう」
そう言って僕は左手を出す。
ん？決して幼女の温かな手を握りたいなんて不純な理由じゃないぜ？
また僕が迷子にならないための処置さ。

それを理解してくれたのか、どうかは知らないが璃々ちゃんも右手を出して、仲良く繋ぐ。

ムフフ。温かい……。

――――ヒュンッ。

はっ！また見えない矢がッ！？

所は変わりまして、玉座の間。

「全く、劉璋様にも困ったものです」

一人の文官がそう溢したのを皮切りに次々と誹謗、中傷を言いだす。

「ふん。勝手なやつらじゃ」

厳顔が他の官たちを見て、悪態を吐く。

「己らが甘い汁を吸うために劉璋の坊主を太守の座に据えたくせによく言いおるわ」

「まぁまぁ、桔梗。あまりそんな大きな声で言わないでちょうだい」
そんな厳顔を宥めるように黄忠が言う。
「ふん。劉璋の坊主も坊主じゃ。官が不正を働いとるのを知ってか知らずか穏々と日々を怠惰に過ごしよって……」
――――バンッ！？
そこで扉が大きく開け放たれる。
「……りゅ、劉璋様」
そこには今の今まで悪口を言っていた本人が現れ、官たちが慌てるのが目に見て分かった。
「ふふふ。無能な主君のお帰りですよ？」
笑いながら皮肉を言う僕。
「劉璋様、こ、これは違いまして……」
「あぁー、よいよい。特に僕も気にしてないから。“これまで通り”頑張ってくれればいいから」
言い訳をしようとした官に僕は手のひらをヒラヒラさせて、あしらう。
「あ、そうだ。この子のお母さん誰か知らない？」

と僕の影に隠れて見えていなかった璃々ちゃんを前に出す。

「璃々！？」

「お母さん！？」

と璃々ちゃんは黄忠の下へ駆け出す。

あぁ、確かに黄忠さんに似て……って黄忠さんの娘ぇぇぇぇ！！

「どうして璃々がここに？」

「お母さんがお弁当をわすれてたから届けにきたの！」

「まぁまぁ、そうだったの。ありがとうね、璃々。それにしてもお母さんがよくここにいると分かったわね」

「うん。リュウリュウお兄ちゃんがここにくれば分かるって言ったから」

「りゅ、りゅうりゅう？」

「どうも～。柳々（りゅうりゅう）です」

僕は手を挙げる。

「劉璋様ッ！？す、すみません。わたくし、劉璋様の真名を……」

「ん？……あぁ、構わないですよ、別に。それじゃ、僕は部屋に戻りますね」

僕は玉座の間から部屋へと行く。

僕が知ってる道は玉座から自室と自室から厠ぐらいなのだ。

しかもそれも結構、あやふやだからな。

「柳々お兄さん、また遊んでね～」

「うん。いつでもおいで、璃々ちゃん」

手を振る璃々ちゃんに振り返しながら部屋へと戻る。

4話　嘘つきは頑張る

「劉璋様ッ」

あれ。この始まりデジャヴじゃね？

「劉璋様、平原の劉備とかいう者が大軍を率いて我が国の国境近づいていると物見から連絡がありました」

「……くぅー。Ｚｚｚ」

「ちょ、劉璋様ッ！？寝てないでくださいッ！？」

「僕は蝶々～」

「寝惚けてないで下さいッ！？」

「うぅ。あまり大きな声を出さないでよ、王累。二日酔いなんですから……」

「先ずは口元の涎を拭いて下さい……」

じゅるり。

「で、なんだっけ？今日の昼ごはんの話？」

「違います。劉備が我が国に侵攻してきたんです！？」

あぁ。そういえばそんなこともあったけなぁ。

じゃあ、もうそろそろ黄忠さんは劉備の方に付く頃かな？

「ふ～ん。そっかぁ……」

「どうしますか、劉璋様」

「……くぅー。ＺＺＺ」

「寝ないで下さいよぉぉぉ！！」

う。頭痛い。

「桃香様、こちらが玉座の間になります」
黄忠たちが劉備たちを案内している。
「……ら……ま……」
「ん、玉座の間から何やら話し声が聞こえるが？」
関羽が気付き言う。
「あら、本当ですわね」
「誰ぞ、居るのかの？」
黄忠と厳顔が扉を開けると……。

「こ、こら。劉璋様に何をするのですか！？」
「わ～い。おうまさんだ～」
「パカラッパカラッ」

上から王累、璃々ちゃん……そして僕。

ありのまま話すと、僕が四つん這いになり、璃々ちゃんが上に乗ってお馬さんごっこの真っ最中だ。

「パカラッパカラッパカ……」

「……」

あ、黄忠と目があった。

――ギギギ、バタン。

あ、扉閉められちゃったよ。

「よいしょっと」

僕は膝に付いた埃を払う。

「やぁ、どうも」

『……』

どうしよう。劉備さんたちウチの家臣たちと同じような冷たい目で見てくるよ。

「なにもしてこんから、もうとっくに逃げたと思っておったのじゃが……。まさか玉座の間で童と遊んでいたとはの」

厳顔が呆れたように呟く。

「厳顔、黄忠！貴様ら、劉璋様を裏切るとは何を考えているのだッ！！」

王累が二人に向かって叫ぶ。

「ふん、知れたことを。いつまでも劉璋の坊主なんぞに蜀を任せておけんわ。無能な君主より有能な方を選ぶのは当たり前じゃろ」

王累の言葉に厳顔がシレッとした顔で答える。

「貴様！？……」

「はいはい。終了〜」

王累が剣に手を掛けようとした時、僕は制止を掛ける。

「王累は剣から手を離す。厳顔さんはあまり王累を煽らないで下さいね」

はぁー、とため息を吐く僕。

「えぇと。あ、璃々ちゃん、厨房におやつがあるらしいですよ？」

「え？ホント？璃々、おやつたべるー」

両手を挙げて喜ぶ璃々ちゃん。

「はい。どうぞどうぞ。あ、手はキチンと洗うのですよ？」

「は～い」

トテトテと走って行く璃々ちゃん。

「……さて、と」

僕は璃々ちゃんが出ていくのを見届けてから、来客たちに向き直る。

「改めまして。初めまして、僕は劉璋、字は李玉です」

「あ、これはご丁寧に。私は劉備って言います。字は玄徳です」

「桃香様、なにを暢気に挨拶をしているんですか……」

劉備が律儀に挨拶をすると隣の関羽がたしなめる。

僕はゆっくりとした足取りで玉座へ座る。背もたれに背中を深く預ける。

「ふぅ。それでこの度は何のご用で蜀へ入らしたのですか？」

僕は肘を付き、劉備たちを気だるそうに見やる。

「……と義務的に聞きましたがまぁ十中八九蜀の地を求めてですよね？」

「……はい」

「ふぅん。別に構いませんよ」

「劉璋様ッ」

なにか言おうとした王累を手で制す。

「元々、僕は形だけの君主ですからね。貴女方にお譲りするのは、やぶさかではありません」

ただ、と僕は付け加える。

「貴女は何故、蜀の地を……いや、大陸を望むのですか？」

「何をいきなり言い出すのだ、貴様」

僕の言葉に劉備の後ろに控えていた関羽が食ってかかる。

「うん？前任者として蜀を任せるに値するか見極めるため、ですかね？」

「今更、君主面か、劉璋よ。貴様、官が悪政働いているにも関わらずそれを見抜けず、今まで放置していたにも関わらず」

関羽が凄む。

「貴様ッ！？劉璋様を愚弄するかッ！！」

「王累、どうどう。僕が無能なのも官たちを放置していたのも事実だからね」

「し、しかし……」

唇を噛み締める王累。手も拳をギュッと握っている。

「まぁ、僕が聞くのはお門違いかもしれないけどね。一応、これが僕の役割だからね」

僕は玉座から立ち上がり、階段を少し降り、途中の段に腰を下ろす。

丁度、劉備と同じ目線の高さになる。

「腹を割って話そう、劉備さん。今から僕が何をしたって君たちの勝ちは決定事項だ」

僕は肩を竦めて、自嘲気味に笑う。

「……」

劉備は僕の意図を酌んだのか数歩前に出る。

「……千刀『ツルギ』」

僕は右手をかざし、言うと劉備と関羽たちの間に千本の刀の壁が出来る。

「桃香様ッ！？」

「貴様、桃香様をどうするつもりだ！」

「どうもしませんよ。だから腹を割って話そう、て言ったじゃないですか……」

「大丈夫だよ、愛紗ちゃん」

「桃香様……」

「大丈夫だから」

劉備は後ろで見守る仲間に笑顔でそう言った。

「劉璋さん、私は、私たちは皆が笑って暮らせる世を作りたいんです。弱い人が虐げられて、強い人だけが得をするような今の世は間違っていると思うから」

目には決意の炎を宿し、己の信念を語る劉備。

「だけど、私たちにはまだ力が足りない。だから、私たちは力を求めるんです。これは矛盾しているかも知れないけど……」

「――――甘い」

「――――ッ！？」

「と、曹操さんなら言うかな？」

「……え？」

「うん。僕的にはいいと思います。皆が笑って暮らせる世」

「え、それじゃあ……」

顔に笑みを浮かべる劉備。

「あ、でも１つ質問……」

僕は指をピンと立てる。

「―――弱い人って誰のこと？」

僕の言葉の意味が分からないと言いたげな顔の劉備。

「えぇと、民の人たちだよ？」

まるで子どもにものを教えるかのような優しい口調の劉備さん。

それ、結構傷つくかも……。

「……民、か。民とは弱い人なのですか？」

「貴様、さっきから何を訳の分からぬことを……」

「あー……関羽さん？僕は今、劉備さんと話しています。貴女たちの総意は劉備さんと大体同じなのでしょ？だったら僕は劉備さんの口から劉備さんの言葉で答えを聞きたいのですが……」

僕は劉備を見る。

「え、えぇと。民の人たちはその土地の領主の人には逆らえないから領主の人が悪政を働けば、それに苦しめられるから……」

「ふむ。それは立場上、弱いと言うことかな？でもさ、劉備さん。それならその土地を出ていけばいいじゃない？それが出来ないなら……一揆を起こすよね？」

「え？」

「う～ん、僕も実際を見てないから分からないけどさ。蜀の地でもさ内乱の中には小国同士の衝突以外にも農民一揆も結構あるんだよね、黄忠さん」

「え、えぇ」

「それでも民が武官の人には敵わないですよ」

「勝負的の勝ち負けなんてあまり意味をなしてないと思うよ？だって勝っても負けても民は得をして、官は損をするから……」

僕の言葉に困惑の表情を見せる劉備。

「一揆の収め方って知ってる？別に参加者全員を打ち首にするとかはないよね。そんなことしたら民が居なくなって生活出来ないのは官たちだもんね。簡単に言えばさ、官は力で勢いを削いで、削いだ後で民たちの条件を少しだけ飲むのさ」

分かるかい？と僕は訊ねる。

「民は確かに損害は出たかも知れないけど本来の目的は少しは達成したのさ。そして官は損害を出して、そして更に要求まで飲まされるんだ。損得勘定がどちらがいいかなんて分かるよね？だからこそ官は一揆が起きないように見張ってるけどまぁ大体は無理だね」

と僕はそこで一呼吸置く。

「確かに傍目から見れば民は官に勝てないけど目的を果たすだけなら勝たなくてもいいんだよ？民たちは決して弱くない。むしろ強いと僕は思うよ？」

それでも貴女は民が弱いなんて言うの？と僕は劉備に聞く。

「それに甘やかして箱入り娘にしてしまってはそれこそ惰弱な民になってしまう。少しは苛烈な環境でこそ、強い民になると言うものだと僕は思います」

「これがあの劉璋なのか……」

「えぇ、わたくしも驚いてるわ」

あのいつも気だるそうにしていて、政務すらまともにしていない元主君が今、新たな主君に対してかなりの舌戦を繰り広げていた。

「とんだ狸であったのか……」

「……とまぁ、何だかんだと言ってきましたが、所詮は負け犬の遠吠えですよ。……よいしょっ」

僕は腰を上げる。

「それじゃ、劉備さん、頑張ってね」

と玉座の階段を下りていく僕。今や『ツルギ』の壁は消えていた。

「あ、そうだ。これ、渡しとくね」

僕は1つの書簡を取り出す。

「え？これは……？」

「ウチの家臣たちの不正の証拠」

「な、貴様、知っていたのか！？」

僕の言葉に関羽を始め、黄忠たちまでもが驚く。

「うん？……まぁ、王累から進言があったからね。まぁでも僕は仕事遅いから、全員分をまとめるのにこんなに時間が掛かっちゃったよ」

はは、と笑う。

「これもついさっき、まとめ終わったんだよね。多分、これで幾分は摘発出来ると思うよ。劉備さんとこには有能な将が揃ってるもんね」

僕は劉備に書簡を渡す。

「僕は民を思えても、憂(うれ)うことが出来ないん王だったからね。1つのことしか出来ないんだよ、無能だからね。だから両方出来る劉備さんにこれは託すよ」

それじゃ、と僕は玉座を後にする。

うん。これで逃げられる。

打ち首にされるのは御免だからね。どうにか口先で有耶無耶にできたはずだ。

ハッハッハッ。口先だけが取り柄の僕ですよ。

「劉璋様、お待ちくださいッ」

空気読もうぜ、王累。

「劉備様、お願いします。劉璋様を助けて下さい」

王累は劉備の前に膝を付き、懇願する。

「劉璋様は本当はお優しい方なのです。ただの武官に過ぎない私の言葉を聞き入れて下さり。途方もない作業にも音を上げずにやり遂げれる忍耐強さもあります」

いや、それは他に仕事が回ってこないから……。

「桃香様、ちょっとそれを見せてもらっていいですか？」

関羽たちの間からベレー帽を被った少女ととんがり帽子を被った少女が出てきて、書簡を紐解く。

「……これなら使えると思いますよ、桃香様」

「そうなの？」

「はい。周りの地主たちも私たちが不正の証拠を持っているとは思っていないでしょうから。これを以てすれば、大半を検挙可能です」

諸葛亮と鳳統が交互に述べる。

「これだけの功績を残したものを放置しておくのは勿体ないと思います」

「うん。そうだね、劉璋さん、私たちの仲間になってくれませんか？」

と一同が僕の方を見ると……。

そこには誰も居なかった。

『えぇぇぇぇ！？』

その頃、僕は……。

「このお団子、おいしいね、柳々お兄ちゃん」

「美味しいですねー」

璃々ちゃんとおやつを食べていた。

その後、劉備たちと王累に見つかり、何故か小言を言われた。

……なして？

5話　他人の不幸は蜜の味

―――――――――――――――――――――

「……ふぁ～」

眠いなー。

僕は欠伸をしながら廊下を歩いている。

手にはいくつかの書簡を持っている。

僕は今、何があったか知らないけど桃香（なんか真名を許された）のところで文官見習いをしている。

それで、今、お館さん（北郷くんですよ。あの時居たんですよー）に確認の印を貰いに部屋へ向かうところです。

「あれ？なんだか人が居ないのだけど……」

さっきから誰にも会っていない。

いや、お館さんの部屋に近づくにつれて人が居なくなって、る……？

そして、お館さんの部屋の前。

———トントン。

ノック二回。マナーですよね。

「あ、はーい」

と中から女の子の声がした。

あれ？お館さんの部屋だよね、ここ？

ガチャと扉を開けて、出てきたのは二人のメイドの少女だった。

「あれ？アイツじゃないの？」

「どうもー。お館さんは……居ないみたいですね」

「アイツなら今、席を外してるわよ。何か用だった？」

「はい。少し確認をいただきたいものがありまして……」

「そうなの？それは残念だったわね」

うむむ、困りました。

「では少し待たせてもらいましょう」

と僕は部屋へ入っていく。

「へ？ちょ、ちょっと待ちなさいよ！？」

メイドさんの片方、緑髪で眼鏡の娘が僕を止める。

「アンタ、ボクたちのこと知らないの？」

「はい？」

「はぁ。全く末端まで何も伝えてないわけ……」

なにやらぶつぶつと言っている少女。

「あのぅ……」

もう1人の大人しそうな娘が話しかけてきた。

ウッハァ！いい感じのロリータちゃんだ！！

「……ひぃ」

「ちょっとアンタ、月になにしてんのよッ！？」

僕と少女の間に割り入る少女（眼鏡）。

ん？月？う～んとどこかで聞いたことあるような……。

「あぁー、董卓ちゃんですか。それで貴女が賈駆さんですね」

僕はポンと手を打つ。

「え！？ちょ、アンタなんで知ってんのよ！？」

「あ、僕は劉璋って言います。よろしくです」

「ちょっとボクの話聞きなさいよ！？」

「どうも。月、です」

「え？それは真名ですよね？良いのですか？」

「ちょっと無視しないでよー」

賈駆をおいて、話が進んでいく。

「はい。いいんです……」

とこれまでの経緯を話してくれる董卓。

「ほへぇー、大変だね。うん、じゃあ、僕も柳々でいいよ、月ちゃん」

「はい……柳々さん」

うむ。やっぱりいいね。俯きながらの恥じらいはいいね。

フヒヒ。

「ふぅー。一休み、一休み」

僕は椅子に腰かける。

「……ってなんで寛(くつろ)いでんのよ、アンタ！？」

「え？お館さんが戻るまで待つって言ったじゃないですか、詠さん」

「う……アンタ、知らないの？」

詠がなんだか落ち込む。

「今日、ボクの近くに居ない方がいいわよ。アンタ、不幸になりたくないでしょ？」

「へぇーそうなんだー。とりあえず僕は少し寝ようかなー」

「アンタ、信じてないわね」

「柳々さん、詠ちゃんの言ってることは本当なんです」

「え？知ってますよ？」

「「え？」」

ハハハ。それぐらい、知ってますよ。

「今朝、王累から聞きましたから」

「だったらなんで……」

「いえ。僕は頭悪いですから一つ一つこなしていかないと出来ないんですよ。だからお館さんを待ってないと」

「でも……」

「あぁ、僕なら大丈……へっくちッ」

――ガシャーン。

僕がくしゃみで顔を下げた所に窓から槍が飛んできて僕の頭上を掠めていく。

「ありゃりゃ？これは何でしょうね？」

床に何か落ちているのを拾おうと席を立つと……。

――ガラガラガラ。

棚から物が今まで座ってた場所に落ちてくる。

「……ね？」

僕は二人に言う。

ハーハッハッハッ。運１０を舐めないでいただこうか。
奇跡の強運、とでも言おうかな。
「お兄ちゃん、大丈夫か？」
と窓から鈴々が顔を出す。
「あれ？お兄ちゃん、居ないのだ」
「お館さんなら席を外してるわみたいですよ、鈴々ちゃん」
「おぉ、柳々なのだ。こんなところで何してるのだ？」
鈴々の疑問に僕が答えると鈴々は窓から部屋へ入ろうとして……。
いや、そこからはダメだと思うけど。
「あ、詠……」
詠を見つけて思い止まる。
「え、えぇと……鈴々、用を思い出したのだ」
とそくさくと窓から離れていった。
「普通はああいう反応をするもんよ」
不貞腐れたようにそっぽを向く詠。

「へぇー。よいしょっ」
僕は再び、椅子に座り直す。
「それでお館さんはいつ頃帰ってくるかなぁ？」
「いや、アンタ、ホントに分かってんの……？」
「あはは」

「……柳々ってどんな奴なの？」
今、詠と月、そして北郷は中庭でお茶をしていた。
「え？柳々さん？どんなって……気さくな人？」
「詠ちゃんの不幸のことを聞いても驚かなったです」
「あぁ、なんとなく想像つくね、それ」
「確か、元太守なのよね？アンタもそうだけど、全然そんな風には

見えなかったわよ」
「まぁ。自分でも形だけって言ってたし……あ、でもアレで舌戦は凄いんだぜ」
「はぁ？そうなの？」
そんな和やかな日常会話をしていると……。
「うにゃぁぁぁぁ！？」
「待たぬか！」
柳々と愛紗が追いかけっこしていた。
「待たぬか、柳々！？」
「ちょ、愛紗さん、槍を置いてから話しましょうよーッ！？」
「お主が逃げるからではないか！」
「槍を先ず置いてよーッ！？」
ギャーギャーとお互い喚きながら走っていた。
「アレが舌戦を、ね……」
「いや、確かにしてた、よな……？」
ジト目の詠にやや汗をかく北郷。

「うにゃぁぁぁ！？……はっ！あれは！？」
柳々は走る方向を変える。向かう先は北郷たちの入る休憩所だ。

ふふふのふ。勝機、見つけたり！？

「千刀『ツルギ』！」

僕と愛紗の間に均等間隔で刀が刺さる。

「なんのつもりだ、柳々。このようなもので私を止められると思っているのか？」

「いやいや、世に名高い関雲長殿をそのようなもので止めるなど、とてもとても。それは境界ですよ」

僕は走るのを止めて、愛紗と対峙する。不敵に笑みを浮かべて。

「境界、だと？」

「えぇ。詠さんの不幸誘発能力の有効範囲のですよ」

「なッ！？」
と愛紗が僕の後ろに詠を確認する。
「く、貴様……」
たたらを踏む愛紗。
「さぁ、来れるものなら来てみなさい、愛紗さん」
「柳々ッ！？」
「ひぃーッ！？ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
「……今日の所は見逃してやる」
そう言って踵を返していく愛紗。
ヤッホーイ。まさに強運様々だぜ。

「ニシシシ。どうもー、お館さんに詠さん、月ちゃん」
僕は愛紗を撃退？して意気揚々と三人の所に近づく。
「アンタ、今の何よ？」
「へ？」

会って早々、仏頂面の詠。

「惚けんじゃないわよ。あの剣のことよ。一体どこから出したのよッ！？」

「ほへ？『ツルギ』のことですか？」

「あぁ、そう言えば初めて会った時にも出してたような……」

北郷までも参戦。

「あれはただの奇術ですよ、奇術」

そう嘯（うそぶ）く僕。

「種も仕掛けもある、ただの奇術なのですよ」

「どんな仕掛けをしたら剣を自在に現れたり消したり出来るのよッ」

と詠は今まで『ツルギ』の刺さっていた場所を指差す。

「ニシシシッ。それを言ってしまっては奇術の意味がありませんよ。詠さんも軍師なのですからご自分で考えて下さい」

「う……それはそうだけど……」

「それにしても助かりました。詠さんがこちらに居たお陰で愛紗さんから逃げることに成功しましたよ」

詠が黙ったのを見計らって、ニシシシッと笑いながら言う僕。
「そう言えばなんで愛紗に追いかけ回されてたの？」
北郷が話を変える。
「そうなのですよ、聞いてくれますか、お館さん」
僕は身を乗り出して、主張する。
「愛紗さんってば、僕に剣の稽古をつけようとしてくるのですよ！？」
『――は？』
「僕は文官なのに……。ねぇ、酷いと思いませんか？」
「いや、まぁー、それは……」
「別に良いじゃない、それくらい。文官でも戦場に出ることもあるんじゃないの？護身程度には武を身に付けておいて損はしないんじゃないかしら」
「いやいや、違うのですよ。逆です、逆」
僕は手を振って、大袈裟に否定する。
「僕は武を身に付けることの方が身を破滅させるんですよ」
「いや、意味分かんないし……」

「ですから、僕には壊滅的に武術の才能がないのです」

只今、僕、説明中

あ、勿論、転生、チートに関しては伏せましたけど。

「へぇー、そんな人っているのね」

感心したような口調の詠。

「いや、不幸を誘発する人が何を言っているんですか……」

その後、四人で雑談に花を咲かせていた。

「そう言えば、アンタ、ボクのことはさん付けよね？」

「はい。詠さん、ですね」
「月のことはちゃん付けよね？」
「はい。月ちゃん、ですね」
「愛紗は？」
「愛紗さん」
「鈴々は？」
「鈴々ちゃん」
「朱里は？」
「朱里ちゃん」
「桃香は？」
「桃香さん」
「あんま聞きたくないけど……。その違いは？」
「ツルでペタな娘はちゃん付けですよッ！？」
「……」
「……とは口が裂けても言えません」

「もう、言ってるわよッ！？」

痛ッ！？デコピンされました。

5話　他人の不幸は蜜の味（後書き）

どうでしょうか？

こんな感じで主人公が口先だけで乱世を渡り抜く感じです。

また見ていただけると作者は感激です。

それではまた次回。

6話　政務官、劉璋。爆誕！？

―――――――――――――――――――――

「うーうー」

書類の山の横で呻く僕。

「もうー、多すぎですよーーー！？」

バーンと僕は手足を投げ出し、降参ポーズ。

「柳々さん、それは私たちの分だよ？」

「はい。知ってますよ、桃香さん」

やってみただけです。

て言うか僕にこんな量の仕事渡したら、２年は滞りますよ？

そこの所は朱里ちゃんたちが上手く回してくれてるので感謝してます。

「……というか、柳々さんも手伝ってよー」

「おぉ！もうこんな時間だ、仕事しなきゃ。それでは桃香さん、また」

シュタッと手を挙げて僕は執務室を出ていく。

「うぅー。裏切り者ーーー」

ハハハ。僕は確認の印をもらいに来ただけですからねー。

桃香の叫びを背に僕は自室へ戻っていく。

「おや？王累、どうかしましたか？」

僕の部屋の前に王累が立っていた。

「あ、劉璋様！？お仕事ご苦労様です！」

元気よく頭を下げる王累。

「……」

「ど、どうかしましたか？」

黙ったままの僕に不安そうな顔の王累。

「いや、僕って今、文官見習いなのですよね？」

「はい」

「言うならば、僕は王累の同僚ですよね？」

「そ、そそ、そんな！？私風情が劉璋様のど、どど、同僚などと、恐れ多いです」

「いや、そんなことないと思いますけど……」

愛紗たちも王累の武官としての働きには一目置いているし。

「それに僕はもう、君主じゃないのですから、様付けしなくてもいいのですよ？」

「いえ。私は劉璋様に忠誠を誓っています。それは君主としての劉璋様でなく、劉璋様個人にですので、私にはいつまでも劉璋様は我が主です」

そう言えば王累だけは僕を形だけでなく、君主として扱ってたなぁ。

「う～ん。でもなぁ……」

「そ、そのご迷惑でしょうか……？」

はうあッ！？そんな捨てられた仔犬のような目で見ないで！

「では間を取って、僕のことは柳々と呼んで下さい」

「え？……えぇぇ！？そ、そそそ、それは恐れ多すぎます！！」

「ううう。王累はそんなに僕の真名を呼びたくないのですか。オヨヨヨ……」

袖で目元を隠す僕。

「え、あ、ち、違うのです。決して真名をお呼びしたくないわけでは……」

あわあわと慌てる王累。

「……ふっ。冗談ですよ。王累は真面目ですからねー。徐々に慣れていってくれればいいですよ」

僕は笑いながらそう言った。

「それでは王累もお仕事頑張って下さいね」

「は、はいッ！」

と僕は王累にそう言って部屋に入る。

背中越しになにやら叫び声が聞こえるが……まぁ気にしない。

そう言えば王累は僕の部屋の前で何をしていたんだろう？

「早急な問題は五胡と南蛮なんです」

軍議の場で朱里が発言する。

「確かに先ずはその２つをどうにかしなくては魏や呉に打って出ることは難しそうだな」

朱里の言葉に星が頷く。

「さしあたっては先ずは南蛮へは侵攻、五胡へは砦の物見を増やす方針でいきたいと思います」

次に雛里が発言する。

「そうじゃな。なら儂が五胡への警戒の任につくかの……。焔耶、お主も来い」

「えぇ！？いえ、私は桃香様の側に……」

「えぇい、つべこべ言わずついてこればいいのじゃ」

「はい。桔梗さん」

と桔梗と焔耶のやり取りに横槍を入れたのは……。

「なんじゃ、柳々？」

僕でした。

何故、僕が軍議の場に居るかと言いますと……まぁ、雑用係です。

お茶出しやら、資料の配布やら色々やってます。

「五胡への心配はあまりないと思うよ」

「何を言っておるのじゃ、お主は……」

「柳々ちゃん、いくら五胡が最近、攻めてこないからといって油断してては駄目よ」

桔梗と紫苑にたしなめられる。

「いえいえ。五胡には適任者を配置してますから、心配ないと、そういう意味で言ったんですよ」

「適任者ですか？」

僕の言葉に朱里が反応する。

「お主、いつのまにそのようなことをしたのじゃ？」

「え？僕が太守だった頃ですよ？」

『――え？』

皆の視線が僕に集まる。

イヤーン、恥ずかしいぃー。

閑話休題。

「だって五胡が来たらのんびり出来ないじゃん？だから、彼女を置いておいたの」

「えぇと、その適任者さんって誰のことですか？」

劉備が首を傾げて聞いてくる。

あぁ、もう少し胸が小さければキュンとくるのになぁー。はい、閑話休題。

「……日和号です」

そう、僕はとりあえず手元にあっても使えない日和号と煙突は五胡と境目に放置してきた。

とはいえ、呼べば、すぐ出てくるのだけど……。

「日和、号……とな聞いたことない名じゃな……」

「まぁ、そうですよね。簡単に説明すると自動で警備してくれる絡繰ですね」

「そんな物があるんですかッ！？」

軍師二人が驚いている。

グへへへ。その顔いいなぁ……ジュルリ。

「「（ブルブル）……？？」」

「まぁ、欠点としては人と見れば誰でも襲うってことですかね……」

「それ、駄目じゃないですか……」

「だから、人の居ない五胡の警備に置いたんですよ」

劉備の言葉に僕は付け足す。

「しかし、その信頼性は……今までを見ればお分かりですよね？」

「確かに、柳々ちゃんが太守についてから五胡が襲ってきたという報告は聞かないわね」

紫苑の言葉に皆が納得する。

「では五胡については日和号がいるために現状維持と日和号には近づかないように砦に詰めている人には伝えておきましょう」

とこの議題を締めくくる朱里。

「続いて、南蛮についてですが……」

と軍議は続いていく。

ふわぁー。眠いなー。見てるだけだもんなー。

とは言え、何か発言できるわけでもないので僕は主に欠伸を噛み殺すことに集中する。

「……続いて周辺の諸国に対してですが……」

うつら、うつら。

ふへへ、膨らみかけの双丘が……ふへへ。

脇に控えた僕は頭がカクン、カクンと垂れ下がる。

あぁ、そのふっくらしたお腹が……。

ジュルリ。

背中か胸か分からない。それが素晴ら……。

「オホンッ！」

「……うにゃ！？」

何やら皆さんがこちらをジト目で見ている。北郷は苦笑いだ。

「……背中との区別くらいはつくもん」

「……私たちはこれからだよ、朱里ちゃん」

「……鈴々だってバインバインになるのだ」

うん？何やらチビッ子三人が何か言っていますけど、どうしたのでしょうか？

「柳々、会議中に居眠りをするとは何事か。弛(たる)んでおるぞ」

「えー。愛紗さん、だって僕、別にお手伝いであまり関わりないですし……」

「貴様が弛んでいると他のものまで弛むのだ！」

「……はーい、委員長」

「誰が委員長だ、誰が！」

「……えぇと。それでは会議を続けますね」

コホンッと咳払いをする朱里。

「周辺諸国についてですが……雛里ちゃん」

「うん。先日、柳々さんから頂いた書簡で内部の整理は大分片付きました。でも外部の問題がまだ残ってます。多くの諸侯は私たちを歓迎してくれてますが、まだ反対勢力も残っています。南蛮の問題と同時にこちらも対処が必要だと思いましゅ」

あ、噛んだ、抱き締めたい。

「（ブルブル）……??。……それで外交に関しては桔梗さんたちにお願いしたいのですが、よろしいでしょうか?」

雛里はそう言って元から蜀にいた三人を見る。

「む、儂らか……。まぁ、良いがあまり期待はせんでくれよ。儂らは民受けは良くても諸侯どもからは煙たがられとるからの」

「それでも新参の私たちよりは遥かに可能性が高いですから……」

「うん?残ってるのはこの赤印の所ですか?」

「あわッ!?柳々さん!?」

僕が雛里ちゃんを抱き締め……ではなく、話の中心の残りの諸侯の位置を確めるため地図を確認する。

「ふむふむ。ここの人は真面目ですから熱心に口説けばなんとか。あ、ここは自分の欲に忠実な人ですから目先の餌でも吊るせばすぐですね。こちらは頑固者ですけど……ここの人とは仲が良いですか

らね。ここを落とせば芋づる式にできますよ。後は……」

「ちょ、ちょっと待ってください。柳々は何を言ってるんですか？」

「え？諸侯たちをこちらに引き入れるのでしょ？それなら簡単ですよ。初めて会った時に言ったでしょ？僕はここに赴任してからずっと官たちの不正についてまとめてましたから。それに繋がりのある諸侯たちもある程度は調べたんですよ」

まさかこんなことに役に立つなんて。昔、とったなんとやらだね。

「……」

「あれ？余計でした？」

無言で僕を見つめる雛里ちゃん。

あ、どうしよう、抱き締め———。

「柳々さん！」

「はひッ」

「この件、お願いしても良いですか？」

「え？」

「おいおい、雛里、良いのか？言っては悪いが柳々殿は仕事の能率が悪いぞ」

星さん、直球過ぎます、グスン。

「はい、知っています。仕事なら白蓮さんの方が広くできますし、無難にこなします。ワガママを言わないだけは麗羽さんよりマシなだけですから……」

あれ？なんか、雛里ちゃんにも貶（けな）されてない？

あ、でもこれはこれでアリかも……。

「それに今から柳々さんの知っていることをまとめても更に時間がかかりますから。柳々さん自身がやった方が早いと思います」

ハァハァハァ。これが新たな目覚めか……。

そんなこんなで僕が目覚めている間に、政務官、劉璋が誕生していた。

６話　政務官、劉璋。爆誕！？（後書き）

投稿初日からＰＶ６０００越え、正直驚きでした。

そんな皆さまのために頑張ろうと思う作者なのです。

ご意見、ご感想待ってます。

誤字脱字報告もしていただけるとありがたいです。

拙い作者ですが皆さまがジュースを吹き出せる作品を作るため努力します。

また次回で……。

7話　忠義の将、王累（前書き）

※注　ジュースなど飲み物は飲み込んでから読んで下さい。

7話　忠義の将、王累

――――――――――――――――――――――――

「あれぇ？この辺にロリなパンツが落ちてる気がしたんだけどなー」

僕は地面に顔を付けて這っていた。

え？上の文章？……やだなー。冗談ですよ、冗――――ん！あれはッ！？……なんだ、ただのぼろ布か……。

隙間からボロい布を取り出す僕。

ピコピコピンッ！

僕のロリレーダーに反応あり、目標はあっちだーッ！！

え？だから冗談ですってば。

「う〜む。やはり見当たりませんね……」

僕は引き続き、地面に頬をつけて隙間を覗きこんでいた。

「うにゃ？柳々なのだ」

「うん？……確かに。おーい、柳々、何をしているのだ？」

とそこへ愛紗と鈴々がやってきた。

「ん？少し探し物を……」

と僕は超低姿勢のまま、二人に振り返る。

勿論、僕は地面から二人を見上げる形となるわけで。何が言いたいのかと言いますと、鈴々はいいとしていや僕としましてはよくないのですがむしろそっちの方が重要だと考えている所存ですがいや今はそれはいいのですがつまるところ僕の位置からだとスカートの中身が見え――――――。

ザクッ。

「劉璋殿、とりあえず姿勢を正してから聞きましょうか？」

目の前に偃月刀の刃しか見えません。

あれ？おかしいな？

「ほほう。どうやら劉璋殿の頭は余程地面がお好きのようだ。ならば私が切り落として一生地面から離れないようにしてあげましょうか？」

――シュバッ。

僕、即座に正座。

「いやだなー冗談ですよ、愛紗さん」

あれ、何故かな？愛紗は笑顔なのに背中から冷や汗が止まらない。

「ところで柳々はなにしてたのだ？」

「あー、髪留めを探してたんですよ」

「髪留め？」

「そうそう。王累がなくしちゃったらしいんだよね。だから暇な時間を見つけて探してるのですよ」

決してスカートの中を合法的に見えるからしてるわけではないのですよ。

「そうだったのか。王累の髪留めというといつも付けてるあれか？」

「そうですよー」

「確かとても大切にしていたのだ」

「そうなのですかー？」

「そうなのだ。この前、とても大切な人から貰った物だって言ってたのだ」

大切な人？ほへー、あの王累が。

隅に置けませんねー。いつの間にそのような人を作ったのやら……。

「それでは僕は引き続き髪留め探しをしますのでこれで……」

———ガシッ。

「柳々、確かお前は午後から政務だったよな？」

「ふふ～ん。そうでしたか？」

はい。逃亡失敗。

そのまま、襟を引かれて連行されていく僕。

私の名は王累。
劉璋様に忠義を誓った将だ。
「はぁ～……」
私としたことが大切な髪留めをなくしてしまうなんて……。
あれは……。
「あれ、王累さん？」
私がため息を吐いていると劉備様がやってきた。
「うわー。王累さん、髪下ろしてる」
「え、あ。こ、これは、その……」
「そっちの方が可愛いよ」
「か、可愛いッ！？い、いえ、私など……」
「そんなことないよ。王累さんだって女の子だもん」
「そ、そんな。劉備様に比べたら私など……」
「きっと柳々さんもそっちの方が気に入ると思うよ」

「りゅ、劉璋様が……」

そ、そそ、そんな……／／／／。

「ふふふ。王累さん、可愛い～」

「劉備様、あまりからかわないで下さい……／／／」

うぅぅ。恥ずかしいです。私、顔が真っ赤になってる。

「そう言えば王累さんは何で柳々さんに遣えてたんですか？」

「え？」

「いや、別に悪い意味じゃないんだよ？ただ、柳々さんって周りからの評判が悪かったって聞いたから……」

「確かに初めて会ったとき、私もあの方を他の人と同じような目で見ていました。しかし、ある夜、私はあの方に助けられました。あの方は無能な君主でなく、本当は優しく、心の強い方だと私はその時知ったのです。それから私はあの方に、劉璋様に忠誠を誓ったのです」

「へぇ、その話詳しく聞いてもいいかな？」

「はい。あれは……」

その日、私は日々の疲れが溜まっていたのかひどくダルかった。
頭は重く、体は鉛を全身に巻かれたかのように鈍かった。
だから、仕事の帰り道、ゴロツキに絡まれた際、苦戦を強いるはめになった。
「くっ……（体が思うように動かない）」
「けっ。手こずらせやがって。おい、テメェら囲んじまえ」
私の周りにゴロツキが群がる。
（くっ。この王累、不覚）
私は覚悟を決めたその時。
「ニシシシ、ニシシ、ニシシシッ」
変な笑い声が聞こえた。
「誰だッ！？どこに居やがる！！」
「天呼ぶ、地呼ぶ、人が呼ぶ」
そこに劉璋が現れた。

――――フラフラ。ゴツン。

『……』

「なんと無礼な。不意打ちとは卑怯だぞ！」

ただし、千鳥足で物に体をぶつけながらだったが……。

「いや、俺たち何もしてねぇから」

「うるさい、黙りゃ！我輩を誰だと心得るか！？畏れ多くも先の副将軍、水戸納豆様だぞ」

「なんだ？酔っ払いか？」

「戯(たわ)けッ！？あのような水で酔うほど私は弱くないわ！」

と木戸に向かって叫ぶ劉璋。

「我輩を誰だと心得るか！？」

「いや、さっきそれやったから」

「我輩は夜の王、夜王鳳せ……オロロロ」

「うげっ。こいつ吐きやがった」

「や、やるな、貴様ら」

『……』

おそらく、今この場に居合わせた者全てが帰りたいと願っただろう。

「ウップ。……とりあえず、貴様ら――――」

急に雰囲気が変わり、鋭い眼光を光らせる劉璋。

「――――水をくれないか？」

――――ズコッ。

全員、転けた。

「舐めてんじゃねぇぞ、この酔っ払いがッ！？」

ゴロツキの一人が劉璋に殴りかかる。が――――。

「双刀『鎚』」

「くぎゃ！」

どこからか降ってきた物に押し潰されるゴロツキ。

「ふーむ、３７点。そこで“くぎゅ”と言えたら、８０点なのだが……」

ニシシシと笑う劉璋。

「さぁ、どこからでもかかってこんかいッ」

と後ろ向きに啖呵を切る劉璋。

「な、なんなんだ、コイツは？酔ってんのか？素面なのか？」

「ちっ。一旦、逃げるぞ」

とゴロツキが逃げようとしたその時。

「そうは問屋が卸さない。千刀『ツルガ』」

ゴロツキの行く手に千本の刃の壁が立ちはだかる。

「今日はなんだか地面がぐらつくから大盤振舞いじゃーッ！？絶刀『鉋』から炎刀『銃』まで一斉召喚！？」

「やっぱ、酔ってんじゃねぇかぁぁぁ！！」

「正義はカツ丼」

とポーズを決めるも少しズレている劉璋。

「あ、あの太守様……」

「うにゅ？」

クルリと私の方を見る劉璋。

「あ、ありがとうございました」

私は頭を下げ、お礼を言う。

――――クシャクシャ。

下げた頭をクシャクシャと撫でられた。

「……体がダルい時は休むといいよ」

「――――え？」

「そんじゃま……」

と片手を上げて、去っていく劉璋、いや劉璋様。

「これが私が劉璋様をお慕いする理由です」

「……えぇと。その時、柳々さん酔ってたの？」

「それは分かりません。劉璋様はいつも飄々としておられて、時折突拍子もないことをしますから」

「そっか、王累さんも大変だね」

「そんなことは……」

「あ、居ました。おーい、王累ッ」

「あ、噂をすれば柳々さんだ」

と劉備様が向いた方に手を振りながら歩いてくる劉璋様が見えた。

「探しましたよ、王累」

「へ、私をですか？」

私は自分を指差す。

「そうそう。これ、見つけたから渡そうと思いまして」

と劉璋様の手には……。

「それは――」

小さな髪留めがあった。

「いやはや、僕の部屋の近くにあったから偶々見つけましてね。はい、大切なものなのですよね？」

と私の手にそれを渡してくれる劉璋様。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。それじゃ僕はこれ……」

「柳々ぅぅぅ！？また仕事をほったらかして！？」

「ヤバッ！それでは、王累、桃香さん。僕が居たことはご内密に」

そくさくと逃げる足取りで帰っていった。

「見つけたぞ、柳々！！」

「ヒィ！？ちょ、ま。偃月刀はマズイって。いやぁぁぁ」

「ふふふ。面白い人だよね、柳々さんって」

「……」

「王累さん？」

「……へ？あ、な、なんでしょうか？」

「ふふふん」

口に手を当てて笑う劉備様。

「王累さん、恋する乙女だね～」

「へ、あ、いや、劉備様～～」

そんなこんなで私の髪留めは戻ってきたのだった。

……本当に良かった。

事の真相。

あれれ？僕は確かに店で飲んでた筈なのに、何故に外で、しかも女の子から頭を下げられてるのだろうか？

あぁ。多分酔い潰れたのかな？

じゃあとりあえず部屋に帰ろ。

それでこの女の子はどうしたらいいだろう？

とりあえず肩を叩いて―――おととと。

あ、頭に置いちゃった。とりあえずワシャワシャ。←まだ酔ってます。

あぁ、もう駄目。ダルい。

「……ダルい時は休むといいよ」

うん。僕、今良いこと言ったよ。皆、メモったかな？

「そんじゃま……」

帰りますか。

とまぁこんな感じなのだが。この事は誰も知らない。

7話　忠義の将、王累（後書き）

どうですか？飲み物は飲み込んでから読んでくれました？

それではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしております。

8話　ペドとロリは違うのです！！

―――――――――――――――――――――

「雛里ちゃーん。資料を持ってきましたよー」

僕は片手に書簡を抱えて、部屋をノックする。

……。

あれ？反応がない。

居ないのかな？でも資料を持ってきてほしいと言われたんだけどなー。

え？あれって僕の妄想ッ！？

いやいや、そんな事はないですよ？

……ホントですよッ！！

「……失礼しま～す」

声をかけてから僕は扉に手をかける。

「……すー、すー」

中には小さな寝息をたてる雛里がいた。

……。

え、なに？これが例のフラグってやつ？

なにやら天の皆様の期待が僕の元に……。

って、しませんよ。

とりあえず毛布をかけて、出直しますか。

「なんじゃ、なにもせんのか」

扉を出たところで桔梗さんがいた。

「いや、なにもせんのかって……」

「お主のことじゃ、寝とる雛里にあんなことやこんなことでもするのだと思っとったんじゃが……」

「もし、したら……？」

「その素っ首はねる」

はぁー。

「しませんよ、そんなこと。第一、寝てる娘を襲ったところでそれはペドフィリアです。僕はロリコンですもの」

「ぺど……なんじゃ、それは？」

「いや、こちらの話です」

確かに無防備な寝顔はとても良いですがそんなことより僕は起きている幼女の後ろから撫で回したり舐め回したり擦り回してその反応を見た方が断然楽しいに決まってますよ。

「お主にも信条というものがあるということか？」

「まぁ、そう言うことですよ。それに……」

僕は桔梗を見据える。

「寝顔は楽しみたいじゃないですか」

「……そ、そうか」

「それでは、僕はこれで」

と一礼して僕はその場を後にする。

「なんとも、儂があのようなヒヨッコに気圧されるとは……。やは

り狸じゃな、劉李玉」

「あー、お茶が美味しいー」

「そうだな」

僕とお館はお茶を飲んでいた。

「柳々、政務はいいのかよ」

「お館さん、こそ」

『息抜きは必要さ』

声を揃える僕ら。

「全く、愛紗に見つかってもしらないわよ？」

と言いながらもお茶の用意をしてくれている詠。

「まぁまぁ、確かに息抜きは必要だよ、詠ちゃん」

と月もそれを手伝う。

「たまになら、ね。コイツらいつも息抜きしてんじゃない。これで太守と元太守っていうんだから呆れるわ」

『それほどでも～』

「誉めてないわよッ」

ピシッと二人まとめてデコピンをくらう。

「全く、月。ボクは愛紗呼んでくるから、この二人見張ってて」

『ちょ、詠（詠さん）後生やでー』

「うっさいッ。一々声合わせるなッ！」

とやんややんやとやっていると……。

「ほほう。随分と楽しそうですね、ご主人様？」

後ろならひどく冷たい声が聞こえた。

ギギギと首を動かすと……。

「政務をサボってお茶とはいいご身分ですね、ご主人様」

般若が後ろに見える愛紗がそこに居た。

「あ、愛紗……まぁ、お、落ち着いて……」

「いい気味ね。二人まとめて説教されるといいわ」
「……そうだ。柳々からもなんとか言って―――」
詠の言葉にお館が僕に助けを求めるが、そこには……。
「あれ、居ない？」
「お館さん、噂をすればなんとやら、ですよ。愛紗さんの名前が出た時点でもう既に逃げる準備は万端です」
と僕は塀の上に立ちながら言う。
そう言えば僕は武力－2だけど運動神経は前世のまま、なんだよね。
体力と武力は必ずしもイコールではないのですよ。
「ふふふ。それではお館さん、僕の分まで説教を受けといて下さい。それでは」
僕は塀を乗り越えて反対側へと降りる。
「ちょ、柳々、裏切るなぁぁぁ！？……愛紗、柳々が逃げちゃうよッ。追いかけなきゃ」
「ご主人様。私が何度あやつを取り逃がしているとお思いか？」
「……え？」
「既に策は講じてあります。ふふ、ふふふ。今日こそきっちり説教

してやるからな、柳々」

愛紗から何か黒いものが見えたと後にお館が語っていた。

「ふぅ。なんとか危機一髪でした。とりあえずは町に出て……」

「あら、本当に柳々ちゃんが来たわね」

「うむ。愛紗の言っていた通りだな」

「……え？」

僕が降り立ったそこには完全武装の紫苑と星が待ち構えていた。

「あ、れ？」

「さぁ、柳々ちゃん。大人しくついてきてもらえるかしら？」

「我々もあまり手荒な真似はしたくないのでな」

「あ、えぇと……そんなバカなぁぁぁぁぁ～～～～！！」

僕の叫びがこだました。

「およ？あの小さな背中に大きなマントは……」

僕は前方にとある幼じ……女の子を発見した。

「おーい、ねねねねねねねねねちゃ～ん」

「ねねはそんな長くないのですよッ！？」

はうあッ！このちまっこいのが堪りません。

蜀随一のロリ。ロリ軍師の頂点、ねねちゃん、こと陳宮ちゃんですね。

「知ってますよー。音々音ですよね、ねねねねねねねねねねねねちゃん」

「また増えてますぞーッ！」

うはーッ。両手を挙げて、荒ぶる鷹のポーズ。たぎってきてしまいますよー。

あるいは萌えてきてしまいますね。

「全く、柳々は他人の真名もまともに呼べないのですか」

「……ゴフッ」

「な、なんなのですッ。いきなり」

こんな娘に僕の真名を呼ばれるなんて……。僕、死んでもいいぜ。

「変な奴なのですよ」

いやん。そんな冷たい目で僕を見ないで……ハァハァしちゃうじゃないか。

とまぁ冗談はさておき。

「ねねちゃんはこんな所で何をしていたのですか？」

「なんでそんなことを柳々に言わなきゃいけないのですか」

うむむ。これは強情だ。ツン子か、ツン子なのか？

それなら仕方がない。あまりこの手は使いたくなかったのだが……仕方あるまい。

「用はそれだけなら、ねねは行くのです」

と背を向けたその時を狙って、ねねの両脇に手を差し込み持ち上げる。簡単に言えば高い高いの感じだ。

「うわっ。な、なにをするのですか！？離せ、離すのですよ！？」

「ほ～ら、ねねちゃん。言わないと一生このままですよー」

「ちょ、わっ。回るなです、回るななのですよ」

「ねねちゃんが話してくれないのがいけないのですよ？僕だって好きでこんなことをしているわけではないのですよ？」

「嘘をつくな、なのです。満面の笑みではないですか！？」

ウフフフ。

「さぁ、話してくれないと段々速くなっていきますよー」

「うわわ。分かった、分かったのです。恋殿、恋殿を探していたのです」

ワハハハ。クルクル。

「って、話したら離すんじゃないのですか！？」

ウハハハ。クルクルクルクル。

「や、ダメ。ホントに速ッ……」

クルクルク……。

オエェ。

目、目が回る～。

「自分でやっといてなんて有り様なのですか……」

呆れたように言うねね。

「僕の三半規管はそれほど優秀ではないようです……ガクッ」

「……ねね」

「あ、恋殿～。探しましたぞ」

――ガシッ。

「な、なな、何をするのですか、柳々」

僕はねねの肩を掴み、その小さな体に隠れる。

「……柳々」

「ど、どどど、どうも、呂奉先殿……」

「……？……恋で、いい」

「どうかしたのですか、柳々？なにやら震えているような……」

「い、いい、いいい、いえいえ、いえいえいえいえいえいえ。

ふ、ふる、震え、震えてなどいませんよ」

「……いや、声までハッキリと震えているのです」

「……柳々？」

「ひにゃッ！？あ、あぁ、そうでした僕は仕事があったのでした。ふむ、そうです、お仕事です。実に残念ながら僕はこの辺で……」

僕はクルリと方向転換しシュバッとその場を去る……。

———ガシッ。

……ことが出来ませんでした。

ギギギと頭を回すと袖を掴んだ恋がそこに居た。

「あ、あの……」

———ギュッ。

後ろから抱きつかれる僕。

う、うう。……うぎゃぁぁぁあああ！？

「れれ、恋殿、なにをッ！？」

「……柳々、いい匂い」

うにゃぁぁぁ！？駄目です、それ以上は……僕の体が保ちません。

いや、確かに女性の方に抱きつかれるのは男の子として喜ばしい限

りですがいや確かに僕はロリコンですが腰より上に当たる成熟した双丘も好きですよいやだからといって幼女に腰に抱きつかれて『おにいさま』と言われるのも捨てがたくいや論点がズレていまして何が駄目かと言いますと……。

———ミシミシ。

全力で抱き締められると骨が軋みますーーー！！

あの天下無双の呂布の腕力に僕の骨は悲鳴をあげてますよ！！

「あわわわ……ガク」

「……？」

もし願うなら幼女の腕の中で死にたかった……。

「———ハッ！」

今、死んだお爺ちゃんが……。

「大丈夫なのですか、柳々？」

「……大丈夫？」

「え、えぇ。なんとか……」

心配そうに僕を見る二人。

まぁ、恋に悪気はない。うん、分かってるよ。

でも少しは手加減を……。

「……じゃあもう一回」

「いや、タンマ！少しのインターバルをッ！」

「……？」

なんで僕だけ全力で抱き締めるの？犬たちは大丈夫だよね？

「はぁ。とりあえずねねちゃん、お尻を触らせて下さい」

「なにをサラリッと気持ち悪いことを言っているのですか！？嫌に決まっているのです」

あれ？今のならいけると思ったのですけど？ははは、失敗失敗。

「仕方ないですね。じゃあねねちゃんの胸で僕の手を揉んで下さい」

え？逆じゃないかって？ふふふ。これは我が師と仰ぐ、吸血鬼もどきな高校生の教えです。

逆転の発想というやつですよ。

「意味が分からないのですよ！？」

何故だッ！？この技が通じない、だと……。

「というか。柳々はもう少し自重すべきなのですよ」

「欲望に忠実である勇気、ですよ」

「……良いこと言ったつもりかもしれませんが全然良いこと言ってないのですよッ！？」

まさか、この技まで破られるとは……。後は歯ブラシプレイしか残されてないぞ。

あれ？この時代に歯ブラシあったけ？

「……ねね、ごはん」

「おぉ、すみませんぞ」

では恋殿、と二人は昼食を食べにどこかへいった。

8話　ペドとロリは違うのです！！（後書き）

あぁー。暑い。

あぁー。小角の方のネタが思いつかない。

あぁー。こっちばっかり思いつくのは頭が湧いてるからかな？

あぁー。暑い。

もう駄目だ。冷房と女房が被りそうだ。

……いや、それはないか。

ではご感想やご意見お待ちしてます。

ジュースを吹き出した方は報告して下さい。

その報告が作者のヤル気に直結しています。

ではまた次回。

9話　飲んでも呑まれるな

――――――――――――――――――――

「南蛮へ遠征ですか？」

「はい。ですから外務官たる柳々さんにもご同行――――」

「だが断るッ」

「――え？」

あ、固まった朱里ちゃん。頬っぺたプニプニしていいかな？いいよね！

「え、えと。なんで、ですか？」

「だって南蛮って暑いじゃないですか。それにジメジメしてて嫌ですよ」

「おい、柳々ッ。お前、そのような私的事で任を断るつもりかッ！？」

「い、いい、いや、冗談ですってば、冗談。だから得物は仕舞ってください、愛紗さん」

うぅ。冗談を言うのも命懸けですね。

「まぁ、実際なところ、南蛮は異国ですからね。僕らの言葉が通じるか分かりませんし、通じたとしても相手が応えるか更に分かりません。それならば有事の際臨機応変に対応出来る者を一人でも多く連れていく方がいいですよ」

「そうですね。確かに柳々さんの言う通りかもしれません」

よっしゃー！これであの暑くてジメジメなところに行かないで済むぜ。やっほーいッ！

「それに周辺諸国も多くはこちらに降ってますが、まだ降ってない人もいますからね。引き続きそちらの交渉をしますよ、僕は」

「そうじゃな。なら儂も残るかの」

――――え？

「焔耶、お主も残れ」

「えぇ！？またですかッ！？」

「いくら周辺諸国を手懐けたとは言え、城を空にするわけにはいか

ぬだろ」

「そうですね。かと言って大幅に割いても南蛮制圧が難しくなるだけですから……」

「柳々さんに桔梗さん、焔耶さん、後は白蓮さんと私が残ればやっていけると思うよ、朱里ちゃん」

と雛里の提案に朱里も頷く。

「それではその他の方は南蛮への遠征の準備に取りかかって下さい。本日の軍議は以上です」

「惜しかったの、柳々」

「え、なんのことですか？」

「お主、儂らがおらぬ間に羽を伸ばし放題にしたかったんじゃろ？」

おぉう。バレてましたか。

「ニシシシ。そうですね、それが出来れば最高でしたよー」

「はっはっは。物を隠さず言うではないか」

「まぁ、いいですよ。絶対桔梗さんの目を盗んで怠けてやりますからッ！！」

「……いや、そこまでハッキリと断言せんでも……」

ニシシシッと笑って僕は自室へ戻る。

「おや、あれは……」

フラフラと歩いていると中庭でなにやらしている団体に出会す。

「おぉ、柳々。なにしとるんじゃ？」

と徳利を掲げる桔梗。

「昼間からお酒って……。いいんですか？」

「我らは今日は非番なのだよ、柳々殿」

と答えるのは星。

「柳々ちゃんも一緒にいかがかしら？」
僕を誘ったのは紫苑。
その三人が中庭で酒盛りしていた。
「……いや、僕はまだ仕事が……」
「あら、柳々ちゃんも昼からは非番でしょ？」
「……なんで知ってるんですか？」
「仲間のことですもの」
三人ともうっすらと頬が赤い。
「はぁ、あまり僕は飲めませんよ。弱いんですから」
「よいよい。少し付き合うだけじゃ」
はぁ。なんでこんなハメに。
――――クイッ。

味なんて元々分からないから、ただ熱いものが喉を通って落ちていく感覚だ。

「よい飲みっぷりですな。ささ、もう一杯」

杯に並々と注がれるお酒。

———クイッ。

「……ぷはッ」

あれ、これ何杯目？

「そうじゃ、柳々に少し聞きたいことがあったのじゃ」

僕が何杯目かを飲み干すと頃合いとばかりに桔梗がそう切り出してきた。

「柳々、お主なんで桃香様には降ったのじゃ？」

「……え？」

「お主、争い事嫌いじゃろ。黄巾の時も反董卓の時もなにやら投げやりじゃったじゃろ。お主ならあの場から逃げ出すこともできたじゃろうに……。何故、そうしなかった？」

どうやら他の二人もそれには興味あるらしく三人で僕を見つめてくる。

「うん？僕は無能です」

『は？』

「他人（ひと）を束ねることも、他人を統率することも出来ません」

――――クイッ。

「そんな僕がどうすれば大国を手に入れられるか、考えました。僕には蜀を大国にする力がない。おそらく他の大国に攻め入られれば一瞬で呑み込まれてしまう。ならどうするべきか……」

――――クイッ。

「ならば他人に任せようと僕は思いつきました」

――――トクトクトク。

僕は桔梗の杯にお酒を注ぐ。

「僕にはない統率の才と国を豊かにする才のある他人に蜀をお譲りして、育ててもらおうと。僕はそれを側で見ていて――――」

並々と注がれていく杯。

「よく育ったらそれを頂こうと」

桔梗の杯をかっさらい飲み干す。

「そうすればいいのではと……」

「――なッ！お主、まさか初めから……」

三人の間に緊張が走る。

「そして大陸の幼女をこの手中に収めるのでしゅ」

『――は？』

緊張が緩む。

「ニシシシ、ニシシ、ニシシシシ」

「えぇと、柳々ちゃん？まさか酔ってる？」

「にゃにを言ってるんでしゅかッ！ろってなんかいましぇん」

『……』

「ニシシシシっ。こにょ程度にょおしゃけでろうはずにゃかろうも」

最早、何を言っているのか分からない。

「紫苑、あやつ何杯飲んだのじゃ？」

「えぇと……4、5杯かしら」

「本当に弱いのじゃな……」

だが本気の劉璋はこれからだった……。

「しぇいさん、飲んでまふかー？」

「の、飲んでおるよ」

「いいえ。飲んでまへんッ！？さぁ、グビッといちゃってくだしゃい！」

「い、いや、私は……んぐッ！？」

星の口に無理矢理徳利ごと突っ込む柳々。

「ニシシ、ニシシシ。ささ、グビクビいきましょー」

「んぐッ！んぐぐぐー……」

「これは誘う相手を間違えたかの……」

「え、えぇ……」

――ギギギ。

「あれぇ？お二人とも飲んでますかぁー？」

柳々がぐるりと桔梗たちを見る。

「の、飲んでおるぞ」
「そうですかぁ？」
ぐるりと戻る。
『……ほっ』
「――――ではもっといきましょーッ！」
ニシシッと笑い指の間に、計８本の徳利を掲げる柳々。
「さぁ、グビッといきましょー」
フラフラと、ユラユラと桔梗たちに近づく柳々。
「ま、まて柳々ッ！？」
「話し合いましょ！？」
「……」
ピタッと止まる。
「――――問答無用ぉぉ！！」
――――クビビビビッ。

「ニシシシッ」

その場には笑う柳々、ただ一人が立っていた。

「あ、劉璋様。こちらにいらっしゃいましたか」

「うにゅ？……王累、どうかしましたか？」

「少し劉璋様にお聞きしたい案件がありましたので……」

うげッ。仕事ですか……。

「すみません。僕、少し酔っていまして……」

と空けられた数多の徳利を見る僕。

「……？劉璋様、これぐらいじゃ酔わないじゃないですか」

「……え？」

「私がどれだけ劉璋様に仕えていると思ってるんですか……。劉璋様はこれぐらいじゃ理性が切れることはないですよね？……さぁ、行きましょう、劉璋様」

……え、えぇぇ！！

僕を引っ張るようにして連れていく王累。

うぅー。折角の休みなのに……。

9話　飲んでも呑まれるな（後書き）

う～ん。

どうやって他国と絡むか、それが悩み所だ。

ご希望があれば聞きますが……。

→他力本願。

それではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしてます。

１０話　劉璋と……えぇと、その、あれですよ……影の薄い人

―――――――――――――――――――――

「ふぁ～～～」

「なんだ、柳々寝不足か？」

僕の隣を歩く白蓮がそう訊ねる。

「いやまぁ……そんな感じですよ、白蓮“ちゃん”」

「……」

「どうかしましたか、白蓮“ちゃん”」

「いや、なんだろう。お前にちゃん付けさせるのは少し嫌なんだが……」

「……？よく分かりませんが……。なら“白蓮ちゃん”さんで」

「いや、それは……。根本的な部分が解決されていない気が……まぁいいか。桃香もちゃん付けだしな」

「そうですか」

なにやら一人で納得した様子の白蓮。

「で話を戻すんだが、寝不足なのか？」

「えぇ。少し仕事が……」

「あぁ、北郷たちが南蛮に行ったからな。その分の仕事を私たちで分けてるからな」

そうなのだ。普段、仕事をしている朱里は勿論、お館や桃香の分までであるのだ。

いくら雛里がいるといってもかなりの量なのだ。

「白蓮ちゃんはスゴいですね。僕より多いのに難なくこなしてますよね」

「ん？これでも元太守だしな。それにウチには朱里や雛里みたいな軍師がいなかったからな自分でやるしかなかったからな」

へー。結構な苦労人ですね。

それだから影薄いのかな？

「あ。今、私のこと影薄いと思っただろう」

「え、分かるんですか？」

「いや、少しは否定してくれよ……」

おや？僕、カマをかけられましたか？ハハハ、これは一本取られましたよ。

「そういえば、白蓮ちゃんは昼は済ませましたか？」

「いや、まだだが……？」

「なら、ご一緒にいかがですか？」

「あぁ、別にかまわないぞ」

「ニシシッ。ここの点心は美味しいですね。よく知ってましたね、白蓮ちゃん」

「あぁ、鈴々から聞いてな。って柳々、お前、太守だったんだろ？知らなかったのか？結構昔から有名らしいぞ」

「ほへー。僕はあの頃、自室と玉座しか移動しなかったので」

「それはそれでどうかと思うぞ、柳々」

「モグモグ……ん？」

「……いや、なんでもないんだ」

「ぷはッ」

最後にお茶を飲んでシメで。

「ふー。美味しかったな」

白蓮も一息つく。

「それにしてもなんで私なんか誘ったんだ、柳々」

「ん？それはどういった意味でしょうか？」

「いや、私なんかと食べても楽しくないだろ。私は子龍みたいに面白い話もできないし……」

なにやら悩んでいる白蓮。

ふむ。ここは何かアドバイスでもするべきですね。

お任せを。伊達に口先だけで生きているわけではないのですよ。

「それにしても美味しかったですね」
「あれ？私の話は無視か？無視なのか！？」
「冗談ですよ」
ニシシッと笑う僕。
「楽しいですよ、僕は」
「は？」
「楽しいですよ、僕は」
「いや、それは聞いたんだが」
「楽しいですよ、僕は」
「いや。いいんだ、他に言うことがないんだな、柳々」
「ニシッ。冗談ですよー白蓮ちゃん。僕はですね。今まであまり他人と食事をすることはなかったんですよ」
まぁ、ほとんど自室に王累が持ってきてくれたからね。
「こうやってただ何も話さなくても、こうやって一緒に食べてくれる白蓮ちゃんはとてもいい人ですよ」
「そんなものか？」

「僕っていつも飄々と、のらりくらりとしてるでしょ？」

「自覚はあるんだな……」

自覚どころか。これ、わざとですから。

「だから城の文官さんたちはなにやら一線を置いてる人が多いんですよね。それに昔からいる人は僕のこと知ってますからねー」

「……すまない。変なことを聞いて……」

「うん？別に気にしてませんよ？お館さんや桃香さんたちは分け隔てなく接してくれますし……それに――」

「それに？」

「皆さんのお陰で蜀も幼女率が上がりましたからッ♪」

「――はッ！？」

「ニシシシ。幼女ですよ、幼女ッ！？国の宝と言っても過言でないじゃないですかッ」

「いや、柳々、声が大きいぞ……」

視線が痛いのかなにやら周りを気にする。

「うん？」

僕は周りを見る。
「――それで、ですね。幼女と言うのは……」
「まだ続けるのかッ！？」

「はぁーーー」
盛大なため息をつく白蓮。
――パシンッ。
僕は目の前で手を叩く。
「なにしてんだ、柳々」
「今、白蓮ちゃんから逃げた幸せを捕まえたのです」
ため息をつくと幸せが逃げるって言うじゃないですか……。
「そうか。ありがとな……」
うん？なにやら元気がないですね。何かあったのでしょうか？
「白蓮ちゃんは午後から政務ですか？」

「うん？……いや、少し休憩だな。夕方からする予定だ」
「なら、市でも見て回りましょう」
「お、おい」
僕は白蓮の手を引いて、市を目指して歩く。

「ニシシシッ。やっぱり活気があって良いですね」
「分かったから、そろそろ手を離してくれないか、柳々」
「あぁ、そうでしたね」
忘れていました。幼女予備軍の白蓮の手を離す。
え？今、不明な単語があったって？
気のせいですよ。

「僕が治めていた頃とは見違える程ですよー」
「なぁ、柳々。言ってて虚しくないか、それ？」
「そうですかー？」
よく分かりませんね。
「白蓮ちゃんは盛者必衰って知ってますか？」
「……なんだよ、いきなりだな」
「栄えたものは必ず衰える。世の常ですよね。この市もいつかは無くなってしまうんですよー」
僕は賑やかな市を見渡す。
「平和も永遠ではなく限りあるものです。儚く、壊すのは容易い」
———ニシシシッ。
「だからこそ大切なもの。皆が願うのですよ。この平和を一秒でも長く、と……」
「……柳々？」
白蓮より一歩前を歩く僕。
だから白蓮からは僕の表情は読めない。

「僕にはそれが無理。いつか無くなるものに意味を見出だせない。この平和な世にも、温かな世界にも、そしてこの命にも……」

大人たちが声を出し、子供たちは走り回る。

「ニシシシ。たがら僕は無能であった。無能でよかった……」

「……柳々」

「――――なんてね」

クルリと白蓮と向き合う。

「嘘ですよー。ニシシッ、白蓮ちゃんはこんな下らない話を聞いてくれます。とてもいい人ですよ。お館さんだってそれぐらい知ってますよ」

「……は？なんでそこで北郷が出てくるんだよ」

「好きな人に自分をよく見せようと思うのは乙女として◎（にじゅうまる）ですよ。でもあまり自分を卑屈に考えるのは×ですね、白蓮ちゃん」

僕は白蓮の目の前で指をノンノンと振る。

「僕はこんな考え方しかできませんが自分が卑屈だとは考えません。没個性がなんですか、普通がなんですか、平均がなんですか。そんなことで人は決まりませんよ。もっと自分に自信を持って下さい、白蓮ちゃん」

なんせ僕なんか白蓮より下ですよ。

「白蓮ちゃんは素晴らしい幼じ……女性です。この劉李玉が保証しますよ」

「柳々……。すまないな、なんか励ましてもらっちゃって」

「いえいえ、構いません。一緒にお食事していただいたお礼ですよ、ニシシシ」

「なぁ、一つ聞いていいか？」

「はい」

「私の名前、真名じゃない方って言えるか？」

「……。あ、あんなとこに素敵な幼女がッ！？」

僕は立ち去る。

「どうせ、影か薄いよぉぉぉぉ！！！！」

１０話　劉璋と……えぇと、その、あれですよ……影の薄い人（後書き）

どうもー。作者こと、目目連です。

ちなみに柳々の“さん”と“ちゃん”の区別は柳々の主観によるものです。

皆様との見解に違いがあるかもしれませんが、あしからず。

それではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしてます。

１１話　嘘つき再び頑張る（前書き）

どうもー。目目連です。

とりあえず、すみません……。

劉璋の字ですが“李玉”と書いていましたが、正確には“季玉”でした。

他の二次創作でカッコいい劉璋が出ているのを読んで気づきました。

後、前の作品でも書きましたが、作者は魏ルートが大好きです。

それでは本編をどうぞ。

１１話　嘘つき再び頑張る

――――――――――――――――――――

「えぇと、こちらの予算は……」

ふむふむ。

只今、打ち合わせ中です。

そうそう、たまに思うのですが、頑張って凝視すれば服が透けるとかそんなチート能力備わってないかな？

てなわけで雛里ちゃんでテストしてみましょう。

――――じー。

「ですからここは……？。……あ、あの柳々さん？」

――――じー。

頑張れ、僕！？ヘブンはすぐそこだ！？

「ひぃー」

「こら、柳々。雛里が怯えてるだろ」

ペシリと白蓮に叩かれる。

怯える幼女も……じゅるり。

写真機ないので脳内保管で。

「すみません。頑張れば服を透かして見えると思えたので……つい」

「いや、正直に言わなくてもいいんだが……」

あ、雛里ちゃん、白蓮の後ろに隠れちゃった。

仕方ない白蓮も透かして……。

「だから止めろって言ってるだろがッ」

とそんなことをしていると乱暴に扉が開かれる。

「大変じゃぞッ！」

桔梗が声を張上げて入ってきた。

「どうしたんだ、桔梗」

「今、国境の警備隊から伝令が来たんじゃが……。魏の兵団が儂らの故郷付近に接近してるそうじゃ」

「なんだってッ！？」

「――ッ！？」

桔梗の報告を聞いて、白蓮、雛里が驚く。

そして僕は……。

――――じぃー。

頑張ってました。

桔梗の報告を聞くに、どうやら魏の兵団が国境付近で目撃されたようだ。

「それで誰が率いていたんですか？」

驚きはしても、そこは我が軍を支える二大軍師の１人。雛里は直ぐに情報の整理にかかる。

「伝令によると率いていた旗は夏侯。おそらくは夏侯惇の方じゃろ」
「夏侯惇って魏の大剣じゃないかッ。曹操のやつもしかして北郷たちの居ない隙を狙って……」
「まだ分からぬ。兵団と言っても数は少なく、本隊らしきものも目撃されとらん」
「はい。桔梗さん」
僕、挙手。
「誰か補佐の方は居ましたか？」
「ん？確か、他に旗は……程の牙門旗があったと聞いておる」
程……。
「ふ～ん。もしかして兵団が目撃されたのはこの辺りですか？」
と僕は地図を示す。
「そうじゃが……何か分かったのか、柳々？」
「あぁ、それは多分……勢いで、ですね」
『は？』
「確かこの辺りには賊の根城があったと思います。おそらくは魏か

らその賊を追いかけていたら、勢いで蜀に入ってしまったんだと思いますよ」

「いや、それは流石にないと思うが……」

「いやいや、白蓮ちゃん。相手はあの夏侯惇さんですよ。……鈴々ちゃんと同じ猪ですよ？大いにありえますね」

「……あぁ」

白蓮が納得する。

「まぁ、これも推測ですし。ちょっと行って聞いてきますよ」

「いや、柳々。ちょっと行って聞いてくるって……」

「大丈夫ですよ。僕、夏侯惇さんと知り合いですよ？」

「は？なんでお前、夏侯惇と知り合いなんだ？」

「僕は太守になる前、道化師として大陸歩いてましたから。その頃に……」

「相変わらず訳の分からないな、お前」

「兎に角、今は魏と事を構えるのは避けたいですよね？」

と雛里に確認を取る。

コクンと返事をしてくれる。

……じゅるり。

「柳々、涎」

「……はッ。という訳でここは話し合いでなんとかしましょう。つまり政務官たる僕の出番ですよ」

「……でなんで桔梗さんまで着いて来てるんですか？」

「なに、ついでに賊の根城を落としていくためじゃよ」

僕と桔梗は兵を率いて、魏の兵団が目撃された国境付近まで遠征中です。

「春蘭ちゃん、もう帰りましょうよー」

軍師、程イクは夏侯惇にそう進言して数回目。

「何を言うか、風。このまま賊を逃がしては華琳様に顔向けできん」

と夏侯惇も数回目の同じ答えを返す。

「でも、もう蜀の国境に近づいちゃってますよー」

「それがなんだと言うのだ」

（あぁ、これは何を言っても無駄ですねー。まぁ、蜀の方は今、南蛮への遠征で軍を動かしてますから大事にはならないと思いますけど……）

やや諦めムードの程イク。

「そこの者ども、待たれよ」

と夏侯惇たちの前に1人の妙齢の女性が兵を率いて立ち塞がる。

「何者だッ！？」

「それはこちらの台詞だ。その方こそ、何故兵を率いて我が蜀の国境に近づくか」

妙齢の女性は大きな得物を構えたまま、こちらを警戒しながら問う。

一触即発。

「――――って！？なんで臨戦体勢なんですか、桔梗さんッ！？」

とそこで武官には見えない間の抜けた声を出しながら男が走ってきた。

「柳々、遅いぞ」

「違います、僕は平均。貴女たちが異常」

僕が桔梗に追いつくと今にも戦いを始めそうな桔梗と夏侯惇が見えた。

「桔梗さん、僕の話聞いてましたか？」

「さての。儂は最近、物忘れが酷くてな」

「……そうですか。だから倉の酒をちょくちょく拝借してるんですね？」

「――なッ！？お主、何故それを……」

「今まで僕の心の中に留めておきましたが、これは紫苑さんに報告を……」

「じょ、冗談じゃ、冗談。覚えておるわい、話し合いじゃろ？」

「はぁー。すみませんでした」

僕は夏侯惇に向かってお辞儀する。

「……お前は誰だ？」

「……」

「……柳々。お主、知り合いではなかったのか？」

あぁ。忘れられてる可能性もありましたね。

「えぇと。劉璋と言います。一度お会いしているのですが、覚えてませんか？」

「知らん」

おぉ、間髪入れずに否定されたよ。

僕、めげそう。

「えぇと、陳留近くで……いや、いいです」

僕、諦め。

「僕は蜀で政務官をしている者です。えぇと、夏侯惇さん、何故、蜀の国境まで兵を率いて来たのですか？」

とりあえず話し合い開始で。

「我々は我が領土に入った賊を追っていただけだ」

「なんと、柳々の言った通りか……」

やっぱり、か。さて、どうしようかな？おそらくはただでは帰らないよな、夏侯惇さん。

「そうだ。ならお一つお得な話があるのですが？」

僕は指を一本立てる。

「僕らと一時共闘しませんか？」

『――は？』

桔梗と夏侯惇がこちらを見る。

「おそらく、夏侯惇さんが追っている賊の根城を僕らは知っています。そこで……」

「一緒にそれを叩く、と言うことですかー？」

夏侯惇の後ろに控えてた幼女――――。

……ウホッ。幼女ッ！？

「……柳々」

幼女に目を奪われていると桔梗から咎めた目線をくらう。

「すみません。幼女さんに目を奪われました」

「だから何故お主はそれを正直に言うのじゃ……」

人間、素直が一番ですよ？

「コホン。とりあえずそう言うことですが、いかがですか？」

と言うわけで只今共闘中です。

「……うわぁ。流石は魏武の象徴。凄まじい戦いっぷりですねー」

「春蘭ちゃんは戦ってる時が一番イキイキしてますからねー」

僕と程イクは後ろで采配中。

とは言っても相手は単なる賊ですから作戦も何も無しなんですが……。

「うーん。暇ですし、心地よい陽気で、絶好の昼寝日和ですよねー」

「確かに、風も少し眠くなってきましたよー」
まるで戦場にいるとは思えない本陣。
「劉璋様、少しは緊張感を……」
王累にたしなめられるが……。
「……ぐぅー」
「寝ないで下さいッ」
いや、ホントに暇なんですもん。
「いいじゃないですか。ほら、程イクちゃんも寝てますよ」
「……ぐぅー」
「う……」
「それでは僕も……ぐぅー」
「もうちょっと緊張感を……」
虚しくも王累の言葉は風に流れる。

「劉璋様、大変です。起きて下さいッ！？」

「……うにゅ？ごはんですか？」

「違いますッ！？敵の伏兵です！！」

――――は？

「やられましたねー。まさかただの賊が伏兵を使うなんて……」

僕は今、敵の伏兵に対峙している。

賊の根城を叩いている本隊と違ってこちらにはあまり兵がないのですよね。

「程イクちゃん、何かいい策はありますかー？」

「……ぐぅー」

「おぉう。寝ている。じゃあ僕も……」

「なんでですかッ！？」

「ここは起こしてくれないと困りますよー」

あれ、寝てたんじゃないのですか？

「それで策はありますか、程イクちゃん？」

「うーん。正直お手上げですよー。春蘭ちゃんたちの援護を待つまで守るのが定石ですねー」

そうですか……。

「王累、兵を下げて下さい」

「……え？……はい」

僕の指示に王累は伝令に走る。

「え？ちょっと劉璋さん？何を考えているんですか？」

「まぁ、あちらはあちらで大変ですから。こちらはこちらで対処しましょう」

と僕は歩いていく。勿論、賊の伏兵の方へ。

はぁ。帰って昼寝したいなー。

「なんだ？誰か出てくるぞ」
賊の前に出ていく僕。
「どうもー。僕は劉璋と言います」
とりあえず挨拶。基本ですよ？
「なんだ、テメェは？」
「蜀で政務官してますー。とりあえず話し合いませんか？」
「うっせぇ！テメェ、状況分かって――」
――ヒュン。
そこで賊の男の横を何かが通り過ぎる。
「なんだ？――――ッ！？」
男はそれを確かめると……。
細身の刀が地面に突き刺さっていた。
「まぁまぁ、そう言わずにお話しましょうよ」

と僕はにこやかに言うが、僕の前には悪刀『鐚』が置いてあった。

そこへ……。

「千刀『ツルギ』」

『ツルギ』の一本を僕は『鐚』の上に向けて投げる。すると……。

――バチバチ。

『鐚』の上を通り過ぎた『ツルギ』が音を立てると瞬間、男の後ろに刀が一つ刺さる。

『鐚』の電気で電磁誘導を起こさせて刀を射出する。

簡単に言えばビリビリ中学生のコインじゃなく刀版ですよ。

続いて、大量の刀を『鐚』の上に出現させる。

電磁力により、空中に留まる。

空中に千の刃が賊に向けて待機する。

「……さて、お話しましょう？」

僕はそう言ってちょんと刀を触ると。

――ヒュン。

また一つ男の後ろに刀が刺さる。

――ニシシシッ。

「な、なにが話し合いだッ。武力行使じゃねぇかッ！？」

「それが何か？誰も対等な話し合いなんて言ってませんよ？」

僕は首をコクンと横に傾ける。

「さて、貴方方が選択していいですよ？武器を置いて降伏するか、それとも……」

「殺すってのか？」

「いえいえ、残念ながら僕には人を殺(あや)める才が皆無なので……」

そうちょっと試してみたんだけど、どうやら武力－２ってのは人に対してみたいなんだよねー。

木とかそういったものに関してはキチンと切れたし。

「――死より恐ろしい目にあってもらいましょ？」

と僕はちょこんと『ツルギ』に触れる。

――ガラン。

「わ、分かった。降参だ！？」

男が武器を捨てると他の賊も次々に捨てる。

「賢明で助かります。王累」

「はっ。ここに」

「桔梗さんにこっちは気にせずにと伝えてきて下さい」

「はっ」

王累に伝令を頼み僕は本陣の椅子に戻る。

「ふぁ～。……眠ぅー」

そして僕は目を瞑る。

僕は基本的に夜型なのだ。……くぅー。

賊の討伐も終わり、互いが国に帰った。

そしてここは魏の玉座の間。

「全く、賊を追って他国へ侵入するだけじゃなく、敵に恩を売られ

てくるなんて、バカじゃないの？」
夏侯惇の報告を聞いた荀イクが罵倒を浴びせる。
「くっ……」
夏侯惇は唇を噛みしめる。
「華琳様、どうかなさいましたか？」
夏侯淵が何も口にせず、黙ってい主に問いかける。
「風、その政務官の男、なんと名乗ったのかしら？」
「……確か、劉璋と言っていましたねー」
「それにその男は剣をどこからともなく出したと言っていたのよね？」
「はい。どうやっているのかと聞いたのですが……はぐらかされてしまいましてー」
「そう……」
「華琳様？」
「秋蘭、覚えてないの？」
「……劉璋という男のことですか？確か、華琳様がまだ陳留の太守だった時に会った道化師のことでしょうか？」

「おそらく同一人物でしょうね。それにしても、蜀で政務官をしているとはね。やはり変わった男ね……」

すると何かを考え出す曹操。

「華琳様……？」

「少し興味が出たわね……」

ふふと笑う曹操。

「また、悪い癖ですか？」

「どうにかその男、こちらに招けないかしら？」

「それならいい案がありますよー」

と程イクが手を挙げる。

「いいわ。聞かせなさい」

「では……」

魏の玉座では悪巧みが行われていた。

１１話　嘘つき再び頑張る（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしてます。

１２話　嘘つき出立する

―――――――――――――――――――――

「これは困りましたね」

「何故、こうなったんだろうか？」

蜀の首脳陣がとある書簡に頭を悩ましていた。

南蛮制圧の遠征から帰ってきて、柳々たちの報告を聞き、一息ついた時にきた、一通の書簡。

差出人は……。

「……曹操ちゃん？」

「はわわっ」

僕が覗き込むと慌てたふうに書簡を片づける朱里だが、見てしまい

ましたけどね。

「それ、曹操ちゃんからの手紙ですよね」

「えっとですね、これは……」

「ふむふむ。この前のお礼がしたいと……。僕を招待する、ですか……」

「はわわ、なんで知ってるんですかッ！？」

「あ、カマかけてみました。当たってましたか？」

他の人の顔を見る限り、当たりのようだ。

「はぅ。知られてしまっては仕方がありません。そうなのです。これは今朝方届いた曹操さんからの書簡。内容は……」

書簡の内容は先日、賊討伐の助力とその際に軍師の命を守ったことに対する礼がしたいため、蜀の政務官、劉璋を我が魏に招くというものだった。

「そうですかー。なら出発の準備をしなくてはいけませんね」

「待て、柳々。お主、行くつもりなのか？」

準備に向かおうとしていた僕を関羽が引き止める。

「え？」

「これは罠かもしれないのだぞ。誰が好き好んで敵国の者を招くものか」

「曹操ちゃんが僕を招くことが罠ですか？」

「そうだ。我らの内情を探るつもりかもしれない」

「それなら心配ないですよ。僕が国の内情を把握してるわけないじゃないですか」

クルリと振り返る。

「いや、そこは胸を張らなくても……」

「僕を捕まえたところで何の得もないですよ。それにまぁ曹操ちゃんがそんな姑息な策を取るとは思えませんよ」

それではと、僕は自室に戻る。

「ふふ、ふーん」

僕はフラフラと歩いている。

……足りないなー。

え？何がって？そりゃー……。

「あ、りゅーりゅーにゃ」

おぉう。猫耳幼女ッ！？

「やぁ、美以ちゃん」

この娘はお館が南蛮から持ち帰ってきた孟獲――――美以ちゃんです。

……持ち帰ってきた、ふふふ。妖しい響きですよねー。

「りゅーりゅーはお散歩にゃ？」

「そんな感じですよ」

「暇なのにゃ？みんな、忙しそうにゃ」

「まぁ、僕は簡単な仕事ですから。お館や桃香さんに比べたら早く終わるのですよ」

「そんなもんにゃ？」

「まぁ、そうですが……」

「にゃ？」

「……あの、何故そんな離れた所から話すのですか？」

僕と美以の間には人が１０人位、横並びにできるくらいの余裕がある。

「にゃんか、りゅーりゅーはいい匂いがするから好きにゃ。でもにゃんだか近づくと危なそうなのにゃ」

ふむ。野生の勘ってやつかな？……厄介な。

あれをモフモフしたいのになー。

「にゃにゅッ！？にゃんだか背中が寒いにゃ！？」

まぁいいか。策を弄(ろう)して……いずれは。

そして、魏へ出発の朝。

さてと、行きますかね。

あ、でも一つ気掛かりがあるのですよねー。

「――劉璋様」

そうそう。貴女ですよ、王累。

「早いですね、王累。まだ日も昇って間もないですよ？」
「劉璋様こそ、お早いではありませんか」
「僕はウキウキして眠れなかっただけですよ」
「子供ですか……」
まぁ、余談はここまで。
「劉璋様、本当に行かれるのですか？」
「決まったことです」
「決めた、の間違いじゃありませんか」
全く、王累は過保護だなー。
「せめて護衛に私をつけて……」
「それじゃ、意味がないですよ。僕単身だからこそ情報の漏洩は防げるのですから」
他の将の説得に時間を割きすぎたか。王累まで回りきれなかったのが惜しいな。
「で、でも……私は心配なのです。もしも、劉璋様に何かあれば私は……」
「もし僕に何かあれば、桃香さんに仕えればいいですよ。そっちの

方が有意義ですよ」

「劉璋様ッ！？私はッ！？私は貴方だからこそ仕えたのですッ。今後一切、他の誰にも仕える気はありませんッ！？私の主は……貴方……だけなのですから……」

うぅむ……。

「……王累」

「劉璋様……」

「服、前後ろ逆ですよ？」

「――へ？」

慌てて来たのだろう。

服の逆を指摘してあげると王累は一瞬、キョトンとして、それから自分の服を確認して……。

「……き」

「き？」

「――きゃぁぁぁぁ！」

顔を真っ赤にして両手で体を隠し、踞（うずくま）る王累。

「うぅー。私としたことが……。とんだ失態を……」

「――――ぷっ」

僕は思わず吹き出す。

「ぷはははは。ははははっ。王累、やっぱり君は面白いね、ふふふ」

僕はいつもの“喋り方”すら忘れて笑う。

「え、劉璋様？」

「くくくっ。うん、大丈夫大丈夫。……王累」

「は、はいッ」

「僕は帰ってきますよ。別に死ににに行くわけではないですよ。だから心配しないでいいからね」

――――くくくっ。

「あ、そうだ約束しましょう、王累」

「約束ですか？」

「えぇ。もし、いやこれは語弊がありますね。では必ず、僕が帰ってきたら王累は僕のことを真名で呼ぶこと。いいですか？」

「――えぇ！？そ、それはいくらなんでも……」

「ちょうどよい機会ですから。拒否権はありませんよ」

「う、うぅ。……な、なら、劉璋様も私のことは真名で、兎(うさぎ)とお呼び下さい」

「うむ。いいですよ」

あれ？これ、死亡フラグじゃね？

まぁ、いいか。奇跡の強運、舐めんなよ？

１２話　嘘つき出立する（後書き）

さて次回はどうなる？

波乱の予感……。

ではまた次回。

１３話　嘘つき招かれる（前書き）

連日投稿週間ーーーーッ！！

一応、勝手にやってます。

また明日も夕方ごろに投稿予定です。

１３話　嘘つき招かれる

―――――――――――――――――――――

「ごめん下さーい」

曹操の城の前で声を張る僕。

「はい。何かご用でしょうか？」

「すみません。曹操様に招かれ、馳せ参じました、劉璋と申します。お取り次ぎお願い出来ますでしょうか？」

「少々お待ちください」

「本日はお招き頂きありがとう御座います」

魏の玉座の間に通された僕は頭を垂れる。
「よく来たわね。顔を上げなさい」
僕は頭を上げる。
「やはり貴方だったのね、劉璋」
「どうもー。お久しぶりです、曹操様」
玉座の間には魏の主要人たちが揃っている。
「……あぁ！？思い出したぞ！お前、陳留にいた道化師の男だ」
「……」
「……春蘭。貴女は少し黙ってなさい」
「は、はい……」
……思い出して頂いて嬉しいですよ。
「それで曹操様、この度はどういったご用件で？まさか本当にお礼というわけではありませんよね？」
「そうね。私も回りくどいのは好きじゃないわ。単刀直入に言うわ。……貴方ウチに来ない？」
「だが断るッ！」

……。

あれ？なに、この冷めた空気は？僕、間違えましたか？

「……理由を聞こうじゃないかしら」

あ、こめかみピクピクしてる。

「特にありません」

「貴様ッ！？華琳様を舐めているのかッ！？」

うにゃーッ！？夏侯惇さん、剣は、剣はヤバいですって！？

「ま、間違えました。正確には特に理由はありません、です」

「うん？……なぁ秋蘭、同じことだよな？」

「そうだぞ、姉者」

あるぇ？騙し通せなかった？

「そんなに劉備の所は居心地が良いのかしら？」

「え？特にはそんなことは……」

フルフルと否定する。

むしろ魏の方が幼女率多いですし……。

「なら何故かしら？もし貴方が私に降るなら、蜀の地を取り返してあげてもいいわよ？」

「いえ。それは別にいいです。僕に地を治める才はありませんから」

「なら、何を望むのかしら？」

「――――何も」

僕はハッキリと言い切る。

「さて曹操様、金も名誉も地位も望まず、志す信念も無い僕をどう口説き落としますか？」

――――ニシシシ。

「なら、何故貴方は蜀に居るの？」

「暫定的、ですね。偶々、劉備が蜀を奪い、そして僕を傘下に置いた。ただそれだけです」

もしくはただの流れ（ノリ）で、だ。

「貴方、随分と弁が立つわね。その才を見込んで劉備は貴方を政務官に据えたのかしら？」

ん？なんだか、曹操ちゃん、楽しんでますか？

「弁が立つなんてとんでも無いですよ」

僕は手を振って否定する。

「むしろ、逆ですよ。仕事は遅く、頭は回らない」

「それにしては私の問いに間髪入れずに答えてるわよね」

「そりゃ、ここの道中ずっと考えていましたから」

曹操ちゃんが聞いてきそうな問答の答えを……。

「それ以外は考えず、ずっとそれだけを……」

僕はそうやって今までやってきた。

官たちの不正をまとめる時も、それだけを毎日考えていたから、黄巾も反董卓も関わらないでいたのだ。

「やはり、面白いわね貴方。これが罠だとは考えなかったのかしら？」

「あぁ。それも考えましたが……特に考慮すべきでないと判断しました」

「それは何故かしら？」

「まぁ、僕がここで捕らえられても特に何も無いですよ？」

「でも貴方は捕らわれの身よ？」

「それだけですよ？」
他にはなにもありませんし、考慮すべきですか？
「貴方、変わってるわね……」
「ニシシシッ」

「用件はそれだけですか？なら僕はもう帰りますね。長々とお邪魔しました」
「まぁ、待ちなさい。良かったら数日留まって町を見ていきなさい。今後の蜀の発展に役に立つかもしれないわよ？」
「いや、僕は別に……」
別に見ても覚えれないし、分からないし……。
「案内に風をつけるわよ？」
「では少しだけ留まります」
え？なんですか、皆さん？冷たい目線を僕に向けて？
「ふふ。なら決まりね。寝泊まりの場所はこちらで用意するわ」

「どうもー」

ふむ。思いの外、長居しそうですね。

「いやー。いいですねー」

「そんなに気に入ったのですかー、劉璋さん？」

「うむ。流石は大国、魏ですよ」

只今、程イクちゃん、それと典韋ちゃん、後、暇してた李典さんと一緒に町を回っていた。

「そんなに気に入ったのなら魏に来てはいかがですかー？」

「うん？それはそれで……」

「劉璋の兄さん、町が気に入ったんか？」

李典が興味本意でそう訊ねる。

「いやいや。こんなに幼女に囲まれて町を歩けることがいいんですよー」

『……』

うん？なんですか？

「ニシシ。いいですねー、魏は」

「おーい。劉璋、居るかー？」

張遼が劉璋に割り当てられた部屋を訪れる。

「おーい。居らんのか？確か今日は居るゆうとったんやけどな……寝とるんか？」

招かれたとはいえ、劉璋は敵国の将。あまり無闇に彷徨(うろつ)くことは許されてはいない。それは劉璋も承諾したこと。

「開けるで……」

張遼が扉を開けるとそこにはものけの空の寝台があっただけだった。

「アイツ！？勝手に彷徨きよってからに……」

バンッと部屋の外へ出ると……。

「何してるのよ、霞？」

荀イクが書簡を持って歩いていた。
「劉璋のやつが居なくなったんやッ」
「なんですって！？」
と荀イクは部屋に入り、中を確認する。
「何してんのよ、見張りの兵はッ！？」
「ウチと代わったんやけど。人は出とらんってゆうてたで」
「じゃあなんで居ないの――――」
――――ガサガサ。
「どこやッ！」
部屋のどこからか物音がする。
「……ふぁ～。煩いですねー」
と劉璋が出てくる。
正確に言うなら寝台の下から……。
より正確に言うなら寝台の横に立っていた荀イクの足元からニョキッと……。

「おや？張遼さんに……」
と僕が上を向こうとすると。
「いやぁぁぁ！こっちを見るな！この変態がッ！？」
と足を振り上げる。
しかし僕は寝台の下へ入り込み避ける。
「ちょっと何をするのですか、荀イクちゃん」
また別の所から顔を出す。
「うるさいッ。死ねッ、この変態ッ！？」
また足を振り上げるが僕はまた寝台に潜り込む。
それを何回か続ける。
「はぁはぁはぁ……」
「え？興奮してるんですか、荀イクちゃん？」
「違うわよッ！？」
ダンッと足を踏み鳴らす。
「もういいわよッ。死ねッ！？」

と言って部屋を出ていく荀イク。

「……で。何してたんや、自分？」

「いや、ここが落ち着くんですよ」

と寝台から出てきて、パンパンと埃を払う。

「……あ」

「今度はどうしたんや？」

「いや、あのまま荀イクちゃんに蹴られた方が下からの目線で見れたなぁと思いまして……」

「……せやな」

「あれ？そういえば何故、張遼さんがここに？」

「あぁ、そうやそうや。劉璋、一杯やらんか？」

と杯を飲む仕草をする。

「まぁ、自分の好きなツルペタな娘は居らんのやけどな」

と笑う張遼。

「ニシシシッ。僕はツルでペタな娘は好きですが、ボンでキュッも嫌いじゃないですよ？」

と笑う僕。

「なら中庭、行こや」

「あ、その前に……」

僕は机にある札を持ち、扉の横に掲げる。

札には中庭と書かれていた。

「なんや、これ？」

「こうすると僕の居場所が分かるでしょ？夜、暇な時に作ったんですよ」

「劉璋、居るかしら？」

曹操が劉璋の部屋を訪れる。

「あら？これは何かしら……中庭？」

扉の横に掲げられた板を見る曹操。

「中庭に居る、ということでしょうか？」

横に控えていた夏侯淵が言う。

「かもしれないわね。行ってみましょう」

「ニシシシッ。ニシシ。ニシシシ」

「自分、結構いける口なんや。どんどん飲みぃ」

曹操が中庭で見たのは大量の空の酒を周りに散らばらせ、二人で酒盛りをしている張遼と劉璋の姿だった。

「あなたたちは何をしているの？」

「おぉ、孟ちゃん。一緒に飲むかいな」

――――クビクビ。

「霞、貴女ね。いくら非番だからといってもこれは飲みすぎよ。少し自重しなさいな」

――――クビクビ。

「ちゃうちゃう。これ、ウチが空けたんやないで。ぜぇんぶ、劉璋やで」

「――え？」

――――クビクビ。

「……ぷはぁ～。あれ？張遼さ～ん、もう空いちゃいましたよー？」

僕は空の酒を放り投げる。

「ちょ、貴方、ウチの酒蔵潰すつもり！？」

「あれ？曹操ちゃん、居たのですかー？」

「ちゃん！？」

「ニシシシ。ご一緒にどうですか？」

「かつてこの曹孟徳をちゃん付けで呼んだのは貴方が初めてよ」

「酔っ払いの戯れ言ですよー。許すのが覇王の器と言うものですよー」

「厳しく秩序を正すのも覇王の器だと思うのだけれど？」

「まぁ、どちらでもいいのですよー」

僕は残っていたお酒を飲み干す。

「それで曹操ちゃん、僕に何かご用事では？」

「えぇ。風から聞いた話だと剣を矢より速く飛ばしたそうじゃない。

それを見してもらいたかったのだけれど……無理そうね」

大量の空の酒を見る曹操。

「別に構いませんよ？」

「いえ、いいわ。酔っ払いに無理をさせて何かあっては悪いしね」

「いやいや。これくらいで飲んだ内には入りませんよ。後二日は飲み続けれますよ？」

僕は立ち上がり、服の埃を払う。

「貴方、さっき酔っ払いって言ってなかったかしら？」

「言葉のあやですよ。それともご覧にならないのですか？」

さて。剣を矢より速く飛ばした、ということはおそらくは千刀『ツルギ』と悪刀『鐚』の合作ですよなー。

う～ん。呼ぶの長いなー……そうだ名前をつけよう。

「……合成型変体刀。連刀『鋏（かすがい）』」

そう言うと『鐚』と『ツルギ』の一本が出てくる。

おぉ！やれば出来るじゃん。

「それがそうなの？ただの小刀と細身の剣のように見えるけど……？」

「まぁ、ご覧あれ、ですよ、曹操ちゃん」

僕は『鐚』の上に『ツルギ』を投げ捨てる。

――――バチバチ。

そしてそれは音をたてると、近くにあった木に柄まで刺さっていた。

「まぁ、こんな感じですよー」

「……秋蘭。貴女、今のが見えたかしら？」

「いえ。私の目をしても捉えることは出来ませんでした」

夏侯淵さんは弓使いでしたね。目が良いのですねー。

「と言うかそんなんホイホイ見せてええんか、劉璋？」

うん？

「……あぁ。構いませんよ。僕は前線には出ませんから。僕対策を取るのは労力の無駄というやつですよ？」

「やはり欲しいわね、貴方」

「だが断るッ！……と言いたいところですが妥協案が一つ」

「へぇー、何かしらね？」

ニヤリと笑う曹操。

籠絡の糸口を見つけたのでしょうか？

でも多分それは意味を成しませんよ。

「僕を働かさないことですね。軍部、政務、財務、地政、その他諸々に僕を関わらせず、タダ飯食らいとして雇うならこちらに来てもいいと思います」

――――ニシシシ。

１３話　嘘つき招かれる（後書き）

後、１、２話は魏で話を作るつもりです。

魏が大好きな作者でした。

それではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしています。

１４話　愛でること、それが至高

夜も静まり、草木も眠る丑三つ時。

今、動いているのは猫か蝙蝠、はたまた吸血鬼。そして……。

「……お邪魔しますよー」

夜這いを仕掛ける程イク、だった。

曹操があれやこれやと策を弄したがことこどく失敗。

そこで既成事実を作って留めようと藁にもすがる策が提案された。

「ふふ。確か霞ちゃんの話では劉璋さんは寝台の下で寝ていると言っていましたねー。さてどうしますかねー」

扉を開け、部屋へと入る程イク。

（おや？寝台に寝ていますねー）

寝台が少し、盛り上がっているのを見る。

（まぁ、そちらの方が助かりますけどねー）

とそちらへ近づき、寝台に入ろうとするとそこで異変に気づく。

（これは……）

そこには布がグルグルに巻かれたものしかなく……。

「……ダレ、ダ」

「――ッ！？」

後ろから暗く、低い声に程イクはバッと振り返る。

そこには――――――。

紅く、爛々と光る２つの目があった。

（誰？ここは劉璋さんの部屋のはず……まさかっ！？）

「……あれ？程イクちゃんですか？」

と次にその２つの光から聞こえてきたのは聞き覚えのある間の抜けた声だった。

「いやー、ビックリしましたよー。こんな夜更けにいきなり入ってくるんですもの」

ニシシシと笑う僕。

「それで僕に何かご用ですか、程イクちゃん？」

（あれは一体？）

「程イクちゃん？聞いてますかー？」

「……え？あ、はい。聞いてますよー、ちょっと劉璋さんとお話でもと思ったのですよー」

「え？僕とお話ですか！？いいですよ、いいですとも。ニシシ。幼女のお誘いなら僕は大歓迎ですよッ！」

（まだ少しあの紅い光が目に残ってますねー）

「――――程イクちゃん、何か考え事ですか？」

「――ッ！？」

背中に嫌な汗が伝わるのを感じた。

「いえ、劉璋さんが何故、起きてたのかと思いまして」

「あぁ。僕は夜型ですから、寝付きが悪くてですね。……」

（華琳様。おそらく、この劉璋という男は一筋縄ではいきませんよ）

「絶刀『鉋』」

僕は大きな岩の上に『鉋』を出現させる。

「続いて双刀『鎚』」

その上に『鎚』を出現させ、そのまま『鉋』の上に落下させる。

『鎚』の重みで『鉋』はそのまま岩に突き刺さり、岩が真っ二つに割れる。

まさに金槌（かなづち）で釘を刺すように。

「合成型変体刀。刺刀『鏝（こて）』」

「うわー。スゴいね、劉璋の兄ちゃん。岩が綺麗に真っ二つだよ」
ロリッ子に兄ちゃんって呼ばれちゃった……。ニシシシッ。
「はい。ただ粉砕するよりもこうした方が城壁の材料にもなりますよ、許緒ちゃん」
「確かにそうですね。全然気づきませんでした」
典韋も割れ口を見て、感心する。
「でも私たちには出来そうもないですね」
「いやいや、そんなことはないですよ。岩に楔(くさび)を打って、それに撃ち込めば出来ますよ」
石工のやり方ですよ。
「それにしてもスゴいね、劉璋の兄ちゃん。こんなことを思いつくなんて」
いやはや、照れますなー。
「でもこれは失敗作なのですよ。本来は城壁を壊すために考えたのですが……」
「え、でもこんな岩も割れるんですから城壁も壊せるんじゃないですか？」

僕の言葉に典韋がそう言う。

「いや、それがですね……。これ持ってみてください、許緒ちゃん」

「え？これを持てばいいの？」

僕が『鎚』を指さす。

「……う～ん。あれ？……う～～～ん。持てないよ、これ」

「え？季衣でも持てないなんて、それどれだけの重さなんですか？」

「相当重いですよ、典韋ちゃん。だから上から打ち込めても、壁の横に打ち込むことは出来ないのですよ」

あと利用法としては梃子の原理を使って重いものを動かすくらいですから、護身向きではないのですよね。

「じゃあ、じゃんじゃんとやっちゃおうか、流琉」

「そうだね。劉璋さんはそこで休んでいて下さいね」

「はーい」

と僕は近くの岩に腰かける。

あ、僕は今、許緒ちゃんたちの道の整備に付き添っています。

ただいま、ドコーン、ドコーンと岩や木を薙ぎ倒している二人を見

ている。

「……ローライズスパッツ、いいなー」

――――ニシシシ。

「……チラリと見えるパンツも中々」

――――ニシシシ。

え？なにを言っているのかって？

君らなら分かるはずだッ！？

「ウチの可愛い娘に手を出さないでちょうだいね」

「おや、曹操ちゃん」

僕がナニカを眺めていると後ろから曹操に声を掛けられた。

「可愛い蕾を無理矢理開かせることは許さないわよ？」

「ニシシシ。大丈夫ですよ、曹操ちゃん。僕は愛でる専門ですー」

「それならいいわ。……それで気持ちは変わったかしら？」

僕の隣に来て、同じように許緒たちを眺めながら曹操は訊く。

「いろいろ策を巡らせてくれたみたいですけど、全然ですねー」

「そう。地位も名誉も、金欲すらなびかないなんて貴方が初めてよ」

「ならお手上げですか？」

「いいえ。この曹孟徳は欲しいと思ったものは何がなんでも手に入れるのよ」

大したものだと素直に思う。だからこそ覇王なのだろうなこの少女は……。

いや、桃香やお館だってそうなのかな。

皆、少なからず大切な思いを持って、大志を抱いてこの地に立っているのだろう。

うん？羨ましい？……いいえ、ケフィアです。

まぁ冗談は置いといて。

「……劉璋、なら――――」

と切り出す曹操。

「――――私の体ならどうかしら？」

「……は？」

「私の体は貴方の趣味に近いと思うのだけど？」

「えぇと……曹操ちゃん？」

「……なによ」

恥ずかしいなら言わなければいいのに。

「お気持ちは真に嬉しいのですが……。僕は愛でる専門なので、手元に置くことはしないのですよ」

「あっそ……」

「それに……」

「それに？」

「うん？何を言おうとしたか忘れました」

「なによ、それ。まぁいいわ。私はもう行くわ。貴方は……」

「もう少し愛でてます」

「そう」

「僕は何を言おうとしてるのでしょうか……。言ったところで……」

僕の呟きは岩を砕く音にかき消された。

１５話　嘘つき帰路につく……前に（前書き）

短めです。

今回で魏は終わりです。あんまりからめれなかったです。

１５話　嘘つき帰路につく……前に

―――――――――――――――――――――

「うにゅー」

寝台でゴロゴロする僕。

いや、もうやることがないので。

「劉璋殿、居られますか？」

そんな時、部屋の外から声がかかる。

「どうぞー。お入り下さいー」

僕は外の人に声をかける。

「失礼します」

と中に入ってきたのは……。

「郭嘉ちゃんでしたか……」

「前にも言いましたが、そのちゃん付けはどうにかなりませんか？」

「それは無理ですよー」

と僕は寝台から身を起こそうとするが、止める。

「あぁー。すみません、このままでいいですか？」

「どこか体調でも悪いのですか？」

「いえ、ただ体を起こすのが億劫なだけですよー」

ゴロゴロする僕。

「……そうですか」

「それで郭嘉ちゃんはあれですか？僕の説得ですか？」

「……隠しても意味は無いのでしょうね。その通りです」

「それはご苦労様です」

「ですが、私としては貴方をこちらに招くのはあまり乗り気ではないのですよ」

おや？そうなのですかー。それは助かりますねー。

「正直なところ、私は何故、華琳様がそこまで貴方に拘るのか分かりません」

そうですねー。僕も分かりませんよー。

「貴方の何がそこまで気になるのでしょうね」

「さて、僕にはよく分かりませんよー」

「話していれば分かります。貴方はいつも思いつきで喋っていますね」

その通りですよー。

「しかしそれでいて思慮が浅いわけでもない。貴方自身が言っていたように頭の回転が遅いだけ」

ズバッと言いますね。

「おそらく、たまに思慮が深いのはその事柄について事前に考えていたのでしょう。それこそ、初めの華琳様の問答の答えのように」

……へぇー。

「それで貴方は――――」

「郭嘉ちゃん……」

僕は顔を少し動かして、半分だけで郭嘉を見る。

「少し眠くなりました。すみませんが話の続きは、また今度でいいですか？」

「は？いや、眠くなったって……」

「――また今度でいいですか？」

「……えぇ。分かりました、そうしましょう」

郭嘉は渋々ながらもその場から席を外す。

「……眠ぅ」

あぁ―。駄目だよな、やっぱり。

早く、帰んなきゃ。

「――――帰る、ですって？」

玉座の間にて曹操と対面中。

「はい。思いの外、お邪魔してしまいましたからねー。そろそろお暇させてもらいますよ」

「そう焦ることはないわよ。こちらも別に負担には……」

「なっていなくてもいても、変わりなく帰りますけど」

「……そう。分かったわ」

確かに魏はいい国ですけど、これ以上滞在するのはちょっと……。

「そうね、確か最近この付近で人拐いが出たそうよ。道中、気をつけなさい」

「あぁ、それ僕ですから大丈夫ですよ」

「――――は？」

「可愛い幼女が居たからついつい……。ニシシシ」

「はいはい。もう用は済んだかしら。仕事に戻りたいのだけど？」

「はーい。お邪魔しましたー」

「なんや、もう行ってまうんか？」

「はい。もうそろそろ帰らないと心配してる過保護な娘が居るんですよ」

僕は中庭で張遼とまた酒盛りしていた。

「なんや？もしかして劉璋のこれかいな？」

小指を立てる張遼。

「いやいや、元部下ですよ」

「なんやねん。つまらんな」

互いに酒を酌み、飲む。

「すみませんねー。浮いた話も出てこなくてー」

「まぁ、かまへんけど。そういや一つ聞きたい事があったんや」

と張遼が杯を置く。

「月たちは元気しとるか？」

「えぇ」

「なんやの、驚かへんのかいな？」

「いやー。張遼さんなら知ってそうだなーと思って」

「まぁ、確かに長坂で恋から聞いとったんやけどな」

「それなら何故、僕に確認を？」

「なんとなくや。劉璋、アンタから見て月は楽しそうか？」

「……。えぇ、毎日が春のように」

「そうか。そりゃ良かったわ」

「後、張遼さん……」

「なんや？」

「お酒が空です」

とフルフルと酒を振る。

日もまだ昇らない夜更け。

東の空がうっすらと白くなりつつある。

「さてと、行きますか」

僕は歩き出す。

僕を待つ、幼女の下へ……。

……あ、間違えた。

１６話　嘘つき、帰路にて幼女を見かける（前書き）

ふぅー。勝手に連稿週間後１日ですね。

頑張ってみますのでよろしくお願いします。

１６話　嘘つき、帰路にて幼女を見かける

――――――――――――――――――――

「ふぅー。一休み、一休み」

僕は魏から帰る途中、森の中で小休憩中です。

行きはそう感じなかったのですが、中々遠いものですね。

行きはよいよい、帰りは怖い～♪

なんてね。

まぁ、いいんだけどね。

「――――ぴぃー！逃げるのじゃーッ！！」

ん？何か聞こえて……。

――――ダダダダダッ。

あ、今、物凄い幼女が目の前を走り抜けて行った。

うん。あれはねねちゃん以上のロリッ子ちゃんだね。

ん、追いかけないのかって？いやいやこの僕を甘く見ないでいただきたいですね。僕はあのロリッ子帝国から見事生還したのですよ？そんな僕が道すがら幼女を見かけたからといって我を忘れて追いすがるような真似をするわけないじゃないですか。えぇ今の僕は正に理性の権化といっても過言でないほどに達観しているのだよ。そう僕は成長したのだ。人間的に、ね。だから無闇やたらと幼女だからといって飛びつくわけではないのですよ。僕は悟りを開いた紳士なのですから。空のように広く、海のように深く、森のように清く、それが新劉璋（ニューー）さんですよ。というわけで……。

「待ってくださいッ！？僕のマイスイート幼女さーーんッ！？」

幼女の後を我を忘れて追いすがる男がそこにいた。

まぁもちろん、僕なのだが。

「お嬢様、早くー。蜂がそこまで迫ってますよー」

「七乃ー、妾はもう走れんのじゃ。おぶってたもー」

「無理ですよー。私だってもうヘロヘロなんですから」

美羽さまが蜂の巣を突っついてしまい、今私たちは蜂に追われて森を右往左往。

「お困りですか？幼女さん！？」

そんな時、目の前に変態さんが現れた。

「お困りですか？幼女さん！？」

僕、格好よく参上ッ！？……した予定。

「な、何者じゃ、お主！？」

うひゃーい！近くで見ると益々幼女！？ビバ幼女！？オールハイド幼女！！

「ニシシシ。通りすがりの紳士です」

僕、友好的な笑顔……。

「な、なんだか胡散臭いのじゃ」

……失敗。

「そんなことよりお嬢さま、早くしないと蜂が……」

「おぉ、そうじゃったのじゃ。お主、妾たちは忙しいのじゃ立ち去るがよい」

あぁー。幼女さんが行ってしまう……。

ん？あれは……蜂いいい！！

え？なに、これ？ドッキリ？カメラ、どこ！？

って！？だからそれどころじゃないって！？

「はぁはぁはぁ。なんとかなった……。まさか、絶刀『鉋』と薄刀『針』がこうも役に立つとは……。両極端な二つがあんな使い

方が出来るとは……」

人間死ぬ気になればなんでも出来るって本当なんだなー。

「あれは、合成型変体刀『鑑(かがみ)』と名付けよう」

まぁ、今後あれを使うようなピンチになるのは避けたいけど……。

「さてとりあえず、あの幼女さんを探しますか……」

あんな完全無欠な幼女を逃がすわけにはいかないのですよー。

「さぁー、張りきって探しましょー！！」

「――――だから。何故、こうなる……」

只今、僕は蜀の門前にいた。

「いやいや、待て待て。確か僕は超絶幼女を探しにいったはずなのだが？」

「お帰りなさいませッ！」

あ、王累だ。

「どうもー。ただいまです」

「お疲れ様です。……り、り、りゅ……柳々様」

あぁ、そう言えば約束してましたね。

「ありがと、兎」

「は、はい。／／／／」

まぁ、いいか。

「柳々さんが寝不足？」

「はい」

朱里の自室で王累はそんなことを言い出す。

「柳々様は前々よりあまり眠りの深い方ではなく何度か夜遅くに灯りの点（とも）っているのを見たことがあるのですが……。ここ最近は

それが更に酷いようで……」

「確かにフラフラと歩いているのはよく見かけますが……」

「はい。ですから薬学にも通じておられる朱里殿に何かよい薬はないものかとお聞きしたく参ったのです」

「確か、安眠に効く薬草の在庫はまだあったと思います。そうですね……少しお時間をいただけるのなら私が煎じてお届けしましょうか？」

「はい。そうして頂けると助かります」

「分かりました。では出来上がり次第兎さんにお渡しに行きますね」

「はい、……え？いえ、柳々様にお渡しいただければそれで。私を介さなくても構いませんよ、朱里殿」

と朱里の言葉に意外そうな顔をする王累。

「いえいえ。兎さんが直接薬はお渡しになってください。そちらの方がいいですよ♪」

「……／／／／／。は、はい、お心遣い感謝します」

あぁー。

――――フラフラ。

足りない。足りない。足りない。足りない足りない足りない

……」

心配そうに見つめる王累にお得意の嘘八百で誤魔化す僕。

「あ、あのもしご迷惑でなければこれを……」

すう、と手に小さな薬紙を乗せて差し出す王累。

「これは？」

「はい。朱里殿にお願いしまして眠りをよくする薬を煎じてもらいまして、その……」

「僕にこれを？」

「……は、はい。／／／／」

「ありがとうございます、兎」

と僕は薬紙を受けとる。

「すみませんね。なにやらご心配をお掛けしたようで」

「い、いえ。私に出来るのはこれくらいしかないので、その……。柳々様がお元気であるのなら、それで」

「うぅー。いい子だな、兎は。これでもう少しロリければ、僕襲っちゃいますよー。」

「あ、あの。柳々様、お口に出してますよ？」

「はへ？……はうあ！？これは失礼」

「いい、いえ。その私も……柳々様さえ良ければ、別に……ゴニョゴニョ」

「――え？」

「あッ！？いえ、なんでもないんです。それでは、私はこれで。失礼しました！！」

ダダダッと駆けていく王累。

「はて、何でしょうか？……まぁいいか。それにしても、この薬――」

僕に効くのでしょうか？

１７話　嘘つき、策を弄する（前書き）

これで丁度１週間連続投稿なはず……。

なんだろう。この無意味な頑張りは……。

いつの間にやらお気に入りも２００件を越え、累計ＰＶも１４万を越えて……感激です。

さてここで連続投稿も一区切りです。

リアルが忙しければ忙しいほどに、こちらを更新するダメ人間な作者ですが今後とも応援よろしくお願いします。

では本編をどうぞー。

17話　嘘つき、策を弄する

――――――――――――――――――――

今日も張りきってお仕事頑張るぞー！！おぉーッ！

と僕は手を振り上げる。

「気合いはいいですから。早く仕事を済ませて下さいよ」

「了解であります」

ビシッと敬礼しておく。

只今、軍師陣に囲まれてウハウハ……じゃなくて大事なお仕事ですよ。

「……ニシシシッ」

「アンタ、気味悪いわよ」

詠にピシリッと注意される。

おぉと。顔のにやけが抑えられないぜ。

だって蜀の軍師陣ってロリ率高いからなぁ。

朱里ちゃん、雛里ちゃん、それにねねちゃん、お手伝いに月ちゃんと、まぁグレーな所だけど詠ちゃん。

――――ニシシ。

「これ、本当に役に立つの？」

「いや、まぁご主人様や桃香様のお手を煩わせるわけにはいけませんから……」

「確かに他の将で政務を手伝えるのは少ないものね」

「ニシシ」

『はぁ……』

軍師の不足を嘆く、軍師たち。

「柳々さん、これは……」

「ふえ？その地主さんは……」

朱里に聞かれた案件について答える。

「へぇ。案外やるのね、アンタ」

「ニシシシ。まぁ、これくらいは……」

「じゃあ、柳々、こっちはどうなのです？」

ねねが書簡を見せる。

「はいはい。それは無理」

「諦め早ッ！？」

「いやいや、ねねちゃん、僕だって自分の力量ぐらいは正確に把握してますよ。それは……そうですね。紫苑さんか軍部の関わる人に聞いた方がいいですよ」

僕が出来るのは外務に関してだけだもの。それ以外は門外漢で、戦力外だね。

「さて、チャキチャキと終わらせましょう」

僕は自分の出来る仕事をこなす。

あ、そうだ……。

――――じぃー。

「柳々、どうしたのですか？」

「今なら。今らな服を透かすことができると僕は信じているッ！？」

「アホなことしてないで、早く終わらせるのですぞ」

あぁー。段々と扱いがぞんざいになってきた。もう雛里ちゃんしか反応してくれない……。

――――じぃー。

雛里ちゃんに向けてやる僕。

「ひぃ！？」

「やめなさいよッ！」

あぅ。詠さんで遮られたー。だがそんな障害なんのその……。

「皆さん、お仕事してくださいよー」

「やっぱり、柳々を連れてきたのは失敗だったのです」

「……そうかもしれません」

さぁ、作戦決行の日です。

フフフ。ついにこの日が来たのですよ。

「さぁ、イッツ、パティーですよー」

さぁて先ずは目標を発見しなくては。

ふむ。この時間帯だとどこか日当たりの良い場所に……。

「――ふにゃ～ん」

――キュピーン。

ロリレーダに反応アリ。ふむ。九時の方角だな。フフフ、既に我が手中ッ！？

「むにゃ～」

見つけましたよー。猫耳幼女四人が日向の芝生でお昼寝してますね。

「……ふみゅ～ん」

ウッハッーッ！？寝返りキターッ！？

おっと、ここで取り乱しては折角の寝ずの策が台無しになってしまいますよ。落ち着け自分、落ち着け劉璋。そうだ、素数を数えるんだ。２、４、６、８、１０。いや、それは偶数だ！？……よし、落ち着いた。文章もまだ半分だな。

「……ん～。……うみゅ？りゅーりゅーなのにゃ？」

「ありゃりゃ？起こしてしまいましたか？」

こっちとしては好都合だぜ。やってまれ、劉璋。いてまえ、劉璋。

「どうしたのにゃ？みぃに何か用事かにゃ？」

「えぇまぁ。美味しいお饅頭が手に入りましてね。お裾分けを、と思いまして……」

僕は懐から紙袋を取り出す。

「お饅頭にゃ！？食べるにゃ！？」

「お饅頭、お饅頭！！」

「お饅頭にゃー」

「お饅頭にょ」

おぉーッ。いつの間にか美以ちゃんだけでなく、ミケちゃんたちまで起きてきましたよ。益々良好ですよ。

「なら、あちらでお茶などもご一緒にいかがですか？」
行っけー行け行け行け行け劉璋。押っせー押せ押せ押せ押せ劉璋。
「……」
あれ？こちらに来ない？
「えぇと、どうされました、美以ちゃん？」
「いや、にゃんだかそっちに行ってはいけない気がするじょ」
ノーォ！？まさかの破綻ですかッ。
いやいや、待て待て。冷静に、そうクールになるんだ、劉季玉。
確かに、彼女らの野生の勘は侮れない。だが、それを逆手に取るなど雑作もないことだ。
「そうなのですかー？それは残念ですねー。こんなに美味しそうなのに……」
と一つ取り出して美以たちに見せびらかせる。
もちろんポジショニングは完璧だ。風上に立っている。
「にゃッ。美味しそうな匂いなのにゃー」
おッ。トラちゃんが釣れましたよ。

「それにフカフカな毛布もご用意出来てますよ？」

「フカフカの毛布にょー」

ハッハハハ。シャムちゃんゲットだぜ。

さぁ、残るは二匹……じゅるり。

「おぉと、手が滑ったー」

→棒読み。

僕は控えに持っていたマタタビの粉末をぶちまける。

「にゃにゃッ！？……にゃろ～ん」

はい。ミケちゃん確保ッ！？

残る、美以ちゃん！貴女だけだッ！？

ニシシシッ。貴女にとっておきの秘策を――――。

「わふっ」

……わふっ？

と僕の足元からなんとも間の抜けた鳴き声がする。見ると……。

「セキトにゃ」

そう。スカーフを巻いた子犬。とその他諸々の動物たちが僕の足にわらわら群がっていた。

……え？あれ？なんでこんなところにこんなに動物たちが？

迷いこんだ……とかはないよな、流石に。……て、ことは……

まさかッ！？

「……セキト、そんなに急いじゃ、めっ」

――――ダッ！？

僕は声を聞いた瞬間にその場から離脱する。

「あ、恋にゃ」

「恋さまー」

「恋にょー」

「恋しゃまー」

「……美以たち、なにしてる？」

「今、りゅーりゅーにお饅頭を……あにゃ？いないのにゃ」

そこには紙袋だけを置いて、劉璋の姿はなかった。

「何故だぁぁぁぁぁ！！何が悪いんだよぉぉぉぉぉ！？」

おそらく不純な動機であるが、まぁいいよね。

１７話　嘘つき、策を弄する（後書き）

とりあえず、今後は蜀での日常をメインで書いていく方針です。

幼女以外とも絡んでいきますので……。

それではまた次回。

ご意見、ご感想お待ちしてまーす。

１８話　悪戯っ子の素顔（前書き）

どうもー。作者こと、目目連です。

今回、一部作者の感情が漏洩しておりますが、ご容赦下さい。

それでは本編をどうぞー。

18話　悪戯っ子の素顔

――――――――――――――――――――――――

「にょわッ！？」

――――ずっぽり。

え？なに、これ？地面がいきなり抜けた！？え、僕、そんなに太ってたっけ？

「あぁ、柳々さんが引っ掛かっちゃたよ」

と茂みから蒲公英が出てくる。

「やぁ、こんにちは、たんぽぽちゃん」

「こんにちは～。って普通に挨拶しちゃったけど、大丈夫？」

いえいえ。このローアングルが……。

「えぇと。手貸そうか？」

「あ、……すみません」

あぁ、名残惜しいかな。

「焔耶を罠にかけようと思ったのに。まさか柳々さんがかかっちゃうなんて、失敗失敗」

テコッと自分の頭を叩いて、舌を出す蒲公英。

「いや、こんな中庭のど真ん中に仕掛けては誰がかかってもおかしくないような……」

僕はヨイショッと穴から抜け出す。

「ねぇ、柳々さんも一緒に焔耶が穴に落ちるとこ見ようよ」

「え？でも、穴は……」

と僕は自分が入っていた穴を見る。

「大丈夫♪まだあるから♪」

え？まだ、あるの？いや、もしかしてこの中庭、穴だらけ？

「面白いよ、アイツ脳筋だからいっつも同じ穴に落ちるんだから」

「いや……まぁ、それは面白いですけど」

「でしょ！」
「ふむ。なら少し見学しましょうか」
僕は蒲公英と一緒に茂みに隠れる。

「それにしても、仲がいいのですね」
「へ？誰が？」
暇だったので少々、蒲公英ちゃんと世間話です。
「たんぽぽちゃんと焔耶さんですよ」
「え、えぇ！？そんなことないよッ」
「そうですかー？」
「そうだよ。焔耶はたんぽぽにつかかってくるし……。たんぽぽだって別にあんなやつのこと、なんて……」
「いや、喧嘩するほどなんとやらと……」

「い、いや、それは……」

「ニシシシ。まぁ、良いのではないのですか？喧嘩はお互いをよく知っていなければ出来ないものですからね」

「うぅ。……あ、焔耶来たよ。隠れなきゃ……ってあれ？」

照れ隠しか蒲公英は焔耶の姿を見つけ、茂みに隠れるが、そこには目標以外の影を見つけた。

「……ん？あれは――――」

「――――お姉様、と愛紗？」

「全く。たんぽぽのやつ、また訓練サボりやがって」

ぼやきながら翠が頭を掻く。

「なんで私まで探せねばならないんだよ」

「いいではないか、焔耶。お前の方がたんぽぽの居そうな場所は分かるだろ？」

嫌々ながらも付き合っている焔耶に愛紗が言う。
「ったく。たんぽぽならいつもはこの辺りで私を落とし穴に嵌(はめ)めようしてくるな」
「落とし穴って子供じゃないんだからそうそう引っ掛かる訳がな――――ひゃあ！！」
「す、翠ッ！？」
愛紗には翠が突然消えたように見えただろう。
だが実際は落とし穴に嵌まっただけだ。
「翠、大じょ――――――きゃあ！！」
翠を助け出そうとした愛紗が別の穴に落ちる。
「うわぁ、ヤバ」
「たんぽぽ！？」
流石に見てられないので僕と蒲公英が出ていく。
「なんか今日は焔耶以外がよく引っ掛かるな」
「そう何度も私が引っ掛かるわけ――――うわぁ！？」
「あ、落ちた」

「落ちましたねー」

合計三人が穴の中に入った。

「というかどれだけ穴を掘ったん――――にょわッ！？」

そして僕、今日二度目の穴の中です。

「えぇと……たんぽぽも穴に落ちた方がいい？」

「たーんーぽーぽー」

「ひぃ、ごめんなさーい、お姉様ー」

少女説教中。

「いや、この歳になってまさか落とし穴に落ちるとは……。これもある意味良い経験ですね、うんうん」

「何を言っているのだ、柳々」

二人を見ながら頷く僕に愛紗が呆れる。

「あのような場所に穴を掘るなど、もしご主人様が怪我をしたらどうするのだ」

「いや、あの程度の深さで怪我はしないでしょ」
まぁ、たまには息抜きにはいいのでは？
「全く。その軟弱な性根を叩き直してやる。槍を取れ、たんぽぽ」
「おや、あちらは話がついたようですね」
……ん？何だろう、何やら虫の知らせが……？
「ふむ。柳々、お主も一緒に――」
「おぉ！こんな時間だ。それでは僕はこの辺りで……」
僕は手首を見て、エアー時計で時刻を確認。その場を後に……。
「まぁ、待て」
出来なかったッ！？
ガシッと腕を掴まれる。
あぁ、エアー時計が壊れる幻覚がー。
「柳々もたまには運動をした方が良いぞ？」
「いや、僕にとっては運動と言うより拷も――」
「問答無用！！」

「ぴえーーーッ！？」

なんてとばっちりだよ、これ。

「ふふふ～ん。今日は楽しいピクニック～」

警羅という名目のサボター……ゲフンッゲフンッ。

「あのー、柳々様？その“ぴくにっく”とは何でしょう？」

問題はこのお目付け役の王累をどう巻くか。

「ピクニックとは……ん？何でしょう？」

「いえ、もういいです……」

「それにしてもいい天気ですよねー、兎」

「はい。ですが昼寝は駄目ですよ」

チッ。

真名を呼ぶようになってから何だか厳しくなってない？これなら前の方が好きだよー。

「これは、柳々様のことを思えばこそです」

「地の文を読んではいけませーん」

僕も読んじゃうぞー。……出来ないけど。

「ん？……何か音が聞こえませんか？」

「また、そうやってサボる口実を……」

「いやいや。ホントにですって。こう、風を切る音と言いますか……」

「……確かに。これは槍を振り抜く音ですね」

僕に言われて王累も耳をすませる。

あ、余談ですが僕は“耳をすませば”より“猫の恩返し”の方が好きなんですよ。ハルちゃんサイコーッ！！

はい、閑話休題。

「あちらからですね。見てきましょうか？」

「いやいや、兎。僕も行きますよー」

一人茂みを掻き分けて行こうとする王累を止める。

「いえ、私がまず見てきま―――」

「僕をこんな森に一人残して行くつもりですかー！？」

あ、今、ヘタレと思ったやつ……その通りでごぜぇます。ぐへへへ。

「……ってたんぽぽちゃんかいッ！？」

僕らがこそこそ覗きに行くと、小川の近くで蒲公英が一人槍を振るっていた。

「一人で鍛練でしょうか？」

ふむ。確かにいつものおどけた感じでなく、武人としての顔のたんぽぽちゃん。

「ほへー。ああいう顔も出来るのですね」

あぁ、今僕はギャップ萌えに目覚めている！！

「と、まぁ。戻りますか、邪魔をしては悪いですし……兎？」

僕の問いかけに答えない王累を見ると……。

「……」

何やら固まっていた。

無言でプルプルと指を差すので僕はその方を見ると……。

「は？蛇？」

一匹の蛇がそこにチロチロ舌を出していた。

「爬虫綱有鱗目ヘビ亜目の蛇ですね。ごく一般的に生息してる濃い緑のニョロニョロシャーな蛇です。とある部族の間では食用としても……」

「い、い、いい……イヤァァァァ！？蛇イヤァァ！？」

僕の解説は耳をつんざくような金高いこえでかき消される。

「にょわッ！？」

と言うかあまりの狂乱に抱きついてくる王累を受け止めきれず、僕ごと倒れる。

あれ？僕、襲われてる形じゃない？きゃー、恥ずかしぃー。

――――シャー。

そんな僕らの唯一の見学者、まぁ蛇なんだけど。

どうやら目標を定めたように口を一回開けてこちらにニョロニョロ迫る。

あ、そういえば触手プレイも良いですよねー。幼女、触手、ア〇顔は最高の組み合わせですよね。

はいはい、閑話休題。と言うか現実逃避はおしまい。

「斬刀『なま――――」

――――ザシュ。

僕が刀を呼ぶ前に目の前に迫った蛇は真っ二つになった。

「……あれ？柳々さんに兎さん？」

そこには槍を構えた蒲公英いた。

「もしかしてたんぽぽお邪魔だったかなー？」

ニシシと笑う蒲公英。

あぁ、おそらく僕らの格好を見て言っているんだろうなー。

まぁ、僕は下なので王累が退いてくれないと動けないのですが……。

この後、兎が正気になり、取り乱すがそこは注記すべきでもないので割愛。

１９話　正義（ようじょ）の味方、ここに推参！？（前書き）

……え？サブタイトル？間違ってませんよ？

19話　正義（ようじょ）の味方、ここに推参！？

―――――――――――――――――――――

「おや、星さん、酒盛りですか？」

「柳々！？……ゲフッゲフッ」

城壁の上で一人で一杯している星を見つけて僕は声をかけると、僕に気づいた星がむせる。

「い、いや。ちょっとな……」

何やら警戒気味の星。

「あぁ、大丈夫ですよ。僕、素面ですよ？」

この前のことを思い出したのだと思い、一応フォローを入れておく。

「僕は無理に飲ませなければ人畜無害さんですよー」

「そ、そうなのか？」

はい、嘘でーす。
前のは別に酔った勢いとかじゃありませーん。
「それで星さんは何故、ここで酒盛りを？」
「うむ。この町並みを見ながら飲む酒は格別だからな」
と城壁の上から町を見下ろす。
僕も並んで見下ろす。
ん。アレがしたいよなー、この風景は。
「フハハハ。見ろ、人がゴミ――――」
「ところで柳々は何故、こんなところに？」
うー。言わせてくれてもいいじゃないですかー。
「えぇと、僕は馬鹿ですから高いところが好きなんですよーぉ」
馬鹿と煙は高いところが大好きです。
「ん？何故、拗ねているのだ、お主は」
拗ねる！？僕が？
「いいえ、別に拗ねてませんよー。別に人生で一度は言ってみたい

台詞ベスト3に入るであろう台詞を止められたからと言って、そんなことで拗ねるほど僕は子供ではありませんよ、はい」

「……ぷっ。くくくっ」

「……？」

いきなり吹き出した星に僕は首を傾げる。

「いや、すまない。案外、お主が可愛らしいところがあるのだと思ってな……くく」

「か、可愛らしいぃ！？僕が？」

そんなこと初めて言われましたよ。

「うむ。どうやら私は柳々と言う男を見誤っていたようだな」

何やら自分だけが納得したように頷く星。

まぁ、いいか。どうやら悪くなったわけではなさそうだし。

「あれ？それがつまみですか？」

と僕は星の横にあった皿の上のものを指差す。

「あぁ、これが一番酒に合うのだよ」

「へぇ……メンマが」

皿の上の大量のメンマを見る僕。
「なんだ？柳々、欲しいのか？だが、しかし……いや……うむむ」
なんだかスゴく悩みだした星。
「いや、別に欲しいわけでは……」
「う、うむ。……いや……でもまぁ……ひ、一切れなら」
あぁ、そこまで悩んで一切れですか。
「まぁ、いいのでしたら……」
「うぅ……（じとー）」
「あのー、そこまで惜しそうに見るのでしたら止めましょうか？」
「いや、武人に二言はござらん。……うぅ」
だから言葉と態度がかみ合っていませんよ、星さん。
「は、早よう食べてくだされ、柳々。私の覚悟が変わらぬうちに」
……食べにくい。いや、これは早く食べた方がいいよな。
「では、いざ」
ヒョイッと摘まんで口に投げ入れる。

「ぐもぐも……」

「あぁーあ」

「ごくん。ふむ……」

食べた感想。

「ただのメンマですね」

「なッ！？」

僕の言葉を聞いて、ガクンと項垂れる。

「えぇと。星さんはメンマがお好きなのですか？」

あれ？僕、今、地雷踏んだ？

「メンマとは……至高に最高の食材で――――」

これもしかして長い？ちょーと逃げようかな……。

「待て、柳々。話はまだ終わっておらぬぞ」

メンマは至高。メンマは絶品。メンマは最高。メンマは絶好。メンマは至宝。メンマは……。

メンマメンマメンマメ

「ハーハッハッハッ」

僕は今、一体何を見ているのだろう？

僕は日用品の買い出しに町に出ているのですけど……。

目の前に人だかりがあったので少し覗いてみたのが間違いでした。

そこにはなにやら蝶を象った仮面を付けた女性が男たち相手に大立ち回りをしていたのだ。

「あぁー、確かに愛紗さんが今、町に変な仮面を付けた輩が出ると言っていましたねー」

まぁ、確かに言ってましたけど……。

「――――星さんとは一言も言ってなかったのですよねー」

あれで隠しているつもりなのだろうか？いや、背格好も声も何も隠せてないし、あの仮面にしても目元ぐらいしか隠せてませんよ。どこの仮面パーティーですか。

……あ、愛紗さんたちだ。

あれ？なんだろう？まるで見知らぬ相手のように振る舞っているけど……。もしかしてこれって地政の一環なのかな？

ヒーローショー的なノリなのかな？でもそんな話は聞いてないしなー。

まぁ、何はともあれ面白そうだから見学するかな。

いつものように星が華蝶仮面として悪人を懲らしめていると、愛紗たちが来る。いつものパターンだ。

ただ、いつもと違ったのは……。

「オメェら、これを見やがれッ！」

悪人の一人が女の子を盾に立っていた。

『なッ！？』

「とりあえず、テメェら武器を捨てな」

男はグヘヘといやらしく笑う。

「なッ、卑怯な」

「貴様、人としての誇りは無いのかッ」

「うっせぇ！そんなもんで飯が食えんのか！？さっさとしねぇと手元が狂ってもしらねぇぞ」

「くそが……」

カランと武器を捨てる愛紗たち。

「捨てたぞ。早くその少女を放せ」

「馬鹿言ってんじゃね。次は、そうだな。そのムカつく仮面を取ってもらおうか」

「なッ！？」

その言葉に星が驚愕の表情を浮かべる。

「早くしねぇか。あぁ？」

「くッ。仕方ない……」

星が仮面に手をかけたその時……。

「――放しなさい」

人混みの中から現れたのは……。

「柳々！？」

「何だ、テメェ？」

「通りすがりの政務官です。とりあえず、その幼女を放しなさい」

僕、推参。

幼女を苦しめるやつは僕が許さんッ！？

「なんだ？丸腰のやつに何ができるってんだよ！？」

「主に幼女の笑顔を守ること」

あれ？僕、今カッコいいこと言いましたよ？なんで、皆さん引いているのでしょう。

「まぁ、いいか。とりあえず……死になさい」

と僕は男に向かって走る。

「な！？来るなッ、来たらこいつを———」

「甘いわ！？誠刀『銓』」

僕は柄だけの刀、『銓』を取り出す。

そして———。

「とりゃぁぁぁ！？」

投げた。それはそれは思いっきり。

「うがっ！？」

『銓』は男の顔にめり込み、怯んだ隙に、僕は男の手から幼女を救出。

「ニシシシッ。咄嗟の迷いが命取りですよ？」

やはり幼女を殺すのには抵抗があったのか、幼女を盾に使うのに少しのタイムラグがある。そこを突く作戦。

フフフ。幼女の為ならパラメーターの底上げなぞなんのその。

『幼女補正』――――近くに幼女か居ることで一時的に全パラメーターを底上げする。

これこそ、超絶紳士だけが持つ特殊効果だ。どうだ、参ったか！？

「幼女は国の宝。それを汚すなど言語道断。その罪、残りの一生を掛けて償うがいい」

と僕は去り際の台詞まで用意済みでした。……ちゃんちゃん。

「いや、いい言葉なのにある一点で台無しだぞ」

そんな無粋な愛紗さんの言葉など聞こえませーん。

２０話　嘘つき和解する（前書き）

最近、柳々のキャラが分からない。

もう変た――――紳士で通すしかないと思う作者なのでした。

２０話　嘘つき和解する

―――――――――――――――――――――

「……」

気まずい雰囲気が僕を包む。

「……柳々」

「はいッ。なんでしょう、奉先殿」

「……恋でいい」

「はっ、恋さん。何かご用でしょうか！？」

「……話し方、変」

「いえ！わたくしはこの喋り方であります！」

「……それに、距離」

はい。三人ぐらいの間を空けております。

「……少し、傷つく」

はぅあ！？そんな悲しい目をしないでッ。罪悪感に心がズタズタだよ。玉藻ちゃんだよ！？

え？分からない？じゃあ、いいよッ、もう！！

「……これでよろしいか？」

僕は空いていた空間を埋める。

「……ん」

――――ギュッ。

うぎゃぁぁぁ！！腕がぁぁぁ……あ？

あれ？痛くない？

腕に巻ついた恋の腕は包み込むような優しさと、ついでに柔らかな双丘の感触が……ゲブンッゲブンッ。

「……強くすると柳々、嫌がる」

「へ？弱めてくれてるの？」

「……（こく）」

うぅー。いい子だー。恋さん、めっちゃええ子だー。僕は8話辺りの自分を否定する。

うん？何を言っているのだろうね、僕は。

「ありがとね、恋さん」

とりあえず、頭をナデナデ。

「……ん」

なんだかくすぐったそうにしているが振り払わないため、嫌ではないと思う。

「では、警羅頑張りますかー」

そう僕は今、恋さんの警羅のお目付け役なのです。

「……（こく）」

あ、嫌そうな顔ですね。

「では、お散歩頑張りますかー」

「……（こくこく）」

おぉ！今度はいい笑顔。ふむ、やはり恋さんはその方がいいですね。

いや、決して仕事をサボる口実ではないですよ。いや、むしろ僕に

こんな仕事を任せる愛紗さんが悪いのですよ、はい。

それに――――――。

「れ～ん～ど～の～！？」

「……ねね」

ヤッホーイ！？スーパーウルトラダイナミックデンジャラスハイパーファイアーボンバーロリッ娘、ねねちゃんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

失礼取り乱しました。

「ねねを置いていくなんてヒドイですぞー」

両手を挙げて可愛さアピール狙ってる？

……いや、言ってみただけです。

「やぁ、ねねちゃん。こんにちわ」

「うん？あぁ、劉々ですか……」

「違う。それはどこかの大熊猫（ぱんだ）の名前だ」

「失礼噛みました」

「違う、わざとだ！」

「かみまみた」

「わざとじゃない！？」

「柏（かしわ）、居た？」

「誰だよッ、それ！？」

「冗談なのですよ」

てか何故、そのやり取りをねねちゃんが知っているんだ？

よし。とりあえずその後ろで結ばれたツインテールをサイドにして、朱里ちゃんからリュックを借りてこよう。

「それで柳々と恋殿は何をしているのですか？」

「警羅という名の散歩ですよー」

「……（こく）」

「ではでは、ねねちゃんもご一緒に参りましょー」

僕はねねの左手を握る。

べ、別に握りたかったから握っただけなんだからね？

あれ？否定できてない？

「……ねねも、一緒」

恋が右手を握り、さながら宇宙人を捕まえた人のような感じだ。

それもまた、一興。

「ふふ～ん。ツルで～ペタンが～正義～♪胸は～まな板が～正義～♪小さな～幼女はぁ～～～～正義♪♪」

「……柳々、その歌なんとかならないのですか？」

「はい？」

何ですか、ねねちゃん？もしかして周りの冷ややかな目線が気になるのですか？

仕方ないですねー。

「幼女は～宝～♪まさに～国宝～♪」

「だから止めろと言ってるのですッ！？」

……はうぁ！？小さなねねちゃんが怒っている姿……グヘヘ。

「うっ。何故、笑うのですか、そこで！？」

「……柳々、小さい胸が好き？」

と今まで黙って見ていた恋がそう訊ねてきた。

「はい！大好きですッ！？」

僕、いい笑顔。百万ドルも夢じゃない。

「……そう」

恋は自分の豊かな胸を手で押す。……押す、押す、押す、押す。

あれ？今、変なのが？

「いや、別に胸は凹みませんからね？」

「……頑張る」

「いやいやいや。別に大きな胸が嫌いなわけではないですから」

「……そう」

うん？心なしか嬉しそう？気のせいですかね？

「何をいちゃついているのですかッ！？」

「よしッ。ねねちゃん、僕の胸にお出で！？隅々まで余すとこなく残すことなく撫で尽くしますよー」

「ちんきゅー……きぃーくッ！？」

「ぐはッ！？」

脇腹に飛び蹴りをくらう。

鋭い痛みが……だがそれがまた。

……クフフフ。

「どうしようもない変態なのです」

「そう。僕は変態という名の紳士なのです」

もっとなじってぇぇ！？

21話　月の無い夜に（前書き）

目指せ、週間アクセス数、1万越えッ！？

あくまで目標。あくまで予定です。

さて、伏線を大量投下している作者なのですが……。

――――回収、出来るでしょうか？

21話　月の無い夜に

―――――――――――――――――――――

初めまして、皆さん。

僕は劉璋。字は季玉。真名は柳々ですよー。

え？いきなり、なんだって？

初心を忘れず、ですよー。

ニシシシッと笑うセールスマン、あっ違う、政務官です。

皆さま、ご存じ、世のロリッ娘は全て我が物。

そして、ロリッ娘になじられたい今日この頃。

あ、すみません。特に意味はないですよ。

「失礼しまーす」

僕はお館さんの執務室を訪れる。

「柳々？どうかしたの？確か報告することはなかったと思うけど……」

中にはお館さん、桃香さん、愛紗さん、朱里ちゃん、雛里ちゃんがいた。

「いえ、そう言えばお伝えするのをすっかり忘れていまして……」

「ん？なんだろ？」

「はい。風呂の壁に覗き穴が開いていましたよー」

「……へ？」

『ご主人様？』

「え？いや、違うよ！？俺じゃないって！？」

「ご主人様、そんなに見たいなら言ってくれればいいのに」

桃香が言うのを皮切りに……。

「ご主人様！？そのような不埒な真似はお止めください。浴場は私たちだけでなく、他の武官や文官たちも使うのですよ！？」

「はわわ。……ご主人様ー」

「……不潔です」

「だから冤罪だぁ！？」

「えぇと。これは僕が蜀に来たときからなのですが……聞いてませんねー」

さて。用は済みましたし、部屋に戻って仕事しよーっと。

それからしばらく、お館の部屋に監視人が付いたのはまた別のお話。

夜。今日は新月。
月の明かりもなく、大地は真の闇に包まれていた。
そんな中起きているのは、猫か仲睦まじい男女、そして……。
「――柳々さんです！？」
はい。僕一人、城壁の上でサタデーナイトフィーバーなポージング。
どこぞの竜宮の遣いさんですね。残念ながら電気は発しませんよ。
まぁ、閑話休題。
と言いますか、何故このような場所に居るかと言いますと……。
特にないのですけど……。
なにやら今回、僕の独白が多くないですか？
これ、端から見たら無言で立ってる男ですからね。
「さて。それはさておき、そこの人。出てきてもらえますか？そろそろ一人は寂しいですので……」
――ザッ。
と僕の後ろ、城壁の影になる部分から出てきたのは、長い、地面ま

で着きそうな黒髪にこれまた自分の背丈まである長刀を背負った忍者ルックの少女さんでした。

「ふむ。格好からするにどこかの国の間者さんですか？」

少女はこちらを警戒し、いつでも長刀が抜けるように柄に手をかけ、こちらを見据える。

「無言ですか。まぁ、言葉は他人との意思疏通の最大の道具だとは言いますが、語りすぎる言葉は破滅を招きます。バベルの塔然り……」

「……貴方は何者ですか？」

少女が初めて口を開く。顔は暗闇のせいでよく見えない。

「僕ですか？僕は、そうですね……」

これは真面目に答えるべきかな？

「……」

「……？」

「……あぁー。駄目だ、面白い答えが思い浮かばないや。僕は劉璋。ここで政務官をしている者だよ、間者さん」

とりあえず、真面目路線で……。

「政務官？」

「……文官紛いなものですよ。外交を中心とした仕事をこなす者のこと」

と言うか僕しかいないけど。

「それで、貴女は誰ですか？呉の間者さん」

「――ッ！？」

チャキと鞘から抜ける音がする。

そして目には追えない速さでこちらに迫る。

「賊刀『鎧』」

少女が僕に迫る前に僕と少女の間に巨大な西洋甲冑が現れる。

「――ッ！？」

それを飛び退いてかわす少女。

「……何故、私が呉の間者だと思うのですか？」

肯定も否定もしないのは流石だと思う。余程優主な間者さんなんだろう。

「まぁ、少しカマをかけたと言いますか。このご時世、蜀に間者を向けるのは魏か呉ぐらいですからね。それに魏なら……」

宵闇にひどく映える赤々と光る眼。

「――――僕が貴女のような幼女さんを見逃すわけがないッ！？」

ふふふ。いくら暗闇だからといって甘くみてもらっては困るな。僕くらいになれば暗闇だろうと目映い光の中だろうと幼女のスリーサイズくらいは見抜けます！！

「僕は魏に行ったことがありますからね。貴女には見覚えがありません。ならば貴方は呉の間者さんなのでしょうと、推測してみました」

――――ニシシシ。

「なので、まぁ貴女は呉の間者さんなのだと思ったまでです。正誤の確認はしないでおきますよ。それで――――――どうします？」

僕は両手を広げてみる。

「まぁ、この暗さではお互いの顔は見えないですし。特に貴女は何かをした様子はないですから……」

「見逃す、ということですか？」

「さて、どうでしょう？ただ、僕は夜中に夢を見ていただけかもしれないですよ？」

「……」

フッと気配が消える。

「さて、もう少し新月の散歩をしますか……」

そして男も夜の闇に消えていく。

２１話　月の無い夜に（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしてます。

22話　旧蜀の宴

――――――――――――――――――――――――

「呉と同盟を結ぶ！？」

大広間。今後の方針を決めるため、蜀の主要人たちが集い会議が開かれていた。

「はい。既に大陸は我が蜀、曹操さんの魏、そして孫策さんの呉。この三国のみとなりました」

朱里が今の大陸の情勢について簡潔に話す。

「そこで我々は孫策さんたち、呉と同盟を結び、魏へ打って出ようと思うんです」

「それで何故、魏でなく、呉へ同盟を結ぶのだ？」

朱里の言葉に愛紗が疑問を挟む。

「我々と呉を合わせても魏とは五分五分だぞ。それなら魏と手を組み、呉を攻めた方が良いのではないか？」

「はい。確かにそちらの方が確実でしょう。しかし、その後が問題なのです」

「その後とは？」

「呉を落とした後、曹操さんは必ず私たちに仕掛けてくると思います。正直なところ、魏を真っ向から受け止めるだけの戦力は私たちにはありません」

「呉が無くなれば、次は私たちの番、と言うことか」

「はい。ですから、我々が取る行動は一つ」

「孫策さんたちとの同盟なんだよね、朱里ちゃん」

「はい。その通りです、桃香様」

桃香の言葉に頷く朱里。

「そこで友好の使者として、外務官の柳々さんに呉へ同盟を結びに行ってもらおうと思います」

と一同が柳々へ目を向ける、が……。

「あれ？柳々さんは？」

「柳々なら最初から居ないのだ」

『えぇぇ！？』

鈴々の言葉に皆が驚いている頃、柳々は……。

「このおやつ、おいしーね」

「そうですねー」

璃々ちゃんとおやつを食べていた。

ん？何か忘れてるような？

「柳々、やっと来たか。こっちじゃ、こっち」

夜の中には、昼間誘いを受けて僕はやって来たのだが……。
そこには桔梗、紫苑、焔耶、そして王累と元蜀の陣営が揃い踏みだった。
「これは何の集まりですか？」
「どうぞ、柳々様、こちらへ」
僕は王累に招かれながら、主催者たる桔梗に訊ねる。
「なに大したことはないよ。ただ昔馴染みで一席設けたまでのこと」
「昔馴染みって。それほど時間が経ってるわけでは……」
「よいではない。これから忙しくなるのだからな。その前に一息つくのもまた一興じゃろ？」
「まぁいいですけど。僕は明日、出立ですからね？あまり飲めませんよ？」
「わ、私もです」
僕と王累は数人の兵を連れて、呉へ友好の使者として立つのだ。
「何を言うか。柳々、お主、いくら飲んでも酔わんのじゃろ？兎から聞いておるぞ」
「……。酔わなくても二日酔いにはなります」

「でも程々ならいいのよね？」
桔梗に紫苑まで加わる。
「はぁー。いいでしょう。劉季玉、お付き合いしますよ」
「では先ず一杯」
皆が杯を掲げる。
『かんぱーい』
カツンと杯をぶつける。

「……んくんく。ぷはっ」
「ふむ。相変わらずよい飲みっぷりじゃの」
「あらあら」
僕が酒を喉に流すと、二人が煽る。
残り二人は……。

『うきゅー……』

死亡。

「それにしてもあの劉璋がこのような男だったとはの」

「そうね。わたくしも驚いているわ」

「お主、何故、今まで隠しておったのじゃ？」

「隠していたわけじゃ……。僕が無能なのは真実ですし、後は人の上に立つ人間ではないのですよ。下っぱ体質なんですよ、僕は」

「そんな自分を卑下するものじゃないわよ、柳々ちゃん」

「そうですか？結構公平な評価だとおもうのですが……」

「そんなことはなかろう。お主のお陰で周りの諸侯は皆、お館様たちに従うようになったではないか」

「僕はあまり何もしては……」

「まぁ、いいじゃない。とりあえずのみましょうよ。まだお酒も残っているのだし」

そう言ってまた乾杯をする三人。

「ところで、柳々。兎とはどこまでいったのじゃ？」

「？……どこまで、と言いますと？」

「いや、まさかまだ手を出しとらんのか？」
ん？何を言っているのだろうか、桔梗さんは。
「手を出すも出さないも、僕と兎はそういった関係ではありませんからねー」
「はぁー。呆れたぞ、柳々。お主、真名まで交わしときながら、何を言うのだ」
「いや。僕は桔梗さんたちとも真名交わしてるじゃないですか……」
「わたくしたちと兎ちゃんとでは意味合いが違いますわ」
あれ？紫苑さんまでですか？
「違う？……いや、同じでしょ」
「はぁー。これは兎ちゃん、苦労するわねー」
「そうじゃな」
ん？二人してため息吐いてどうしたのでしょう？
と僕が二人に気を取られていると……。
「るぅるぅさまー」

と後ろから飛びつかれた。

「え、え？……兎？どうかしましたか？」

いつの間に復活したのか、王累が僕を後ろからがっちりホールド。

ウハッ。

王累は他の方と比べると控えめな方ですがそれはあくまで比べる対象が異常であり一般論で言わせていただけるのならそれは平均以上はあると言うわけで僕は何について申し上げているのかと言いますと人体の神秘と申しますか女体の神秘と申しますかフニャって今フニャってしましたよ。

「るぅるぅさまぁ」

耳元にかかる熱い吐息に背筋を駆ける電流のような感覚。

「あらあら」

「ほぉう」

いや、見てないで助けて！？え、なに、その両親が子の成長を見守るような温かな視線は？

「るぅるぅさまー。こっちを見てくだはい」

ガキッと僕の首を回す王累。

あ、いや、王累さん？首はそれ以上回らない……。

限界を越えた状態で首を再びホールドする王累。

「るぅるぅさまはわたひのこと、どうおもっているのれふか？」

「――はい？」

おそらく翻訳するに、“私のこと、どう思っていますか？”だよね。

「ど、どう、とは……？」

「らからー、わたひのことを……す、す、す、すすす……」

煤？

「――しゅきですかッ！？」

――はぁ？

後ろで二人があらあらとかそのまま押し倒してしまえとか何やら言ってますが、とりあえずはこちらですよね。

「ろうなのれすか、るぅるぅさま」

目が回ってる。グルグルとだ。

いや、僕でなく王累のが、ね。

う～む。これはなんと答えようか。……ふむ。

「――――好きですよ」
「……へ？」
目を真ん丸と開く王累。
あぁ。眼球舐め……。
「だから。僕は、兎のこと好きですよ」
一応、真剣な顔で。それがマナーってもんですから。
「す、す、すす、す、きき、き、す、すき……」
あら、王累の頭から煙が。ショートしたのかな？
「……ふにゃ～」
力なくその場に倒れ込むと、スヤスヤと寝息をたてる王累。
「ありゃりゃ」
「柳々も中々やるの」
「見直したわよ、柳々ちゃん」
王累を受け止めた姿勢の僕の肩に手を置く二人。
「見直すも何も、僕はそんな薄情な男だと思われていたのですか？
少し心外ですね」

そっと王累を寝かせて二人に向く。

「僕は、僕に付き従ってきた部下を嫌いになるほど孤高を気取るつもりはないですよー」

『は？』

僕の言葉に今度は二人の目が点になる。

「もしかしてお主、今の答えは……」

「はい？部下として好きかを問われたのではなかったのですか？兎は真面目ですからね。自分の働きがどう評価されてるかを……気になった……のでは、ないのですか？」

僕が言葉を紡げば紡ぐ程に二人の顔が、怖い。

え？なに？僕、何かした？唯一の忠臣に労いの言葉をかけただけなのにーッ！？

ため息を漏らす二人と頭に？を出す僕。

そして真実を知らぬ王累の寝顔はなんとも晴れやかであった。

23話　蜀呉同盟（前書き）

久しぶりに柳々の本気モードです。

23話　蜀呉同盟

――――――――――――――――――――――――

方針を呉との同盟と決め、蜀が動いていたが、事はもう既に動き出していた。

魏は呉へ兵を動かしていたのだ。

流石は曹操といったところか、蜀との同盟をされる前に動いたのだ。

事はもう、時間がない。

劉璋は間に合うのか……。

「……母様。もうすぐ、夢が叶うわ」

呉の近くの森。一部整えられた場所にこじんまりと質素に、そこに墓がある。

呉の王、孫策の母。先代の呉王、孫堅の墓だ。

その前で孫策は手を合わせ、孫堅に報告をしていた。

孫策もまた、この乱世の終わりが近いことを己の“勘”により分かっていた。

だからこそ、今ここで母に報告をしているのだ。

魏が目前に迫る今、母の前で再び誓う為に……。

だが、それを狙うものが居た。

――――ヒュン。

「――――ッ！？」

――――キンッ。

孫策へ向かって放たれた矢は間一髪のところで腰に差した剣、南海覇王で弾かれる。

「ふっ。誰だか知らないけど、この孫伯符を討ち取るのは矢なんか

じゃ出来ないわよ」
獰猛な虎のような目で矢が放たれた場所を見据える孫策。
――ヒュン。
再びそこから矢が放たれる。
「だから無駄だと――――ッ！？」
しかし今度は一本でなく、二本。それも時間差だ。
「――くっ！」
しかし辛うじて二本目も弾く孫策。
だが、矢は二本ではなかった。
三本目の矢が孫策の背後へ迫る。
「――賊刀『鎧』」
ズドンと音をたて、孫策の後ろに現れた巨大な西洋甲冑。
「今度は何！？」
「いやはや、間一髪でしたねー」
と矢が放たれた方ではない茂みから男が現れる。

丸腰の男は手をヒラヒラさせこちらに近づいてくる。

「貴方、誰？」

いつでも斬りかかれるように構えながら孫策は男に問う。

「あややや。そんな怖い顔しないでくださいよー。敵じゃないですよー」

あわわわ。めっさ怖いよ。いや、ちょっと下から涙出そうだよー。

「柳々様」

「へ？あ、そうでしたそうでした。兎、とりあえず捕まえてきて下さい。生死は……まぁ、問わなくていいですよー」

と僕は王累と連れてきた兵に指示を出す。

「はっ」

素早く王累たちは散り、暗殺者を捕らえにいく。

「で。まだ答えてもらってないんだけど？」

「あー、はいはい。あまり急かさないで下さいよー。僕は複数のことを同時にできるほど器用じゃないんですよ」

まだ睨んでる孫策にある程度近づく。

これぐらいが射程範囲かな？うん？もうちょっと後ろかな、いや、前か……うむむ。

「いや、分かったわよ。これでいいでしょ？」

僕が間合いを計っていると孫策が剣から手を離してくれた。

「ニシシシッ。すみませんねー、催促しちゃったみたいで」

「実際してたでしょ……」

「それでは改めてまして。こんにちは、僕は劉璋と言います。この度、蜀呉同盟を結ぶにあたり使者としてやって来た一政務官です」

にこやかに。それが交渉の基本。

「胡散臭いわね。その笑顔」

あるぇ？

「おかしいなー？幼女相手ならいけるのですが……」

———カチャ。

「いやいやいやいや。柄に手をかけないで下さいよーーーーッ！？」

「それて貴方が本当に蜀からの使者なのよね」

「はい」

「ほ・ん・と・う・に？」

「はい！」

僕は今、呉の謁見の間にて呉の首脳陣たちとの面会中です。

魏の大軍は暗殺紛いのことを知り、それはどうやら曹操の意のする所でなかったため、それをよしとしなかった曹操が撤退した。だから大事にはならなかったのだ。

「あの、残念ながらこの方が蜀から使者です。こちらが我が王、劉玄徳様からの書簡になります」

隣に控えていた王累が一歩出て言う。

「ふむ。確かに蜀からの正式な使者のようだ」

書簡を読んだ周瑜が隣で玉座に座る孫策に言う。

「ふ～ん。嘘ではないようね」

「はいー」

「ちょ、柳々様。もう少しやる気を出して下さいよッ！？」

やる気の無い返事をしている僕をたしなめる王累。

「えぇ。だって見てくださいよ」

と王累に呉の面々を示す。

「え？何がですか？」

「――ツルペタ率が少ないじゃないですか！？」

――ババーン！！

「こ、声が大きすぎますよ、柳々様」

「聞こえてるわよ」

孫策の低い声が聞こえる。

「良かったわ。小蓮たちをこの場に呼ばなくて」

「チッ」

「ちょ、ちょっとー」

「はぁー。貴方、本当に交渉する気あるの？」

「まぁ、一応……」

僕はテキトウに答える。

「……」

あ、孫策さんの額に青筋……。

「ま。冗談や私情はここまでにしておきますよ」

パンと手を打つ僕。

「さて。……呉の王、孫伯符殿。我が王、劉玄徳との同盟について返事をいただきたいのですが、返答は如何(いか)に？」

「……（へぇ、そういう顔もできるのね）」

「雪蓮、どうするのだ？」

「まぁ、劉璋の信用云々はおいといて、確かに私たちにはいい提案よね」

「あぁ。魏の侵攻は今回は防げたがあれで曹操が諦めるとは思えんからな。蜀との同盟は渡りに船だ」

「――姉様ッ！？」

そこで横から抗議の声が上がる。

「何よ、蓮華」

「そのような信用のならない者を呉の地に入れるおつもりですか！？」

「蓮華、今は戦時中よ。信用を見極めてる間に呉がなくなっては意味がないの」

「そ、それはそうですが……」

「大丈夫よ。もし不審な動きをすれば……」

と南海覇王に手をかける孫策。

「そっちも良いわよね？まさかそのまま帰るつもりじゃないわよね？」

「えぇ。別に構いませんよ。僕らを人質としてもらっても構いません」

「柳々様！？」

「兎は少し静かにしてなさい」

「へぇ、そんなに己の武に自信があるのかしら？」

ニヤリと笑う孫策。

まるで虎だ。

「はは。そんなわけ無いじゃないですかー。僕は文官ですよー？そこらの一兵卒にだって負ける自信ならありますよ」

「なら、何故貴方は人質になるのかしら？」

「別に不審な動きもしませんし、劉備さんも不審な動きをしないでしょうから。殺される心配は無いですよー。むしろここでは仕事もなく、ゆったりと休めますからねー。願ったりですよ」

「あら？随分と信頼しているのね」

「信頼ですか。……いや、特には」

「は？じゃあ何で……」

「別に。まぁ、短くはない時間で評価した結果ですよ」

「もしかしたら、貴方たちを捨てて魏と同盟を結ぶとは思わないの？」

「その可能性は……ありますか、周瑜さん？」

「……さぁな」

ふむ。つれないですね。

「まぁ、いいんじゃないですか、それでも」
『――はぁ！？』
僕の言葉に集まる全員が目を剥く。
「特に僕は困りませんね」
「貴方、死ぬのよ？」
「困りません」
「貴方の部下も死ぬのよ？」
僕の後ろで黙ったままの王累を見る孫策。
「あぁ、それは残念でしたね。僕なんかに付いてきて」
僕は振り向きもしない。
「……貴女はいいのかしら？上司はああ言ってるわよ？」
なんの迷いも無い僕の答えを聞いて、次に王累に問う。
「……私も構いません。柳々様はそうならないことをご存じですから」
迷いの無い瞳で真っ直ぐ孫策を見返す。
「そうかしら？」

「孫策様、一つご忠告があります」

「なにかしら？」

「柳々……劉璋様と話すときは語る言葉の九割を嘘だとお思いください。この方は多くを語る時は騙（かた）る時です」

ありゃりゃ？なんかヒドイ言われようじゃないかな、僕。

「……ぷっ。あはははッ」

いきなり吹き出して笑う孫策。

「貴方たち、面白いわね」

くくくと笑いを噛み殺しながら言う孫策。

涙、出てますよ。

「いいわ。冥琳、彼らに部屋を割り当ててちょうだい」

「姉様！？」

「蓮華、これは王の令よ」

「し、しかし……」

「そんなに拘るなら貴女が見極めなさい。もし怪しい所があれば言いに来なさい」

「……はい。分かりました」

渋々ながらも頷く孫権。

こうして、波乱はあれど一応は蜀呉の同盟は結ばれた……はず。

……うむむむ。

「何がうむむむですか。全く……」

２４話　道化師劉璋

―――――――――――――――――――――

「劉璋、居る～？」

孫策が劉璋の元を訪れていた。

「何かご用ですか、孫策殿」

と中から出てきたのは……。

「あら、王累じゃない」

「私は柳々様の身の回りのお世話をさせてもらっているんですが、なにか？」

「ふ～ん。……で、肝心の劉璋はどこ？」

「そ、それは……」

「ふふ～ん。スッキリスッキリ」

僕は厠からの帰り道、手をブラブラ自然乾燥中。

「あれですよねー。タオルとかそういった概念がまだなんですよねー。あ、でも布で汗を拭くのだからあってもよさそうなのですが……」

とりあえず、部屋に戻りますかねー。

「ん？」

なんだか部屋から怪しい空気が……。

「そろそろーっと……」

なんだか入ってはいけない気がしたので扉を少し開けて中を覗く僕。

うん。端から見れば不審者だよなー。

中には王累と孫策が居た。

あれ？ここ僕の部屋だよね？

「ふ～ん。貴女も今来たとこで劉璋がどこに居るか知らないようね」
え、なんか修羅場？止めた方がいいかな？
と僕が出ていこうとすると……。
「むっ。……知ってますよ。どうせ幼い女の子のお尻でも追っかけているんです！」
……出ていくのやめよう。
「そこで何をしているのだ！？」
「へ？」
僕が身を引いたその時、後ろから孫権に声をかけられ、一瞬気がそっちに向いてしまい……。
「あ、あれれ……」
――ガチャン。
扉を開けてしまった。
「え？劉璋？」
「柳々様！？」
僕は体ごと部屋に倒れ込んでしまう。

「……どうもー」

あぁ、気まずい。

「劉璋！貴様何を……姉様？」

「あら、蓮華まで……。丁度いいわね」

なにやら悪戯を思いついたかのように笑う孫策。

「劉璋、ちょっと顔貸しなさい」

只今、中庭にて孫策、孫権、王累と共に居る。

何故、こうなったかと言うと……。

「劉璋、前に見た貴方の奇術が見たいわ」

と孫策が言い出したためだ。

孫策が言う奇術とは『鎧』を出したことだろう。

「その話、本当なんですか？」
「ホントだって。私、見たもの。突然、大っきな鉄の塊が急に現れたのよ」
疑う孫権。
「まぁ、見てみれば分かるわよ」
と孫策は僕へと向く。
「えぇと、出せばいいのですか？」
とりあえず、出してみるかな。
あぁ、寝たい……。
「賊刀『鎧』」
ズシンと現れる『鎧』
「ッ！？」
「へぇ。ホントに出せたのね」
「いや、貴女まで疑っていたのですか、孫策さん」
「お前ッ、五胡の妖術使いか！？」
柄に手をかける孫権。

「だから、奇術ですって。種も仕掛けもある奇術ですよー」
「種も仕掛けって……。どういう仕組みなの？」
「それを教えてしまっては商売あがったりですよ」
「商売って。貴方政務官でしょ？」
「元は道化師をしていましたからー。もし食いっぱぐれてもいいように、ね」
――ニシシシ。
「食いっぱぐれるって……そのような気概でどうするのよ。決戦はすぐそこなのよ？」
「いやいや、孫策さん。僕は政務官ですよー。同盟を結ぶまでがお仕事。それ以降は天にお任せですからねー」
「ふ～ん。……ねぇ、他に奇術はないの？」
「物を出す以外ですか？……兎、人一人入れる箱ってあります？」
「いや、それは流石にないだろ……」
「ありますよ」
「あるのッ！？」

王累が取り出した箱に驚愕する孫権。

「ニシシシ。流石は兎！」

「これくらいは当然です」

でも何故そこで孫策さんを見るのですか？しかも、どや顔ですし……。

「まぁ、いいか。……さて、兎の用意した箱に僕が入りまして……」

王累が用意した箱は人が縦に入ると頭だけが出るくらいの高さがある。

そして箱の側面の四面には縦に細いスリットが入れられており……つまり、リアル黒ひげ危機一髪なのだ。

「さぁ、どっからでも刺し――――」

――――グサ。

「いや、早いですよ、孫策さん」

「え？いや、これ見てたらなんだか刺したくなっちゃって……」

いや、そんな可愛らしく舌を出されても……。

「でもスゴいわね、これ。あっちまで貫いてるのに……。痛くな

いの？」

「いや、ちょっぴり痛いですよ。だからやるときはやるって――――」

――――グサ。

「いや、だから、兎？急には駄目だから、ね。こっちにも心の準備が――――」

――――グサグサ。

続けざまに二本刺す王累。

そして、どや顔。

「へぇ……面白いじゃない」

それにニヤリと不敵に笑う孫策。

「……えぇと。お二人さん、聞いてますかー？」

――――ジャキン。

二人が両脇に立つ。

「いざ、尋常に……」

そして剣を構える。

「……勝負ッ！？」

二人が目にも見えない速業で次々に刺していく二人。
瞬く間に針ねずみと化していく僕。
「……ふぅ。引き分けね、王累」
「……そうですね」
「いや、意味分かりませんから」
肩で息をする二人に孫権が突っ込む。
「止めるなら早めにお願いしたかったですよー……」
「あら、元気じゃない。あ、蓮華もやってみなさいよ」
「え、え！？い、いや、私はいいです」
「そう言わずに。いいわよね、劉璋？」
「まぁ、いいですよ。これだけ刺されれば一本増えようが変わりませんから……」
「だそうよ。やってみなさいよ、蓮華。なんかスカッとするわよ？」
「さぁ、どうぞ、孫権さんッ！？」
「そ、そう？じゃあ一本だけ……」

孫策と僕に促されて孫権も剣を構え……。

「はぁぁぁぁ！」

気合いのかけ声と共に僕に“真っ向から”突撃する。

……え？前？……いやいやいや、孫権さんッ、今までの見てましたか？皆、横から……って、少し上過ぎませんか？そのままだと心臓に――――。

「はぁッ！！」

「ちょ、待っ――――」

――グサリ。

「……はぁはぁはぁ。確かになんだかスカッとしますね……姉様？」

「いや、まさか前から行くなんて思ってなかったわ……」

「え、え？」

「な、なんで、前……？」

――ガクッ。

「え？えぇ！？で、でもこれは奇術で……」

「蓮華、蓮華」

ちょいちょいと手招きして箱の近くまで呼ぶ孫策。

「これこれ」

と箱の下を指差す。それにつられて孫権もそちらを見ると……。

そこには箱の隙間から少し粘りけのある赤い液体がポタポタと垂れていた。

「――――ッ」

それを見て蒼白になる孫権。

「まさか同盟がこんな短期に破棄されるとは思いもしませんでした」

「確かに蓮華は反対してたけど、こうやって破棄させるなんて姉として悲しいわ」

王累と孫策が揃って孫権を見る。

「え、あ、いや、違っ。これは間違いで……」

後退りながらしどろもどろと言い訳をする孫権。

「わ、私だって殺したくて殺したわけではなくて、そ、そう事故。事故なのよ！」

「犯人は皆、そう言うと柳々様が仰(おっしゃ)っていました」

「蓮華。呉の王族としてここは素直に認めた方がいいわよ」
逃げる孫権を一歩一歩確実に追い詰めていく二人。
「う、うぅ～。……わ、私は無――――」
「――ジャ、ジャーン♪」
僕、箱の中から飛び出す。
「ドッキリ――――」
『大成功～♪』
僕と王累、そして孫策が声を揃える。
「え？ドッキリ……？」
「ニシシシ。驚きましたか、孫権さん？」
僕はピンピンした体を示しながら言う。服にも穴一つ無い。
「な、なんだ～……」
へなへなと座り込む孫権。
「あはは。蓮華たらおっかしいー」
腹を抱えて笑う孫策。

「ね、姉様～！？と言うか知っていたんですかッ！？」

「え？別に知らなかったわよ？」

「えぇ！？」

「まぁ、何かあるとは思ってたけど……」

「さて、片付けますか、兎」

「はっ」

と僕らは箱を片付けていく。

「それにしても血まで用意してたの？用意が随分といいわね。……

……ん？何か落ちたわよ、劉璋」

箱を片付けていると箱の中から何かが落ちる。

「何かしら、これ？」

孫権がそれを拾うと……。

「……布かしら？」

それは何かの布だった。

それはぼろぼろの布だった。ただ、よく見るとそれは劉璋が着ている服に色が似ていた。

そしてその布はそこかしこ穴だらけで、そして赤黒い染みが付いていた。

「え？これって……」

「あぁ、それもう捨ててもらって構いませんよー」

２４話　道化師劉璋（後書き）

さて呉に入りました。

おそらく、彼女らとの再会もあるでしょう。

その時柳々をどう乱れさせるか、密かに楽しんでいる作者です。

それではまた次回をお楽しみに。

ご意見、ご感想をお待ちしてます。

25話　成分補給（前書き）

やりました。

週間アクセス一万を突破ーッ！？

イェ～イ！

……だから、なんだという話ですがね。

まぁ、作者の気分が高揚するだけです。

これからも頑張ろうと思えるのです。

それでは本編をどうぞー。

25話　成分補給

―――――――――――――――――――――

「ふぅ～。こんなゆっくりするのはいつぶりですかね」

「いつもしてるじゃないですか……」

僕と王累は中庭にある小屋でまったりしていた。

「違いますよー。兎が、ですよー」

「え？私ですかッ？」

「久しぶりの休みですよね？」

「は、はい……」

「たまには羽を伸ばさないと潰れちゃいますよー」

「……ふふ、そうですね。ではお言葉に甘えさせていただきます

ね」

と僕に寄り添う王累。

ふむ？いや、何故に……？

「……ふみゅ～」

ふむ。なんだか気持ち良さそうなので、このままでいいか。

「あれ？貴方たち、誰～？」

僕らがまったりしていると、この小屋に近づいてくる人影を見つけた。

その人影は僕らを見つけ駆け寄ってきた。

「小蓮様、危ないです、お下がり下さい」

人影は三人。どの人影も小さく――――。

「――――幼女ッ！？」

「え、え？なに？」

あぁ、失礼しました。最近、幼女成分が足りなかったもので……。

「あれ？貴方は……」

と気づいたのは黒い腰までの長髪の幼女。

「明命、コイツを知っているのか？」

「は、はい。前、蜀で……」

「蜀？」

「どうもー。初めましてー、僕は劉璋と言います。今は少し呉にてご厄介になってまーす」

「同じく王累です」

と王累も礼をする。

「柳々様、こちらの方とお会いしたことがあるのですか？」

「いや、全然」

幼女の顔は忘れません。

「えぇ！？あ、でもそっか確かに暗かったから……」

「うん？暗い……」

じとー。

「え、な、何ですか？」

僕は観察中。

顔は……うん、可愛いなー。眼球をナメナメ――――。

「……柳々様」

はい、次。

バスト。ふむ、よい塩梅で……。

ウェスト。ふむ、キリッと引き締まっていて肌の褐色と合間見えて……グット！

「……柳々様。いい加減になさらないと切り落としますよ」

ヒィー。最近、暴力的だよ兎さん。愛紗さんの影響かな？

最後はヒップ。……。

「あぁ。あの夜の間者さんだー」

「今、どこで判断したんですか、柳々様」

「え？知らないのかい、兎。男は皆、骨盤で女の子を判断するのだよ？」

「そんなわけありません。柳々様だけです！？」

そうかな？最低でも後一人くらいは居そうだけどなー。

「てなわけで、改めてお久しぶりでした、間者さん」

僕は手を挙げて元気に挨拶。

「あ、どうも。でもその“間者さん”と言うのはちょっと……」

「そうですか？では名前を教えて下さい。後ついでに胸の大きさと背の高さと趣味と好きなものと暇な時間帯と性感た――――」

――――ジャキン。

「おい、貴様」

「柳々様？」

はぅあ！？両サイドから得物を首に当てるの禁止ッ！？

ちょっ、動いた、今動いたよ！？

「シャオは孫尚香よ」

「私は周泰と言います」

「……甘寧だ」

三人のロリッ娘が自己紹介をする。

「ニシシシ。今後もよろしくお願いしますね。ではとりあえず胸の大き『――チリン』さではなく、普通にお話しましょう。お話、対話、うん、大切」

だからその構えるのは止めてください、甘寧さん。

「劉璋はさ、そんなに胸の大きさが気になるの？」

孫尚香が自分の胸を強調させて聞いてくる。

え？尚香ちゃんに強調できる程あるのかって？バカ野郎！？視覚に頼るな、心で感じるんだッ！

「そうですねー。確かに男にとっては性格、顔と並び立つ程に重要事項ですよー」

「やっぱり男の人は大きい方がいいのよね……」

と自身の慎ましやかな胸を見る孫尚香。

「――それには否と答えましょう」

「……へ？」

と孫尚香と他二名はポカーンとする。ただ、王累だけは、あぁーあといった顔をしていた。

「胸は大きければいい？否、断じて否！！モノには調和と言うものがある。それを阻害するものであるのならば、無い方がいいに決まっている！？人はあの大きさに惑わされているに過ぎない。真の価値の分かるものなら、それが愚行であることが分かるのだ。そもそも胸とは、人が猿の時代にお尻に発情していたのが直立したために見えなくなったお尻の為に代用として女性は胸が発達したと言われている。だがしかしそれは畜生の発情だ。高度の知性を持った我々が畜生と同じて良いのか？答えは否だ！！胸とは手に収まりきれば、それでいいのだ。つまり、この手から溢れるあれは胸でなくただのぜい肉なのだ。つまり――――」

バッと片手を前に出す。

「この手に収まるのが胸です」

――にぎにぎ。

『……』

あれ？なに、この空気？

「……ふむ」

――にぎにぎ。

「……あぁ！？」

――――わきわき。

「いや、おそらくそういったことではないと思いますよ、柳々様」

「え、違うのですか？」

「ねぇねぇ、劉璋は小さい胸がいいの？」

やっと反応してくれました。

「その通りですー。正確に言うならば小さな女の子が好きですよ、尚香ちゃん」

「そ、そうなんだ……。（お姉ちゃんたちがシャオを呼ばなかった理由が分かったような……）」

「ちなみに尚香ちゃんはもちろん、甘寧ちゃんも周泰ちゃんも僕の好みど真ん中ですよー」

――――ニシシシ。

「気にしないで下さい、皆さん。この人のこれは病気ですから」

横からフォローを入れる王累。

「さ、そろそろ部屋に帰りますよ、柳々様」

「え？あ、もう少し。もう少しだけ、ロリ成分を～～。あぁーー」

僕の首を掴んで引きずっていく王累。

「あぁーーー。それでは皆さん、またお話しましょうねー」
引きずられながら手を振る僕。

「なんだったのかしら？」

「……」

「思春、どうかしたの？」

先程から黙ったままの甘寧に問いかける孫尚香。

「いえ、あの劉璋とかいう者、全く隙がありませんでした」

「へ？そうなの？」

「はい。あの王累という者は見ればある程度の使い手なのは分かりましたが、あの劉璋は対峙してもなお、飄々としており、まるで柳の木を風が吹く如く、流されていました」

「私も劉璋さんに会ったのは隠密中に見つかったんです」

「明命程の手練れの隠密を見つけれる者はそうそう居ません。少し注意が必要かと……」

呉の中核を担う将が二人もが目を置く劉璋。

「ふ～ん。なんか面白くなりそうね♪」

と評価が上がっているが、実際のところ、劉璋はいつ幼女たちに抱きつこうか考えて、身構えていただけだったとは誰も知らない……。

26話　暇潰しにぶらぶら

―――――――――――――――――――――

「ふぁー。暇ですよねー」

「はい？まぁ、仕方ありませんよ。桃香様たちがこちらにいらっしゃるにはもう少しかかりますし……」

二人分のお茶を用意しながら王累は答える。

「どうぞ」

「うぃ。さんくー」

青色の真似で暇を潰す。いや、いーたんがいないから中途半端な感じだ。

まぁ、閑話休題。もしくは戯言だ。

「それほど暇なのでしたら本でも読んではどうですか？」

「本ですかー……。勉強はちょっと……」

「いえ、ここの書庫には兵法書などの本の他にも物語や英雄譚などもありましたよ」

「そうなのですかー。ふむ、少し見て来ましょうかなー」

というわけで遊びに来ました、書庫。

ふむふむ。書庫と言えば文官たちの戦場である。あちらこちらと文官たちが忙しなく動いている。

……場違いじゃね？

僕、確か文官の設定だったはずなのに。なんか場違いな感じが……。

「あれ～？劉璋さんじゃないですか～。どうしたんですか～？」

間延びした声が書庫の入口に立っていた僕に声をかけてきた。

「あ、陸遜さん。……あ、邪魔ですよね」

と僕は彼女の意図を読み取り、入口から一歩ずれる。

「いや～。確かに入りたいのですけど～……」

なにやらもじもじする陸遜。

あれ？間違えたかな？

「あ～。う～」

でも書庫の中を覗いてるしなー。

「私、一人じゃ書庫には入れないんですよ～」

「へ？一人じゃ入れない？」

いやいや、子供じゃないんですから。

「あ、そうだ！劉璋さん、一緒に入ってもらえますか！？」

「え？……まぁ、いいですけどー」

よく分からないが、僕も用がありますしね。

「えへへ～。これでやっと読めます～」

うん？何か言っていますがよく聞き取れませんね。

……まぁいいか。

ふむふむ。確かに、面白いですね。

只今、子ども向けの本を読んでいる僕。

何故、こんな本が城の書庫にあるのかは不明だが……これは中々面白いぞ。

「あぁ～ん。やっと会えました～。この日をどれだけ待ち望んだか、はぁはぁ」

ん？今、おかしな声が聞こえたような……。

まぁ、いいか。ほぉ、ここはこういった展開か……。

ふむ。これが子供心を揺さぶるのか、ふむふむ。

「あぁー。膨大な知識の波が今、私の中を駆け巡っていくー。はぁはぁ、それだけで私、達してしまいそうですぅ～」

「一体誰だ、書庫でいかがわしい声を出して……って穏！？だ、

誰だ、穏を書庫に入れたのは！？」

「あぁー、冥琳様ぁ。丁度いいところにぃー」

「う、なんだか嫌な予感しかしないのだが」

「私、もう少しでイケそうなんですぅ。だぁかぁらぁ……手伝って下さいぃぃ！」

「や、止めろぉぉぉ！？」

「うん？騒がしいですねー。書庫では静かにしなければいけないのですよ？」

と僕は騒がしい方向に足を向けると……。

『……あ』

そこには服の乱れた周瑜が仰向けの陸遜に馬乗りの体勢で両手を押さえていた。

真相は襲いかかってきた陸遜を止めている体勢なのだが、途中から見ると……。

「周瑜さん。権力を盾に部下に襲いかかるのはどうかと……」

そう見えるのだ。

「ち、違っ！？誤解をするな、劉璋！？」

「まぁ、幼女の絡みではないので些かの興味もありませんし、僕は読書に夢中ですから。あ、でもあまり騒がしくすると他の方に迷惑ですからねー」

と僕はまた読書に戻っていく。

「だから、待てと言っている！と言うか――――」

「冥琳様ぁ～」

いつの間にか抜け出した陸遜が周瑜の後ろに抱きつく。

「助けていけぇぇぇ！！」

書庫ではお静かに。

「どうでしたか、柳々様？」

「うむ。確かに楽しかったですね」

僕は中庭に戻ってきた。

王累は小屋に居た。

もしかして待っていたのかな？

「特に商人が大陸を渡り歩いて、様々な国に行く話が良かったですねー」

「あぁ、それは私も読みました。まさか主人公が女性だったとは思いもしませんでした」

「ふむ。あれは中々、奇を狙ったものでしたね」

「でも本は目が疲れてあまり長くは読めないのですよねー」

「そうですか。それなら遠乗りなんかはどうですか？私は気が滅入った時などはよくしますよ」

「遠乗りですか……。ふむ、少しやってみますか。人生何事も挑戦ですからね」

「はい。いってらっしゃいませ」

と見送ってくれる姿はさながら良妻ですねー。

まぁ、悪い気はしませんね。

厩(うまや)で馬を借りて、遠乗りに出る。

「はっ、はっ、やっ」

「何をしておるのじゃ、お主は……」

はぅあ!?恥ずかしいところを見られました。

あまり速くは走らすことは出来ない僕は気分だけでも出そうとノロノロ歩く馬の上で声を出していたのだった。

「あ、あのー、遠乗りを少々……」

「遠乗りとな?じゃが、そのような足並みでは付近の森にも着けぬぞ」

「いえ、僕は馬に乗るのがあまり上手くはないので……。ウマだけに……」

「……。なら儂が稽古でもつけてやろう」

え、無視?いや、つっこまれても困るからいいのだけれど……。

というか今、なんと言いましたか?

「あの、黄蓋さん?稽古とは……」

「こうするのじゃよ」

と手を振り上げ、そのまま振り下ろす。ただし、僕の乗っている馬の尻にだった。

「ちょ、タンマ――――――」

僕の制止の声は馬の嘶(いなな)きに消され、そのまま馬は力一杯に走って行った。

それは馬本来の姿。荒野を気ままに走り抜ける馬は本当に綺麗だった。

と僕は馬から振り落とされながら思った。

「いや、すまなかった」

頭を下げる黄蓋。

只今、落馬した僕を休ませるため、木陰で小休憩中。

「お主があそこまで不慣れとは思わなんだもんで、つい……」

「いや、まぁ別に構いませんよ。蜀でもよくやられましたから」

そうなんだよねー。紫苑や桔梗たちは流石は蜀の古株で新兵なんかも育ててるから教えるの上手いが、他の者はねー。愛紗はまだいい方だ。翠や鈴々と言ったら……。

うぅ。思い出しただけで背筋が……。

「儂が言えた義理ではないが、よくそれで死ななんだな」
「運だけはいいのですよー」
これだけは運チートに感謝だよな。
「まぁ、確かにあれだけ派手に落馬しながらもかすり傷程度とはの」
「ニシシシッ。生まれつき強運なのですよー」
「強運、のぅ。策殿の勘みたいなものかの」
そこで涼しい風が吹き抜ける。
「ふぅ。いい風ですねー」
「ふむ。確かに良い風じゃな」
僕らはしばらく風に吹かれていた。
「お主は何の為に戦っておるのじゃ？」
唐突に黄蓋が聞いてくる。
「……戦ってませんよ？」
「ものの例えじゃ。前線や戦場で戦わずとも文官には文官の戦いがあるじゃろ？儂はそれらのことを言っておるのじゃ」
「……。そういった意味合いでも僕は戦ってませんよ」

僕は目を瞑り、風を感じる。

「僕は戦うことが嫌いです。争うことが嫌いです。競うことが嫌いです」

「ならば何故、今の仕事をしておるのじゃ？」

「成りゆきですよ。僕は元々、蜀の太守をやっていましたからねー。桃香さんたちが来て、蜀を治めてくれるって言うから太守を辞めた。その後はブラブラしようかと思ったんですけど、いつの間にか政務官として雇われたのでそれでもいいかなーと思って今に至るんですよー」

「ちょっと待て。お主、太守だったのか！？」

「はいー。それも成りゆきですが……」

「成りゆきとな？どうしたら成りゆきで太守になれるのじゃ？」

「それは……神頼み？」

まぁ、間違ってはいない。

僕は頼んでないだけだ。

「それにしてもお主、ちと無欲しすぎやせんか？」

「そうですねー。僕は日和見主義ですからねー。正直なところ、天下を誰が治めようと関心はないですね」

僕は目を上げて、空を見上げる。木の葉の間から光がキラキラと光って綺麗だった。

「僕は桃香……劉備さんとも曹操ちゃんとも、面識があります。それに今回、孫策さんとも面識が出来ましたから、誰が治めてもきっと良い国にしてくれますよー」

――――ニシシシッ。

あぁ。こうやって風に吹かれるだけってのもいい暇潰しになりますねー。

27話　祭りの後の夜

―――――――――――――――――――――

「町に行きましょう、柳々様！？」

「ふぁい？」

今、食事中ですよ、王累。

城内で昼食中にいきなり話し出す王累。

「……ぐもぐも。ごっきゅん。それでなんですか、嫌いなおかずでもあったんですか、兎」

「違いますよ！？町に行きましょう、柳々様！！」

何故、そんなに興奮してるのですか、貴女は。

「町、ですか？何か必要な物でもあるのですか？それなら孫策さんに言えば……」

「え、あ、いえ……そういうわけではなくて……」

うん？よく分かりませんね。

「まぁでも……。良き忠臣の兎の誘いなのですから、断るわけにはいきませんよー」

「えっ。では……」

「はい。僕でよければご同行させてもらいますよ」

「はい。是非に！」

というわけで、昼食後の予定が決まった。

「ほへぇ～」

こういうことですか……。

僕らは人で溢れかえる町の中に居た。

「なるほど、今日は祭りでしたか」

僕はすれ違う人の会話から状況を確認する。

「はい。柳々様、こちらに来てからなにやら退屈そうにしていましたから……。孫策様からこの祭りのことを聞きまして、それで……」

僕が、退屈そうに？まぁ、いつものようにしていたと思うのですが……。

ふむ。自分では分からないものですかね。

「……楽しんでいただけてますか？」

「……えぇ」

確かに人が多いと楽しいですよね。

「幼女がこんなに多いなんてッ！？」

「兎、兎！あれ、あれが面白そうですよ！」

「あ、あの。手を引っ張らないで下さい、柳々様」

僕は王累の手を引き、屋台を連れ回す。

「うはっ。これ、ウマッ！？親父さん、なにこれ？」
祭りならはしゃぐのが礼儀ってもんですよねー。
「――――ふふふ」
「ひゃい？ろうかひまひたか、うはひ？」
「いや、口にものを入れて喋らないで下さい、柳々様」
僕を見て、笑っていた王累を不思議に思い、聞くとそう答える王累。
「……ぐもぐも。それでどうかしましたか、兎？」
「いや、柳々様はやはり不思議なお方だな、と思ったのですよ」
「不思議、ですか。不審の間違いではないですか？」
「そんなことはありません。いつもは飄々としていても、やるべき時にはやる方だと私は知っています。それに普段の考えからは思いもしないほど子供っぽいところがあることも……」
「あ、ははは……」
あまり褒められなれてない僕にはなんだかむず痒いですね。
「そんな柳々様を私はお慕いしているのです」
「兎……。――――あそこにいい幼女がいますよ」

と僕は照れ隠しにそっぽを向く。

「ふふふ」

多分、分かっているのだろうなー。

本当、良妻だよ、王累。

「……兎」

「今度はなんですか？また可愛い女の子ですか？」

「――ありがとね」

「へ？」

「僕は不器用だし無能だからできることは限られるけど、唯一の忠臣に応えられるくらいには頑張るよ」

「……あ。はいッ！！」

それから日が暮れるまで祭りの出店を楽しんだ二人。

月の輝く夜。
柳々は城壁の上で月見をしていた。
その周りには鳥とも獣ともつかないモノが飛んでいた。
その一つが柳々の腕に逆さに止まる。
「その鳥は初めて見るわ」
「おや、孫策さん。夜分にどうかされましたか？」
「あまり驚かないのね。つまんないの」
僕の後ろから気配を殺した孫策が現れた。
「驚いてますよ、これでも」
「そうなの？それでその鳥は何ていうの？」
「このコたちですか？これは蝙蝠というのですよ」
「こう、もり」
「宵闇を飛び駆る獣ですよ」
「獣なの、それ？」
僕の腕にぶらさがる蝙蝠を指す孫策。

「えぇ。空を飛ぶ獣です。その半端さから昔、鳥と獣から追い出され、宵の闇にのみ蠢く哀れな獣ですよ」

「へぇ。随分と貴方になついているのね」

「ふむ。……半端者同士、気が合うのかもしれませんね」

僕は蝙蝠を突っつくが左右にブラブラと揺れただけで飛び立つ様子はなかった。

「そう言えば劉璋、今日祭りに行ってきたんでしょ？」

「はい。兎と二人で楽しんできましたよ」

「……そう」

おや？囃さないのですね。おそらく囃されるとおもっていたのですが……。

孫策はそれだけ言うと月を見上げていた。僕もそれに倣って空を見上げる。

空には月と星。そして二匹の蝙蝠が飛んでいた。

そこで僕の腕にぶら下がっていた蝙蝠が飛び立ち、二匹の元へ飛んでいく。

「……半端者でもそれを待ってる他人がいるものよ」

孫策はそう呟く。

「……えぇ。そうですね」

僕は三匹の蝙蝠を見送る。

「――そんな他人がいれば半端者でも救われますね」

「貴方にもいるじゃない、そんな他人が」

「……まぁ……そうですね」

僕は未だ、空を眺めていた。

蝙蝠たちは去っていって、空には月と星だけがいた。

「……劉しょ――」

「それでは孫策さん、僕はこれで。あまり長居は体に障りますよ」

孫策が何かをいう前に僕は踵を返し、城壁を降りていく。

２８話　完全無欠完璧超絶美幼女（前書き）

あの幼女との再会です。

28話　完全無欠完璧超絶美幼女

――――――――――――――――――――――――

「親父さん、これ一つ下さいな」

たまにはブラブラするのも悪くない。

と言うわけで町に来ています。

「……ぐもぐも」

屋台で買った点心を食べながら町をブラブラ。

うむむ。幼女の姿があまりない……。

劉璋、少しがっかり←。

よし。ここで奇跡の強運のパワーで幼女を呼び込むのだ！？

……って来るわけないか。

「七乃ー、はよ来ぬか。あやつを見失ってしまうではないか」

「お嬢様ー、待ってくださいよー」

およよ？あ、あれは……完全無欠完璧幼女さんではないですかッ！？

目の前には建物の影に隠れた幼女さんを見つけた。

え、マジで？強運使えちゃった？

「……それでは、劉季玉、全身全霊を以て幼女さんをストーキングします」

――――ビシッ。

空に敬礼する僕。

もう不審者でもいいんだ。それが幼女の為なら……。

「うははは。見たか七乃、妾の力を」

「流石、お嬢様です～。よっ、三国一の腹黒幼女！」

後ろからストーキ――――観察しているとどうやら幼女さんたちはあろうことか孫策さんにちょっかいを出していた。

ラーメンの具を掠めたり、懐刀で光を反射させるとかとせせこましい嫌がらせばっかだが。

「あ、でもそろそろ……」

「ぴーッ！？」

あ、孫策さんに捕まった。あぁ、孫策さん凄く苛々してるなー。

まぁ、仕方ないよな。あれじゃなぁー。

だけど――――――――。

「ホント、馬鹿で困るわね。やっぱり体に直接教えてあげるしかないわね」

長剣を抜きながら、冷酷に笑う孫策。

「ぴーッ！？助けてたも、孫策ッ！？」
「問答無用よ！」
振り上げた剣を降り下ろす孫策。
「――――賊刀『鎧』」
――――ガキン。
「なッ！？これは……」
「ニシシシ。孫策さん、剣を収めてもらえませんかー」
「劉璋、邪魔しないでくれる？」
「そうはいきませんよ、孫策さん」
僕が後ろから現れると苛立ち気にこちらを向く孫策。
「貴方、コイツらが誰だか知ってるの？」
「さぁ？知りませんよー。しかし、幼女の味方たる僕は黙って見過ごす訳にはいきませんよねー」
「それで同盟が破棄されても……？」
「ニシシシ。分かっているのでしょ、孫策さん」
僕は幼女を庇うように立つ。

「……」

「……」

「……はぁ。劉璋に感謝しなさいよ」

剣を収めながら孫策は言う。

「よ、よいのか？」

「いいわよ。それより早く私の前から消えてちょうだい。うっかり首はねちゃいそうだから」

「そんなことを言うて、後ろを向いたらはぬないかの？」

「そうして欲しいならするけど？」

「ひぃー」

孫策が少し凄むと幼女が震える。

――――じゅるり。

「お嬢様、早く行きましょう。孫策の気が変わらないうちに」

「二度と私の前に姿見せないでよね。あ、そうだ。劉璋、二人を門まで送っていってちょうだい」

「了解ですよー」

ニシシシッ。これで合法ですよね？

「では行きましょう、幼女さん」

「袁術ちゃん、劉璋は幼女好きだから何かされないようにねー」

「ひぃー！？」

僕が腰を抜かしている幼女さん――――袁術を起こそうとするとき、横から孫策がそう言ってきた。

「ちょっとー。孫策さん、何を言うんですかー。どさくさに紛れて撫で回せないじゃないですかー」

「ぴぃー！？」

「あんたも中々にヒドイわよ」

フヒヒ。涙目幼女……良いですよねー。

「あのー、袁術ちゃん？さっきのは冗談ですよー」

「ブルブル」

張勲に抱きついたまま震えて、こちらを警戒する袁術を見ながら僕は言う。

「そうだ。袁術ちゃん、点心を食べますか？」

僕は先ほど買った点心を出す。

「う、うむ？そういえば、お腹が減ったのじゃ」

そろそろとこちらに手を伸ばす袁術。

「ダメですよ、お嬢様。もしかしたら毒が盛られてるかもしれませんよ」

「な、なんじゃとッ！？ぴぃー！？」

しかしそれは張勲の一言で引っ込んだ。

「ちょ、張勲さん、何を言うんですか！？折角打ち解けようと思ったのに」

「いや、貴方、なんだか怪しいですし……」

「僕のどこが怪しいと言うのですか！？僕以上に人畜無害な人間はいませんよ！」

「じゃあ、劉璋さん。好きなものは？」

「幼い！可愛い！少女！」

『……』

え、なに？

「略して“おかし”」

「いや、もういいですから。後、何の弁解にもなってませんから」

「ふむ。他者に理解されると言うのは難しいですね……」

「貴方は先ず、ご自分を理解すべきですねー」

「というか張勲さんは袁術ちゃんが怯える姿を楽しんでいるじゃないですか……」

「えぇ～？何のことですか～？」

そんなキラキラした目をして何を言っているのでしょうか、この人は。

「貴方よりはマシですよ～。わざと遠回りに門に向かってる方よりは」

「ふふふ。はて、何のことですかね。僕はただゆっくりと門に向かってるだけですよー」

ふふふと笑い合う。

「二人は何を言うとるのじゃ？」

『いえいえ、なんでもないですよー』

「へぇー。劉璋さんは蜀の方だったんですか」

門への“長い”道中、僕の今の状況や袁術たちの今までの話などをしながら買い食いしていた。

「はい。僕は蜀からの使者としてここにいるわけですよ」

「そうなのかえ？劉璋は凄いやつなのかの、七乃」

「どうですかね～。ただの使いっ走りじゃないですか～？」

「はいー。ただの使いっ走りですよー。それで袁術ちゃんたちはこの後どうするのですか？」

「どうする、とは？」

「いや、おそらくここで魏対蜀呉の対戦が行われますからねー。あまり近くにいると巻き込まれちゃいますよー」

「そ、そうなのかえ？七乃、早よう、町を出なくてはなのじゃ」

「お嬢様、少しそれは待ってください」

「な、何故じゃ、七乃。妾は痛いのは嫌なのじゃ」

「大丈夫ですよー。孫策さんも曹操さんも町には手を出しませんから安全ですって。それより孫策さんたちが出払っていない内に江東を奪っちゃえばいいじゃないですか～」

「おぉ！流石、七乃じゃ。名案ではないか、褒めてつかわす」

「ありがとうございま～す」

「あの、それは僕の前で言っていいことなのでしょうか？」

「黙ってて下さいよ～」

上目線のおねだりのポーズの張勲。

「いや、僕も一応蜀の官なので……」

「さぁ、お嬢様からも」

「う、うむ。お、お願いじゃ……」

上目線のおねだりのポーズの袁術。

「はいッ！？喜んでッ！！」

「おぉ！やったぞ、七乃。妾の魅力でイチコロじゃ」

「……」

「どうしたのじゃ、七乃？」

首を傾(かし)げる袁術とそれを涎を滴ながら見る僕を交互に見る張勲。

「……い、いえ。お嬢様さえ良ければそれでいいんです」

その後、門まで送るまでに不慮の事故（を装(よそお)ったこと）によりプニったり、フニュったり、プニプニったり、フニュフニュったり、十二分に成分を補給した僕はもうツヤツヤだった。

「お、おかしいの、なんだかスゴく疲れたのじゃ……」

一方、焦燥気味の袁術。

「頑張って下さい、お嬢様。もうすぐ孫策さんから江東を取り戻せますから」

「そ、そうじゃな」

僕は門の前でそんな会話をしている二人を見ていた。

「だから、言わないで下さいよ、劉璋さん？」

「えぇ、分かってますよ」

釘を指してきた張勲に頷く。

「それじゃ、お嬢様。孫策さんたちが居なくなるまでどこか他の町に隠れてましょう」

「うむ。そうするのじゃ。劉璋、案内ご苦労じゃった」

「はーい。また縁が合ったら遊びましょうねー」

二人を見送りながら、手を振る。

「そう言えば、たった二人で城は落とせるのでしょうか？」

僕は誰にでもなく呟く。

29話　船上にて（前書き）

もうすぐ赤壁に入ります。

物語も終焉へ……。

29話　船上にて

―――――――――――――――――――――

「海だ！」

「いいえ、長江です」

僕ら二人は水軍訓練の見学に来ていた。

どうやら、魏との決戦の地は赤壁。船上での戦いになるだろうと王累が言うもんで、孫策さんに頼んで水軍の訓練を見してもらうことになったのだ。

「船ですかー。初めて乗りますねー。楽しみですよー」

「柳々様、これは訓練なのですよ？行楽ではありませんからね」

「いやいや、兎。僕は前線はおろか采配することもないのですから訓練の必要はなく、僕は完全なる行楽ですよー」

「おい、貴様ら乗るのか、乗らないのか？」

「あ、はいはい。二名乗りま～す」

甘寧に催促されて、僕らは船に乗り込む。

「ウハッー！？広ーい」

僕は甲板に出て、手すりから乗り出して長江を眺める。

「見て、見てください、兎。対岸が全然見えませんよ」

「あ、あの柳々様……」

「……」

王累は甘寧の様子を伺うと苛立たそうこちらを睨んでいた。

「ニシシシッ。駄目ですよ、兎。他人の目線など気にしていては大願を叶えることは出来ませんよ」

「柳々様、たまに良いことを言うのですけど。時を選んで使ってください……」

「え？なに？風が凄くて聞こえませんよー？」

「……もう、いいです」

「ニシシシッ」

「飽きた。下りる」

「ちょっと、柳々様、飽きるの早すぎですよッ！？」

いや、兎さん。こうも暇だと飽きますよ？

「皆さん、訓練なんですから静かに見てましょうよ」

「訓練ってただ船に乗ってるだけじゃん」

「し、しぃー！声が大きいですよ、柳々様」

王累の気配りも意味をなさず、水軍の兵たちがこちらを鋭い目付きで睨んでいた。

「飽きた、飽きた、飽きましたー」

そんな視線も柳に風な僕。

「うぅ、なんだかお腹が痛くなってきました」
王累の胃に穴が空くのも時間の問題か？
「ふむ。訓練なら……」
――――ニシシッ。
「柳々様、お願いですから大人しく――――」
――――――ドボーン。
王累が言いきる前に船の真横で水柱が上がった。
「何事だ！？」
「分かりません。急に真横から水柱が上がりまして……」
「ちッ。直ぐに船の損害を調べろ！」
「はっ」
甘寧が兵に指示を飛ばす。
「りゅ、柳々様？」
「訓練とは実戦に近くなくては意味がないですよねー」
――――ニシシッ。

「賊刀『鎧』」

――――ドボーン。ドボーン。

左右で交互に水柱が上がる。

「貴様か、劉璋ッ！？」

「ニシシシッ。実戦っぽくていいでしょ？」

「今すぐ止めろ。さもなくば……」

「どうなると言うのでしょうね？」

「ふん。覚悟はいいな」

「ニシシシ」

――――チリン。

「千刀『ツルギ』」

「――――ッ！？」

無数の刀が降り注ぐ。

「敵の矢に見立ててみましたー」

「柳々様ー！やりすぎですよ！？これじゃあ船が沈んでしまいます！？」

揺らぐ船の手すりに捕まりながら王累が叫ぶ。
「うん？……あぁ。それもアリですね」
『――――え？』
「ニシシシ。もし沈んだ場合も訓練しときましょうか」
「ま、まさか……」
「貴様、正気か！？」
「勿論。――――双刀『鎚』」
船の真ん中に出現する『鎚』。そしてその重さで船を貫く。
「なッ！？そ、総員、退避！」
直ぐに甘寧が兵に避難命令を出し、船から脱出する。
「ふむ。流石は元江賊ですね。素早い対応ですね」
「あ、あの柳々様？」
「なんですか、兎」
「何故、私と縄で結びつけているのですか？」
僕はただいま王累と紐で繋がっています。

「何故って……僕、泳げませんから」
「――は？」
「それじゃ、頼みますよ、兎」
「なんで沈めたんですかぁぁぁぁ！！」
あぁ。そろそろ桃香さんたち来るかな？暇潰しもこれで終わりかなー。
隣で叫ぶ王累を横目にそんなことを思う僕でした。

「孫策さん、お久しぶりです」
数日経って蜀の軍勢が呉に到着した。
「久しぶりね、劉備。反董卓以来かしら？」
謁見の間で各国の首脳たちが挨拶を交わす。
「あれ？そう言えば柳々さん……劉璋さんは？」

謁見の間に居ない先に行った政務官の姿を探す桃香。

「あぁ、劉璋は……」

その頃、僕は……。

「1つ、叩いては船のため～。2つ、叩いては水軍のため～。3つ、叩いては自業自得～」

「柳々様、ふざけてないで早く終わらせましょう」

壊した船の修復作業に追われていた。

「うむ。よい暇潰しになりますね、これは。これなら桃香さんたちが来るまで時間が潰せそうですよー」

「いや、もうそろそろ来ると思いますよ、桃香様たち……」

「……え？マジで？」

２９話　船上にて（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

３０話　月と兎と柳

―――――――――――――――――――――

「それでは決戦の地は赤壁だな」

「はい。曹操さんたちの行軍速度とこちらの準備を考えると赤壁で陣を張るのが適切かと」

呉の軍師、周瑜と蜀の軍師、諸葛亮が軍議を重ねる。

互いがこの戦いに掛けた思いを策に託す。

その場はまさに軍師たちの戦場。

「……くぅー」

とその場に不釣り合いな声、と言うか寝息が聞こえる。

まぁ、僕なのですけど。

「おい、柳々ッ！？お主、この大事な軍議の場をなんと心得るか！」
そんな僕を愛紗が叱咤する。
「……うにゅ？」
僕は半分開いた目を擦り、愛紗を見る。
「……くぅー」
「寝るなッ！？」
また、瞼が落ちる。
ヤバイなー。最近頑張り過ぎてるからなー、そろそろ……。
「す、すみません、愛紗さん。柳々様は最近、船の修復などでご多忙であったので疲れが溜まっていて、それで……」
――――ガタンッ。
「柳々様？」
僕が突然、席を立つ。
「……うにゅ、寝る」
そう言って僕は部屋を出ていく。

「どうしちゃったんだろう、柳々さん。なんだか様子が変だったよね？」

「確かになんだか生気が欠けていると言いますか……」

桃香と朱里が柳々の出ていった方を見て顔を見合わせる。

「そうよね。劉璋の大好きな小さな女の子も増えたのにね～」

孫策がそれに相づちをつく。

「だがあれだけ腑抜けられていては兵たちの士気に関わるのではありませんか？」

「確かに蓮華様の言うことにも一理ありますけど～。一概には言い切れませんね～」

「どういうことだ、穏？」

陸遜の言葉に孫権が反応する。

「劉璋さんは武官ではなく、政務官さんですか～。直接兵に影響を与えるとは考えられませんよ～」

「それでも放っておくことは出来ん」

愛紗が強く言い放つ。

「いくら武官じゃないからといってあのような態度をいつまでも許しているわけには……」

「まぁまぁ、愛紗落ち着いて。柳々さんだって呉への遠征や知らない土地での生活で精神的に疲労してるのかもしれないし……」

見かねた北郷がフォローを入れるが。

「あの柳々が、ですか？ご主人様は本気でそうお思いですか？」

「いや、まぁ……」

そんな喧騒の中、兎は只々柳々の去った扉を見つめていた。

「柳々様……」

「ふわぁ～～」

夜の城壁の上。欠伸をしながら月を見ている僕。

「もうそろそろ終わりですかねー。楽しい時間とは速く感じるものですねー」

僕は月をただ見上げながら呟く。

「……柳々様」

まぁ、そろそろ来るとは思っていましたけどね。

「一献、付き合って頂けますか？」

と王累にしては珍しく徳利を提げて現れた。

「……。えぇ、構いませんよ」

僕は杯を2つ取り出す。

王累は何も言わず1つを受け取り、僕の杯にお酒を満たす。

次に僕が王累の杯を満たし、チンッと陶器の澄んだ音を鳴らし、乾杯する。

月明かりの中、二人は静かに杯の中身を飲み干す。

そして互いに何も言わず、空に浮かぶ月を眺める。

「柳々様は……」

ゆっくりとした静かな口調で王累が喋りだす。

「この乱世が終わったらいかがなさるおつもりですか？」

「うーん。特には思いつかないかな……」

「そうなのですか？」

「あれ？そんなに意外かな。僕は予定を立てて行動するような性格じゃないんだけどなー」

「い、いえ、そうではなくて……。柳々様ならどこかで毎日のんびりと過ごす、とか幼女を求めて旅に出るとか言うと思ってましたので……」

「兎が僕のことをどう見てるか分かりました。しかし、その考えでは僕は国を出ることが前提ですけど？」

「だって柳々様、この乱世が終わったら国を出るおつもりですよね」

「……何故、そう思うのですか？」

王累の目はカマを掛けているわけでも試しているわけでもなく、確信に満ちていた。

「なんとなく、です……」

「ニシシッ、なんとなく、ですか。それはまたなんとも……」

「理由をお聞かせ願えますか？」

「理由ですか……。そりゃ仕事が増えるからですよー。平和にな

れば外交が盛んとなるでしょうからね。政務官はなにかと忙しくなる。僕は基本、働いたら負けと思う種族ですからねー」

「……」

僕の理由を聞いて、納得していない顔の王累。

「分かりました。今はそれで結構です。どうせ、付いていきますから……」

「……え？今、なんて言いましたか？」

「だから私も柳々様に付いていきますから。その内、本当の理由も分かります」

いやいや、兎さん？何を言い出して……。

「兎は武官としての仕事があるじゃないですか？そんな簡単に国を抜けては……」

「それは柳々様も同じです」

「あ、いや、それは確かにそうなのですが……。僕と兎では必要性が違いますし……」

「武官と文官であるならば、今後は文官の方が必要です」

「え、あ、そう、ですけど……」

ちょ、なに言い負かされているのですか、僕は。

これでは特技ハッタリが聞いて呆れますよ。

「柳々様。私は前にも申し上げました。私が仕える主は貴方様、只お一人だと。貴方様の居ない国は私の国ではありません。国がなくとも貴方様の隣が私の守るべき国なのです」

ですから、と膝をつく姿勢でこちらを見つめる。

「姓は王、名は累。地の果てにでも貴方様に付いて行き、この身は貴方様の盾となり、この腕は貴方様の矛となりましょう」

それはまさに臣下の礼だった。

「全く、兎は真面目ですね」

ポンと兎の頭に手を置く僕。

「———友達ですよ」

「……え？」

「旅に臣下は要りませんよ。一緒に旅をするなら僕と兎は友達ですよ」

「は、はい！！」

３０話　月と兎と柳（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

31話　下ごしらえを忘れずに（前書き）

あれ、ギャグが……ない？

31話　下ごしらえを忘れずに

―――――――――――――――――――――

「海だ！！」

「だから違いますってば！？」

いや、天丼じゃん？

僕らは赤壁の下見に来ています。

「まぁ、ぶっちゃけやることないから暇潰しがてらなんだけどねー」

陣の構築場所や船の確保は全て雛里ちゃんがやってるし、武官でない僕が兵の調練をやるわけないし、もう暇なんだよねー。

「蜀に帰ろうかな？」

「いや、駄目ですよ」

「と言うか兎は兵の調練とかはいいの？僕にずっと付いてなくてもいいのに」

王累も一軍を預かる将だし、桃香たちが来るまでは調練なんかも出来なくて兵たちを休ませていたけど、桃香たちが来たなら調練は再開するはずなんだけどなー。

「はい。それが私の兵たちは休んでいる間どうやら鈍（なま）ってしまったみたいなので、愛紗さんに渇を入れてもらおうと今一緒に調練を受けているんです」

まぁ、確かに王累はスパルタキャラじゃないしなー。むしろ褒めて伸ばす、仏キャラだ。

「そうなのでしたかー。それならいいのです」

とそんな話をしながら歩いていたら雛里いる本陣予定地まで着いた。

「あ、柳々さん、兎さん」

「こんにわー、雛里ちゃん」

「お疲れ様です、雛里さん」

「本陣の構築ですか？大変ですねー」

「え？あ、いえ。私はこれくらいしか出来ないから……」

帽子のつばを押さえて顔を隠してしまう雛里。

あれ？何これ、キュン死にしちゃうよ？斬愧さんの“看板娘です”ぐらいキュン死にしちゃうよ？

「柳々様、手をワキワキさせないで下さい。雛里さんが怯えてます」

見ると雛里が王累の影に隠れてビクビクしている。

うむ。例えるならチビッ子先生、レベッカ宮本さんな感じだ。

ん？分から、ない……だと……。

――――ｏｒｚ。

「何をしてるんですか、柳々様？」

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「えぇ、大丈夫ですよ。ただ地面に幼女の温もりが……冗談ですよー」

だから、そんなウジ虫を見るような目で見ないで！？特に雛里ちゃん！可愛い外見とは相反してそんな冷酷な目が出来るなんて……お兄さん、目覚めちゃうよ！？

「それにしても勝算はあるのですかねー」

僕は話題を変える。

「それはどういうことですか？」

直ぐ様、軍師の顔になり聞き返してきた雛里。

「正直なところ、兵数、将の質、武具の性能どれも互角。それで何か策はあるのでしょうか、軍師殿？」

「……」

何かを考えるような仕草の雛里。

「私や朱里ちゃんは自分たちに出来ることをするだけだから……」

「ニシシシッ、それもそうですね。これは愚問でしたねー」

絡み合う策略。それが織り成すは幸か不幸か……。

赤壁に陣を張り終えた夜。

そんな誰もが寝静まる夜、松明の火がいくつか動いていた。

「黄蓋様、お体の方は大丈夫なのですか？」

「なに、大したことはないわい。それより追手を振り切るぞ」

呉の宿将、黄蓋が少数の兵を引き連れての離反だった。

（まぁ、指揮を取っとるのは穏じゃろう。上手く“振り切れて”くれるじゃろう）

――――ガサガサ。

「ッ！？何者じゃ！」

茂みの動きを察知し、いち早く矢をつがう黄蓋。

「あややや。待って下さい、僕です、僕」

やせいのりゅうしょうがあらわれた。

「あややや。待って下さい、僕です、僕」

ビックリしたー。探険してたらいきなり矢を向けられるのだから――。

「劉璋？何故、お主がここにいるのじゃ？」

「夜の散歩は僕の趣味ですよー。それよりも黄蓋さん？――――貴女たちは何故、こんな場所に？」

爛々と光る目が黄蓋たちを見据える。

「――くっ！（このような場所で見つかるとは完全に不覚じゃわい）」

「……あッ。分かりましたー、偵察ですねー」

「……は？」

「夜分にも関わらずご苦労様ですねー。睡眠不足はお肌の大敵だって言うのに流石は呉の宿将、黄蓋さん。粉骨砕身で呉に尽くす。将の鏡ですねー」

パチパチと手を叩く僕。

（なんじゃ、こやつ、儂らが離反したことを知らんのか？）

「そ、そうなのじゃ。じゃからあまり騒がないでくれるかの。敵に見つかってもかなわんしの」

「おぉー、そうでしたそうでした」

僕は声をひそめる。

「それでは、お邪魔してはいけませんから、僕はこの辺で」

僕は黄蓋たちに背を向けて、歩き――――出そうとして止まる。

「どうしたのじゃ？」

「そうだ。一つ言い忘れてました。……その道はやめた方がいいですよ。曹操ちゃんの本陣に行くならそこを右にずれて、迂回した方がいいですよー」

それではー、と手を振りながら再び歩き出す。

さぁて、いよいよ終焉間近ですねー。

――――ニシシシッ。

「黄蓋の火計、諸葛亮の祈祷、鳳統の連環。ニシシシッ、カードは揃うかなー？まぁ、それもお楽しみとしときますかー」

ニシシシッとおかしな笑い声が森に染み入る。

３１話　下ごしらえを忘れずに（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

32話　下ごしらえは万全だ

――――――――――――――――――――

次の日の朝、蜀呉の陣内は騒然としていた。

黄蓋の離反が全兵に知れ渡ったのだ。

だがそれでも英傑たちだ直ぐに立て直――――。

「敵はどこなのだ！」

「おい、鈴々。落ち着けと言うに」

……してくれるだろう。……はずだよ、ね？

「多分、黄蓋さんの離反は芝居だと思うんだ」
あまりにヒドイ有り様だったので北郷が将を集めて、事の真相を話した。
「確かにそれならかなり勝率が上がりますね」
「私たちの考えた策と合わせればもっと良くなるよ」
北郷の言葉を聞き、軍師二人が何度か頷く。
「以上の事を踏まえた上で今後、行動してほしい」
「はっ」
「じゃあ解散で。各自作業に戻って。……あ、柳々さんは残ってもらえる？」
「はい？」
何故か僕だけ残された。
え？なに？僕が何した？いや、確かにちょくちょくサボってるけど。お館さんだって同じじゃん？

「――――黄蓋さんを助けてほしい？」

「あぁ……」

「何故？」

「俺は出来れば皆に生きてて欲しいんだ」

「あぁ、いや、違います。お館さんの理由を聞いたんじゃないんですよー。大方予想がついてましたし……。そうじゃなくて僕に何故それを頼んだのか聞いたんですよ」

「それは……。柳々さんならなんとかしてくれそうだったから……」

「つまりは勘、ですか？」

「まぁ、そうなるかな」

はは、と笑う北郷。

爽やかだなー。あぁ、妬ましい。パルパルパルパル。

「ふむ。まぁ、できる限りはしてみましょう」

「ホント！？ありがと」

「いえいえ。それでは僕はこれで」
「あぁ、引き留めて悪かったな」
僕は一礼して部屋を出る。

祈祷台。
「う～ん。おかしいな、もうそろそろ風が変わってもいい頃なんだけどな～」
祈祷台の上で朱里が唸っていた。
「朱里ちゃん頑張って！風が変わらないと火計が上手くいかなくなっちゃうよ」
その傍らで雛里が応援していた。
「そうだよね。雛里ちゃんが折角船を鎖で繋げてくれたんだもん。私も頑張らなきゃ」
「お困りですかッ？」

『ひゃわッ！？』

僕、参上。

華麗に目の前から僕が現れて驚いている幼女……じゅるり。

「りゅ、柳々さん！？そっちは崖じゃないんですか？」

そうこの祈祷台は赤壁全体が見渡せる場所に設置させてある。

つまるところ前方は崖なのだ。

「そこに幼女が居れば僕に不可能はありませんよー」

素晴らしきかな、幼女補正。

「お二人がお困りとあらば、その困った顔を拝み……ゴホン。ご助力しにきたのですよー」

『……じとー』

はぅあ！？そんな目で見ないで！お兄さん、イッ―自主規制―ぅぅぅ！！

―――ビクンビクン。

「な、なんと言う破壊力。これがまさに孔明の罠か！？」

「あ、あの柳々さん？戻ってきてください」

僕、只今トリップ中。

「はい。というわけでこれを着てください」

「説明なしですか！？」

「え？いるんですか？」

「い、一応お願いします」

「全裸に靴下着用、そして上目使いでお兄ちゃんとまで言われたら仕方ありませんねー」

『言ってないです！？』

「これは遥か東方の祈祷時に着る正装なんですよ」

僕は服を前に持ちながら言う。

服は上が白、下が赤のなんともお目出度い色合い。

上は袖口は広くゆったりと空きをもった感じ、下は袴の様な作りになっていた。

まぁ、いわゆる、巫女服ですよ！？

「えぇと、これを着るのですか？」

二人は目の前にある巫女服を凝視する。

「はい。え、着方が分からない？では手取り足取り教えま――――」

「あ、それは大丈夫です」

「前になんかの文献で見ましたから」

――――ｏｒｚ。

巫女服。

それはスク水、ブルマと並ぶ三大コスチュームと言っても過言ではない。そしてそれらはロリッ娘が着て更に威力を増すのだ。スク水、ブルマは分かるだろう。では何故、巫女服もなるのか？それは巫女と言えば清純なるもの、つまりは乙女。純なる乙女とは幼女！本来、和服とは胸が平らの方が似合い……。

「じゅ、準備出来ましたぁ」

「あぅ……」

「おや？随分と早……」

「はわわ。ど、どうでしょう？」

「……」

「あわわ。朱里ちゃん、返事がないよぉ」

「……てて」

『え？』

「――生きてて良かったぁぁぁあああああ！！」

僕、長江に向かって大絶叫。

後の話で魏の船団まで聞こえたと語られる。

「ふにゃらふにゃふにゃ……」

少女祈祷中。

「おぉ、神よ。僕は今、貴方に感謝しています」

祈祷している朱里の後ろで拝んでいる僕。

怪しい集団だった。

「あ、風が変わった」

「本当だ。やった、やったよ、雛里ちゃん」

二人は抱き合って喜びを分かち合っていた。

「ありがとうございました、柳々さん。この服、本当だったんですね」

「え、あ、うん。どういたしまして……」

ただの服なんだけどなー。鰯の頭もなんとやら、なのかなー。

「あれ？私、着替える意味あったのかな？」

と雛里は1人首を傾げていた。

３２話　下ごしらえは万全だ（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

３３話　柳々の奇策（前書き）

今回は少し短めです。

33話　柳々の奇策

――――――――――――――――――――――――

風が朱里の祈祷により変わり、黄蓋の火計が発動した。

だが、それは失敗したのだった。

魏の船団はまるで火計が分かっていたかのように黄蓋の火計を対処したのだった。

つまりは失敗だった。黄蓋の火計も諸葛亮の祈祷も鳳統の連環も何もかも藻屑と化したのだった。

では何故、魏が火計に気づいたのか、それは……。

「まさか袁術の言っていた通りになるとはね」

そう袁術たちが曹操の陣に来ていたのだった。

そのことがあったからこそ、曹操が黄蓋の火計に対して、少なから

ず策を打っておいたのだ。

「ふわぁ～あ。これは駄目ですねー」

帆の上に座って僕はいまいち広がらない炎を見ていた。

そして上を見上げる。

「ふむ。これは要らないものまで吹き込んで来ちゃったかなー」

空はどんより暗く、今にも雨が降りそうであった。

「さてと。まぁ、戦は武官さんたちに任せましょうか。僕は僕のお仕事をしましょう」

帆から布を伝って降りていく。

「――――やっぱ無理」

混線状態の各船。黄蓋の居る船までたどり着けないよ、これじゃ。

「うむむむ。何かいい案があれば……」

———ポツリポツリ。

ついに降り始めた雨が頬にあたる。

これでなお火は広がらず、消えてしまうだろうなー。

……ん？そうか。ふむ、やってみますかねー。

———ニシシシッ。

「はわわ！？雨が！これじゃあ、ますます火が回らなくなっちゃいますよぉ」

「あわわ。落ち着いて、朱里ひゃん！……あぅ、噛んじゃったぁ」

「二人とも落ち着いて。確かに火計は途中で失敗したけど、相手だって少しは混乱してるし、消火に手を割いてるはずだろ？」

あたふたと慌てる二人を宥めるように言い聞かす北郷。

「大丈夫。こっちだって愛紗や鈴々がいるんだ、負けやしないよ」

「は、はい。すみません、取り乱してしまって……」

「いいってば。それよりは采配の方をよろしくね」

『御意』

そう言って二人はパタパタと駆けていった。

「火計が失敗するなんて……。分かってはいたけど、やっぱりここは俺の知ってる歴史とは違うのか？いや、今はそんなことを気にしてる場合じゃないんだ」

首を振り、パシンと頬を叩く。そして今、まさに命懸けで戦っている仲間のことを思う。

「出来るなら黄蓋さんも助けたかったけど。これじゃ、もう……」

そう思って魏の本船の方を向くと……。

———ピカッ。

凄まじい光量の光が弾けた。

その少し前。

「ふむ。やはりこれ以上は無理だよなー」

魏の本船に近づくにつれて混戦状態。人間のすし詰め状態。

まぁいいか、じゃあこの辺で……。

「千刀『ツルギ』」

辺りの船に『ツルギ』を突き刺す。

「賊刀『鎧』」

そして『ツルギ』の中心に『鎧』を出現させる。

「ニシシシッ。さぁ、存分に混乱しちゃって下さいねー。悪刀『鐚』」

僕は鎧の上に鐚を出現させる。

――――ゴロゴロ。

黒い雲が『鐚』に反応するかのように低く唸る。

雷を帯びたクナイ、『鐚』。その電気に雲の中の雷が共鳴し合い。

そして……。

――――ピカンッ。

雷同士が引き合い、地上に落ちる。

そしてそこにあるのは『鎧』

絶対無敵の防御力を持つ『鎧』。その原理は全ての衝撃を地面に逃がすというものだ。

その『鎧』の上に雷が落ちる。

そしてそれは船に、長江に流れていく。

しかしそれだけではない。その長江に流れた雷は各船に刺さった『ツルギ』へ誘導される。

本来、完成型変体刀同士は引き合う体質なのだ。

完了型である『鑢（やすり）』が良い例である。

『鑢』が発した雷が『鎧』を介し『ツルギ』へ渡る。

雷を帯びた『ツルギ』はまた新たに雷を引き寄せ、無数の雷が船に落ち続ける。

「合成型変体刀。這刀『鉉（つる）』」

――――ニシシシッ。

そして劉璋の奇策で魏の船団は多少なりには混乱するのであった。

劉璋が黄蓋の所に辿り着けるぐらいには……。

３４話　海上救助隊、劉璋（前書き）

サブタイトルはノリです。

まず、海じゃないし……。

３４話　海上救助隊、劉璋

―――――――――――――――――――――

「さっきの光は何じゃ？」

黄蓋は魏の本船の真っ只中、急に発せられた光の方角を見ていた。

「魏の策……ではないようじゃな」

黄蓋は自分たちを囲む魏の兵の動揺を見て、否定する。

「ならば……」

劉璋か、と自分でも驚くほど普通にその名を口にした。

自分たちの軍師でなく、世に名高い伏竜鳳雛でもなく、あの飄々とした政務官の笑い声が聞こえたのだ。

「火計は失敗したがどうやら戦は良い方向に運びそうじゃ」
動揺していても流石は魏の精兵。自分の周りから次々と兵が消えていく中、うっすらと笑う黄蓋。
「策殿、儂は先に堅殿の所に行くとする。堅殿と一緒に策殿と冥琳の呉を見守るとしよう」
そして黄蓋の矢も尽き、覚悟を決め、目を瞑る。
――――ヒュン。
一矢が黄蓋の心臓に向かい、飛ぶ。
「双刀『鎚』」
しかしそれは無骨な剣に阻まれる。
「ニシシシッ。いやいや、まだ死ぬには早いですよー、黄蓋さん」
『鎚』と共に僕が降ってくる。
「――なッ、劉璋！？何故、お主がここに！？」
「あぁ、お館さんのご指示ですよー。さてと……」
僕は周りを見渡す。
「絶体絶命ですよ！？」

『……』

え？間違ってないですよね、僕？

「劉璋か……」

「あ、夏侯淵さん。お久しぶりですー」

僕は周りの兵の中に見知った顔を見つける。

「確か、前線には出ないと言っていたが……」

「え、あれですか？嘘ですよ……？」

チッチッチと指を振る僕。

「駄目ですよー？敵国の官の言うことを信じては」

――――ニシシシ。

「そうか。だが、劉璋この状況からはいくら貴公でも抜けられまい！」

夏侯惇が指示をすると弓兵が矢をつがえる。

「劉璋、援軍は来ぬのか？」

「あぁー……ちょっと無理かもですねー」

「それはどういう意味じゃ？」

「いや、まぁ、僕がここに来るために使った策の影響で敵も味方もしばらくは身動き取れないんですよねー」

『鉉』は確かに『ツルギ』に雷を誘導するのだけど、その他の場所にも落ちるからなー。

僕が『鉉』を展開させたのって丁度、魏と蜀呉の接敵した地点だから、お互いにしばらくはにらみ合いになるだろう。

だから僕らが今いる“魏の”前線に援軍が来ることはまず無い。

「して、お主は何しに来たのじゃ？」

「……黄蓋さんを助けに？」

「聞くでないわッ！？」

まぁ、冗談はここまでで。

「それだけ元気なら大丈夫ですね。――――微刀『釵』」

――――ストン。

僕が呼ぶと軽い音を立てて『釵』――――日和号が現れる。

「それじゃ日和号、黄蓋さんを呉の本船まで連れてってねー」

「……微風刀風」

コクンと頷くと日和号は逆立ちになる。
そのまま四本の足は回転し、足をプロペラのように宙に浮く。
「はい。それじゃ、黄蓋さん。日和号に掴まって、掴まって」
「ちょっと待て、こやつは何じゃ、説明をせい！？」
「……面倒だ。日和号、黄蓋さんを掴んで強制送還だ！」
コクンと頷く日和号。
「なッ！？待てと言うに！」
黄蓋の腕を掴み、空へ飛び立つ日和号。
「いってらっしゃ～い」
僕は手を振り、見送る。
ん？何で日和号が僕の言うことを聞いているのかって？
そりゃ、自分の出したものが言うこと聞かないなんて嘘だからさ。
――――ニシシシッ。
「貴公1人残って良かったのか？」
「うにゅ？まぁ日和号は1人ぐらいしか運べませんし」

矢をつがえる兵たちを見て、笑う。

「僕1人なら日和号が帰ってくる間、逃げ切れますし……」

「ほう、大した自信だな、劉璋。ならばこの夏侯妙才の弓、特と味わうがいい！」

「え？あ、違っ！？話し合い、話し合いしましょうよッ！？」

「ここは戦場だ。戦場で武官同士が出会えば……決まっているだろ！」

「だから僕武官じゃないぃぃぃ！！」

夏侯淵さんはクールな方だと思ったのにぃ！？意外と熱くなりやすいのですか！

流石はあの夏侯惇さんの妹……。

――――ヒュンヒュン。

「にょわッ！？」

夏侯淵の放つ二本の矢を必死に避ける。

「ちょっ、おまっ！当たったらどうするんですか！？」

「元からそのつもりだ！」

いやぁん、目がマジだよ～。

『鎧』は今、使用中だし。『鎚』は船ごと壊しちゃうから一瞬しか使えないし。

……あれ？ヤバくね？

よ、幼女を！幼女補正を！？

「ひょっ！……ぬわっ！……ほらさっ！……そらさっ！」

「くっ、すばしっこいな……」

夏侯淵だけでなく、他の兵からも次々と狙われ、矢の雨を掻い潜り避け続ける僕。

「えぇーと、話し合いませんか？」

「なんでそんなに平気そうなのだ、貴公は……」

うん？まぁ、避けてただけですからねー。

「だが、ここで貴公を逃がしてはならないと華琳様から言われているからな」

「はい？曹操ちゃんが？」

それは何故だろう？

「あぁ。黄蓋の火計が失敗したら必ず、劉璋が出てくる。行き逢った者は劉璋を捕らえろとの命令だ」

「はぁ……」

それは大変ですねー。

「まぁ、頑張って下さい、夏侯淵さん」

「他人事か、劉璋よ」

「まぁ、他人事ですからねー」

「貴公自身のことだろ……」

「命じられたのが僕でなければ他人事ですよー。……さて、そろそろ」

僕は逃げの姿勢を止める。

「なんだ？諦めてくれたか？」

「まさか。……斬刀『鈍』」

僕は『鈍』を呼び出し、出鱈目に構える。

「さてと、少しは本気出しちゃいますか……」

――――ニシシシッ。

３５話　劉璋の大舞台（前書き）

日付も変わらぬ内に、もう１話投稿。

35話　劉璋の大舞台

―――――――――――――――

「とりゃ」

――――カキン。

矢を叩き落とす僕。

「とりゃ、そりゃ、せりゃ」

――――カキン、カキン、カキン。

次々飛来する矢を叩き落とす。

「くっ、何が武官でないだ。飛来する矢を確実に叩き落とすなど……」

「いやいや、全部じゃないですよー」

叩き落とせない矢は避ける。

「護身術は基本ですよー」

それに切れ味が特徴の『鈍』を使っても矢を一つとして斬れてないですし。

「さてと、同じことの繰り返しじゃ飽きませんか、夏侯淵さん？」

「ならば素直に我らに付いてきてもらおうか」

「いやいや、違いますよー。日和号を待つ間、世間話でもしませんかー？」

「まだそのようなことを……」

「まぁ僕は基本的に面倒くさがりですからねー」

戦うのは面倒だ。争うのは面倒だ。競うのだって面倒だ。

「なら何で戦っているのだ、貴公は……」

何故、僕は戦うのか……。

「――――――――――」

「……は？」

まぁ、聞こえないでしょうね。

「ニシシシッ。僕は降りかかる火の粉を払ってるだけですよー」

『鈍』を振り払う。

さてと、もうそろそろ日和号も帰って来るはずですね。

「く、矢では駄目か。だがまだ火の手があっては近づけない」

「だーかーらー。話し合いましょうって言ってるじゃないですか」

対話、いいですよー、楽しいですよー。

「矢が無駄ですし、体力も無駄ですし、僕も余計な運動しなくてすみますからねー」

「……私も姉者ではないからな、拳で語り合いたいとは思わない。だが、貴公に関して言えば言葉で語りたいとは思わんよ、私は」

矢で僕を狙いながら続ける。

「貴公と会話をすればするほどに私は沼にでも入って行くような感覚に陥る」

あぁー、それはそうだろねー。

「故に私は貴公とは語らうつもりは毛頭ない」

――――ヒュンヒュン。

――――カキンカキン。

「……うむむ」

困ったなー。僕の戦術は基本は騙りなんだよなー。

騙して、嘘ついて、惑わして、翻弄する。

単細胞なら簡単。遠くで指揮する軍師も難しくはない。でも戦う知将は厄介だなー。

「投降すると言うなら聞くがどうする、劉璋？」

「前にも言いましたけど、何もしなくていいのであれば軍門に降るのもいいのですけど……」

あの曹操がそれを許すとは思えないんだよねー。

「あぁ。それなら構わないそうだぞ」

「――――え？」

「だから、我が軍門に降れば何もしなくていいと華琳様は仰っていたぞ」

「……マジで？」

「あぁ。どうせ、貴公は勝手に動くだろうから、との仰せだ」

……むむむ。よく分かってるなー、曹操ちゃん。

流石は覇王。他人を使うのが上手いよねー。

「まぁ、それならば――――」

と僕が返事をしようとしたその時……。

「――――柳々様ッ！！」

自分の忠臣の声が聞こえた。

「紫苑、早く柳々様の元へ船をつけて下さい」

「落ち着いて、兎ちゃん。こうも雷があちこちに落ちては船を操舵するだけでも大変なのよ」

「そうじゃぞ、兎。柳々の奴ならこの程度でくたばるタマではなかろう。じゃから落ち着けと言うに」

やっとのこと雷を迂回して魏の前線まで船を進めてきた王累たち。

「し、しかし……」

「しかしも案山子もないわッ！お主が焦ったところで船が速く進むわけでもなし。こんな時くらい柳々のあの飄々とした態度を見習わぬか！」

「う……」

王累は再び船の先端、我が主の方を向く。

（どうか、ご無事で……）

「――――柳々様ッ！！」

「あれは蜀の船か。まさかこの悪天候の中船を動かす者がいようとは……」

「……」

僕は遠目でもハッキリと確認が取れた蜀の船を見る。

そこに掲げられた旗は、“黄”と“厳”そして……“王”。

「……ぷッ」

「うん？どうかしたか、劉璋？」

「――プハハハハッ！」

唐突と笑い出す僕。

「アハハハッ。馬鹿だ、馬鹿がいるぜ！」

僕は蜀の船を指差して、腹を抱えて笑う。

「クハハハッ。や、ヤバい、息……出来、ねぇよ、これ。ククク、抱腹絶倒とはこのことだぜ」

我を忘れて笑う僕。

「いやいや、確かに。確かに貴女は忠実ですけど、ここまでとは……」

僕は目に浮かぶ涙を拭う。

その涙は笑い涙か、嬉し涙か……。

「ククク。夏侯淵さん、やはり僕は蜀にいることにしますよ」

――――ニシシシッ。

「ふん。ならば……ここで討たせてもらおうか」

矢をつがえる夏侯淵。

「ニシシ、いいですよー。気分がいいのでお相手しますよー」
僕は『鈍』を右手に、左手には『鉋』を出現させる。
「文官が攻めに転じるか」
「文官扱いなんかしてないくせに。まぁ、今の僕は蜀の政務官でなく、道化師、劉季玉として戦場に立ちましょうかね」
「さぁ……」
「いざ、尋常に……」
『――――勝負！』

目眩(めくるめ)く攻防。
ただし、夏侯淵が攻で僕が防ですけど……。
飛来する矢を今度は根こそぎ叩き落とす。
『鈍』や『鉋』だけではない。『鎚』、『鋸』、『銓』、『鍍』、『銃』、残る全ての変体刀を出現させて、叩き落とす。
相手の矢が叩き落とし続ける。

船上でまるで舞踏を踊るごとく、クルクルと。雨のごとく降る矢の中を躍り続ける。

その中心で僕は……。

――ニシシシッ。

笑う。

だが。

世界は。

どうやら。

僕が嫌いみたいだ。

――――――グラリ。

地面が傾く。いや、船が揺らいだのだ。

だからこそ夏侯淵は矢を見当違いな場所に放ち、僕も足元に気を取られて、バランスを崩したのだ。

本来なら当たるはずのない矢が本来いるはずのない僕に向かって飛ぶ。

……あれ？これ、無理じゃね？

――――――ずぷり。

なんとも簡単に体に突き刺さる矢。

奇しくもそれはど真ん中。

「りゅ、柳々様ぁぁぁあああ！？」

遠くで聞こえるのは僕の忠臣の声。

僕の友達候補の女の子。

僕は力の入らない体を無理矢理回して、声の方を向く。

あぁーあ、そんなにぐしゃぐしゃな顔をして。せっかくの可愛い顔が台無しだなー。

――――――すぅ～。

鉄の味のする口から思いっきり息を吸い込む。

まぁ、こんなにも慈しい忠臣にご褒美だよ。

「ニシシシシシシシシシシシシシシシシシッ！？」

最後に盛大に笑って僕は長江の中へと落ちていった。

36話　大嘘

――――――――――――――――――――――――

「……ぷはッ！？」

し、死ぬかと思ったー。

僕は岸までどうにかたどり着いた。

ゴロンと仰向けになり、寝転ぶ。

「あぁ、もう服びしょびしょだよー。気持ち悪いー」

僕は少しでも速く乾くように襟元を開け、空気を入れる。

そこで異変に気が付く。

「あれ？……傷がない？」

確かに僕は夏侯淵の矢に刺さって……。
なのに服には穴が開いているけど、体は綺麗なままだ。
「なして？」
もしかして神様助けてくれたの？
「――――そりゃ、柳々様が化け物だからですよ」
「――――ッ！？」
いつの間にか僕の頭の方に王累が立って、影を作っていた。
「流石は化け物ですね。心臓を貫かれてピンピンしているんですから」
「えぇと、兎……」
「なんですか、柳々様？」
服が濡れているからだろうか。こんなにも背筋が寒いのは……。
「何故、君がここに？」
「そんなの決まってるじゃないですか」
その場に座り込み、僕の頭を持ち上げて膝枕をする王累。

「ちゃんと自分の所有物の管理はしないと」
そう言って頭を撫でてくる王累。
その手は温かく、冷えた体には何より嬉しい。
……はずなのに何故こんなに寒いのか。
「柳々様。柳々様はご自身のこと、どう思っていらっしゃいますか？」
優しく撫で付ける王累。
「太守として蜀を治めて、桃香様の元で政務官として務めて、それに転生してみて……」
「――――――え？」
「転生して強運の力を手にいれて、特殊な刀を手にいれて、どうでした？楽しかったですか？」
いつもの笑みを浮かべる王累。
「な、んで、それを？」
「柳々様、鵺って知ってますか？」
「ぬ、え？」
「はい。見るものによって形を変え、聞くものによって声を変える。

そのものの畏れるものに、そのものの望むものに……」

何故、今こんな話をするのだろう……。

「柳々様はご自身が転生する前のこと覚えてますか？」

「それは勿ろ――――」

……あれ？

「それは勿論、覚えてませんよね」

優しく頭を撫でる。子どもを寝かしつけるように。

「それは当たり前。だって……そんな記憶与えてませんから、私」

そう言った彼女はひどく妖艶な笑みを浮かべている気がした。

あぁ、駄目だ。視界が霞む。

彼女の声が、彼女の手の感覚だけが僕を覆い尽くす。

「貴方は私の鵺。私が蜀を治めるために造り出した偶像」

彼女の声が直接脳に届いている気さえする。いや、本当にそうなのかもしれない。

「身に覚えがあるのではないですか、柳々様。まだ桃香様たちが居ない頃は私は常に貴方の傍に居ました。でも桃香様たちが来てから

あまり一緒に居られませんでしたよね」

だから、僕はフラフラしていたのか？創造した彼女と距離があったから？

「曹操のところに行った時も……」

そうだ。あの時はかなりヤバかった気がする。

「だから今回はちゃんと一緒に呉まで来て、キチンと傍に居ましたよね、私？」

その通りだ。

「だから、今回あんなにも頑張れたんですよ、柳々様」

彼女の傍で力を蓄えていたから。

「本当に私の鵺は偉い子ですよ」

頭を撫でられる。

温かく、自然と心がポカポカしてくる。

「本当に偉くて、賢くて、強くて、私の理想通り」

――――ゾクリ。

「――――駄目ですよ、動いちゃ」

嫌な予感が全身を駆け巡る。それとは逆に全身から力が抜けていく。

「私の思った通りに考えてくれて、私の思った通りに動いてくれて、私の思い通りに生きてくれる」

――――鵺。

彼女が囁く。

大きな声ではない、むしろ蚊の鳴くように小さな声だ。

それでも僕の頭の中をぐわんぐわんと揺さぶる。

「……でも、それももうおしまい。あれだけ大勢に見られながら死んでしまったのだから、もう戻れないわよね。でも大丈夫よ、魏の戦力は削れたわ。これでもう大丈夫」

――――だから、もう貴方は用済みよ。

身体が消えていくのが分かった。

深い深い澱(おり)の底へ……。

僕が生まれた闇の中へ。

―

……というオチはどうだろうか？

僕は沈みゆく水の中で考えた。

３６話　大嘘（後書き）

すみませんでした。とりあえず謝罪を……。

いや、これは一つの没案でして……。

だ、大丈夫。ちゃんと考えてますからッ！？

それではまた次回にご期待を。

ご意見、ご感想お待ちしております。

37話　大嘘つき（前書き）

前話は良くも悪くも読者の皆さまにインパクトを与えられたようで、作者はとても嬉しいです。

作者の悪戯心にお付き合いいただき、実に感謝しております。

感想の数も一話に一つあるか、ないかのこの小説もたくさんの感想をいただいて作者は感激でした。

そんな話の次でありますから、もしかしたら色褪せて見えてしまうのではないかと不安な作者であります。

願わくは、皆さまに楽しんでいただけることを。

それでは本編をどうぞ。

長々とすみませんでした。

37話　大嘘つき

蜀呉の本陣。

劉璋の奇策により、曹操たち……魏を追い払うことに成功した。

だがそのような祝いの席のはずだというのに皆の顔は暗かった。

「柳々のやつが儂より早く逝くとはの……」

「桔梗、戦乱の世よ、それは仕方のないことよ。それに一番悲しいのは……」

二人は先程から無言で俯いている王累を見る。

劉璋の死をその目で見てからここに来るまで一言も喋らない王累。

「兎ちゃん……」

そんな王累になんと声をかけたらよいか分からない桃香。

「兎……」

愛紗たちは勿論のこと、呉の陣営ですら王累に声をかけることは出来なかった。

「――兎さん」

その中、1人、兎へ声をかけたものがいた。

「……ほん、ごう、さ、ま」

天の御遣い、蜀の二大徳の1人、北郷一刀だった。

「本当にすまない。俺があんな無茶な……」

「なにを、言っているのですか？そんな言い方……」

兎はここで初めて顔を上げる。目は赤く腫れていたし、頬には涙の通った跡がまだ残っていた。

「……え？」

「そんな言い方。それじゃあ、まるで柳々様が死んだみたいじゃないですか……」

「兎さん、何を……」

「そうですよ。柳々様が死ぬわけないじゃないですか、そうですよ。あれは……そう、奇術ですよ。前に孫策さんたちに見せたんですよ、剣に刺されても無事で……。ね、ねぇ、孫策さん？」

「……」

孫策にすがるように見る王累だったが、孫策は何も言わず、ただ首を振る。

「な、なん、で……そんなこと……なんで、な、にも言ってくれな……う、うっ。うわぁぁぁん」

王累の目からは再び涙が零れ落ちる。

「王累、貴女だって武人でしょ？なら、劉璋の死を乗り越えなさい。それが劉璋への手向(たむ)けとなるのよ」

何も言わなかった孫策が王累へと声をかける。

「うわぁぁぁん、な、なん、で……ひっく、なんで……柳々様ぁぁぁ！」

「そうね。今は思う存分泣きなさい。そして明日への糧としなさい」

孫策は泣く王累を包み込むように抱き抱える。

「う、うわぁぁぁん！」

孫策の胸で泣く王累。

――――　　。

「ごめん。俺が無茶な命令を出したから……」

「全くですよー、お館さん。金輪際、あんな無茶なことはなしですよー。一生のお願いってやつですからねー」

「あぁ、もうあんな命令は出さないよ」

「そうしていただければ僕も助かりますよ。ニシシシッ」

「……ん？」

「どうかしたの、ご主人様？」

「いや。今、誰と会話してたんだ、俺？」

「え？誰って……」

と周りを見渡す桃香。

「……え？」

誰1人として喋ってはいなかった。

「いやはや、流石に僕もあれは疲れましたからねー。ほら、服だってびちょびちょなんですよー。早く着替えたいですねー」

――――ピチョン。

と上から水滴が落ちてきた。
「ニシシシッ。報告って要りますー？」
「りゅ……」
皆が上を見ると、そこには……。
「要らないなら、僕着替えてきたいのですけど？」
「りゅ、りゅりゅ……」
「うん？皆さん聞いてますか？」

『柳々ッ！？』
『劉璋ッ！？』

梁に逆さ吊りになっている柳々だった。
「どうもー」
僕は逆さに手を振る。

「よいしょっと……」
僕は梁から離れて下に落ちる。
「え、あれ、柳々、さん？」
僕を指差す桃香。
「はいー」
「お、お化けじゃないよな？」
恐る恐るといった感じの翠。
「足、ありますよー」
服をたくしあげ、足を見せる僕。
『……』
皆、あんぐりと口を開けたまま固まっている。
「――柳々様ぁぁぁ」
「おっと」
「よかった、よかった、よかったですぅ、りゅうりゅうさまぁ～」
飛び付いてきた王累を受け止める僕。

「あややや。大胆ですねー、兎は」

「というか柳々よ、死んでなかったのか？」

頃合いを見て、桔梗が言う。

「死にましたよー。矢で一回でしょ、その後痛みで一回でしょ、長江で窒息して一回、その後長江の中で二回ぐらい。いや、まぁここまで来るの大変でしたよー」

まさに死に死にここまでやって来たわけですよ。

「死んだって……。生きてるじゃない、貴方」

「まぁ、そうなんですけどね、孫策さん」

うむむ。どう説明したものか？

――――キュピーン。

あ、ロリレーダーではないですよ？閃きです！

「お館さんなら未来から来たんだし、知ってますよね、吸血鬼」

「……え、まぁ、大まかになら……。ってなんで柳々さんが俺が天からじゃなくて、未来から来たこと知ってるんですか！？」

「まぁ、それはこの際、置いときまして」

箱を動かす動作をする僕。

「まぁ、簡潔に言いますけど……僕はソレです」

「……え？」

お館はあまりの驚きに、他の人は分からずに呆けていた。

「ねぇ、ご主人様。きゅうけつきって何？」

皆を代表して桃香がお館に訊ねる。

「俺のいた世界だと吸血鬼って言うのは人の血を吸ったり、日の光に当たる灰になったり、十字架に弱かったりする人外のことなんだけど……」

「え？でも柳々さん普通に太陽の下に出てたよね？」

「確かにそうなんだよな……。ここでは吸血鬼の定義って違うのか？」

と皆が僕を見る。

「いや、あってますよ？ただ、日の光に弱いとか、十字架やにんにくが嫌いだとか、流れる水を渡れないとか、心臓に杭を打たれると死ぬとかは全部嘘ですよー」

「え、そうなんですか？」

「そりゃそうですよ。そんなに規制があっては生きるのに不便じゃ

ないですかー」

僕らはただ死なない、いや正確に言うなら死んでもすぐに生き返る。

どちらかと言えば動く死体（デットマン・ウォーキング）が近いですかねー。

え？転生云々はどうしたのかって？

あれも嘘ですよ。そんなご都合主義なことあるわけないじゃないですかー。1人芝居に決まってますよー。

「まぁ、血は吸いますけど、ね」

じゅるりと舌で口を嘗めるとザッと皆が遠退く。

「ニシシシッ、冗談ですよー。確かに血は吸いますけど、他のでも栄養分は取れますから」

「でも人外と言っても見た目は私たちと変わらないわね」

「うん？もっと人外っぽく角とか生やした方がいいですか？」

「え、出来るの！」

孫策が何故かわくわくした感じで聞いてくる。

「まぁ、出来ませんけど……」

「なによー。つまんないわねー、ぶーぶー」

「えー、何故僕が責められるんですかー？」

理不尽です。しくしく……。

「まぁ、人と変わらぬ容姿も人と生きていく上で大切なのですよー」

人と変わらぬ容姿で弱点が多いこと。それが良き隣人たる人間と付き合うための条件なのだ。

「でも本当に吸血鬼なんですか、柳々さん？」

「まだ疑ってるんですか？なんなら、心臓貫いて見せましょうか？」

「え！？いや、それは勘弁してほしいかな……」

「ならなんですか？蝙蝠になれっていうのもなしですよ。確かに蝙蝠たちからは好かれたりしますけど、蝙蝠になるのはできませんからねー」

あ、でも確かにウチのお姉ぇが蝙蝠に自分の身体を食べさせて消えたようにしたとかなんとか……。

「……あ！吸血ならどうですか？」

と腕で受け止めたままの王累を見て……。

「柳々様？」

――――――カプッ、チュー。

吸ってみた。

首？イイエ、まうすとぅーまうすです。

「……ぷはっ。ご馳走様でした」

――――チュルリ。

「……ほへぇ～」

その場に座り込む王累。

「ちょ、いきなり何をしているのだ、お前はッ！？」

「は、はぅ～」

「はっはっはっ。やるではないか、柳々」

皆、思い思いの感想を述べる。

「いや、これが吸血ですし……」

ちょっと口の端から零れた血を手で拭う。

普通は首とか手首とかなんだけど、痕がつくと可愛そうじゃないですか。

「あれ？兎さんは大丈夫なんですか？」

「ん？まぁ、吸った量は少量ですから特に支障はないはずですよ？」

「いや、そうじゃなくて……。吸血鬼に血を吸われたら吸血鬼になるんじゃ……」

「いやいや、食事と従僕を作るのは違いますよー。食事をする度に従僕が増えたんじゃたまりませんよー」

刃の下に心がある金髪吸血鬼も言ってましたよー。

「……うぅん。あれ？何で私、座って……？」

「どうじゃった、兎？」

囃し立てるように桔梗が王累に尋ねるが……。

「え？何がですか？」

「何を呆けておるのじゃ。柳々との接吻についてじゃよ」

「……え。私と柳々様が……。ッ！？いやいやいや。そんなわけないじゃないですか！？いくら嬉しかったからといって、私が柳々様とせ、せせ、せ、接吻など……。とてもとても……／／／／」

からかわないで下さい、と俯いてしまう王累。

「ん？何を言うておるのじゃ、お主は？」

「あぁ。兎は覚えてないですよ」

『はぁ？』

「吸血鬼の性質として魅了（チャーム）と言うものがありまして、まぁ一種の暗示みたいなもので、僕に何をされたかは覚えてないのですよー」

そうしないと一度血を吸ったらその町を出ていかないと騒ぎになりますからねー。まさか死ぬまで吸うわけにはいきませんしねー。

３８話　少しの休憩（前書き）

ここまで連日投稿しておりましたが明日は少しお休みさせていただきます。

38話　少しの休憩

―――――――――――――――――――――

「ふわぁ～……」

「眠そうじゃの、劉璋」

「おや、黄蓋さん？」

早朝、城門の前で黄蓋と出会う。

「お主はいつも眠そうじゃの。キチンと睡眠は取っておるのか？」

「うにゅ？僕は夜型ですからねー。夜は眠らないのですよー」

それに昼は眠れませんし、ここ数年まともに寝てないのですよー。

血も飲んでない、寝てもいない、だからこそあまり動けずにいたの

ですけど……。

少量とはいえ、王累に血はいただきましたし、赤壁前には暇でしたから寝てましたしねー。

まぁ、基本的に人間よりは身体能力は高いですし、長く生きてますからねー。経験は時として武器になるのですよー。

噛ませ犬忍者の狂犬さんがいい例ですよねー。

「そういえば、お主は吸血鬼とかいうのじゃったな。……今でも信じられないがの」

「まぁ、信じられないのは当然ですけど」

まぁどっちにしろ真実は変わらないのだから。

「ふわぁ～」

欠伸を一つ吐く。

「そういえばまだ礼を言うておらんかったの」

「……～あ。何のですか？」

「何のとは……。赤壁で儂を助けてくれたことについてじゃよ」

首を傾げる僕に呆れたようにため息を漏らしながら答える黄蓋。

「別にいいですよー、そんなこと。僕はお館さんに言われてしたの

ですから、礼ならお館さんに言ってください」

「北郷にも言うわい。じゃが実際に助けてくれたのはお主じゃからな。お主にも礼をしたいのじゃよ」

そんなものですかねー。

「まぁ、そこまで言われるのでしたら受け取らないのも失礼ですよねー。ではこの劉季玉、ありがたく受け取らせてもらいますよ、黄蓋さん」

「……祭じゃ」

「……は？」

「じゃから儂の真名は祭じゃ。赤壁の礼に儂の真名をそちに預けようぞ」

腰に手を当てて、にやりと笑う黄蓋さん。

「え、あ、いや……」

「命を救われたのじゃから当然じゃろ？」

「……まぁ、それもそうですね。では僕のことも柳々で構いませんよー、祭さん」

「うむ。了解した、柳々」

「ふわぁ～。それじゃ僕は部屋に戻りますね。王累が起こしに来て、

僕がいないと慌てますからねー彼女」
ではではー、と後ろ向きに手を振り部屋へ戻っていく。
そして1人残された祭は……。
「うむ……。儂がもうちぃとばかし若ければのう……」
その呟きは鳥の囀りと共に朝の光の中に紛れていった。

「あ、いたいた。柳々さん、ちょっといい？」
「おや、お館さん。どうかしましたか？」
廊下で後ろから呼び止められる。
「ちょっと今、時間いいかな？」
「あぁ、別に構いませんよ」
「実は柳々さんに聞きたいことがあるんだ」
「うん？……何故未来から来たと知っているかと言うことですか？」

「！？」

まぁ、そうでしょうね。

「もしかして柳々さんも……」

「う～ん、お館さんがどうやってここに来たかは知りませんけど、多分僕とお館さんは違うと思いますよー」

「えぇと、柳々さんはどうしてここに？」

「僕は自分の意思でここに来たのですよ」

「えッ！？どうやって！？」

「まぁ、説明しても分からないと思うのですが……。お館さんはこの世界のことどう思いますか？」

「……俺の知ってる三国志の武将は皆男だし、天の御遣いなんて出てこない。だからこれは――――」

「パラレルワールド、つまりは平行世界」

「そうだと思う」

「まぁ、当たってはいますね」

「柳々さんはこの世界が何なのか知ってるんですか？」

「ここは外史。まぁ、簡単にいえば一つの可能性の世界。アニメや漫画なんかと一緒だね。誰かが想い、誰かが願った世界」

「……外史」

「で、僕はそんなアニメや漫画のコマに入り込んだ。そういうわけさ」

「なんでそんなことを……」

「う～ん、暇だったからかな？」

「暇だった、って」

「考えてごらんよ。僕らは君たち人間より長生きだよ？いや、生き続けてるんだよ。こんなりだけど、僕はお館さんよりお爺ちゃんなのですよー。退屈な時間とそしてそれを潰せる技術が僕らにはあった。だからそれを使って暇を潰す」

平行世界へ行ける技術。

まぁ、世界を選べないし、元の世界に戻れないんだけどねー。

とは言っても僕らは死なないし、生き続けてるからまたこの世界の未来で技術を使って渡り歩けばいいだけだし……。

「お館さんは帰りたい？」

「え？」

「元居た世界に帰りたい？もしそうならなんとか出来ると思うけど」

「……」

「どうする？」

「……いや、いいよ。俺はまだここでやらなきゃいけないことがあるし……。皆と離れるなんて考えられない」

「ニシシシッ。まぁ、お館さんならそう言うと思ってたけどねー」

それでこそ蜀の君主だと思いますよ。

「あ、そういえばもう一つ聞きたいことがあったんだった」

「うにゅ？」

「柳々さんって血を飲まないといけないんだよね？」

「まぁ、いけないと言うわけではないのですが、万全の力を使うのであれば血や睡眠は不可欠ですけど……」

うん？なにやら嫌な雲行きなのですけど……。

「それは男のでもいいの？」

「……」

「愛紗たちの血は分けてやれないけど、俺のなら――――」

「――――い、いにゃぁぁぁぁぁ！！！！」

僕、脱兎の如くダッシュ。

「え、柳々さん……？」

イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ。

無理無理無理無理無理無理無理。

確かに、男性でも可ですけど僕的に不可です。

て言うかお館さんも僕と王累の行為を見て、よく言い出せたよ！？それだけ真摯なんだろうけど。いや、確かに口から出なく手首とからなら……。いやいや、男が男の手首に口をつけてる絵はなんかヤバイんじゃないか！？　やっぱり無理ぃ！！と言うか今まで別に吸ってないし、ここに来て吸ったのは蜀に来て間もない時と魏に行く途中の道のりと先日の王累だけだし……。ほら、僕、別に吸わなくてもやっていけるじゃん。そう、僕はやればできる子なんだもん。べ、別に吸わなくてもいいんだからね！？

劉璋、混乱中。

39話　兎と柳と昔話

「帰らせてほしい？」

一同が揃う前で僕はそう言った。

「え？柳々さん、元の世界に帰っちゃうんですか？」

「あ、それは違いますよ、桃香さん。蜀に帰らせてほしいという意味ですよー」

帰る術はないですし。

「なんだそうなんだ～。良かった～」

「それで何故、急にそんなことを言うのだ？」

「いや、僕ここにいても意味ないですし……。おそらく、次の戦いで終わりですからねー。終戦後の処理を先にやっておこうかと思いましてー」

「うむ。確かにそうだが……」

「えぇと、柳々さん。大変申し上げにくいのですが……それは無理です」

愛紗が納得しかけたところで横から朱里が言う。

「うん？それはどういうことだ？柳々が戦力になると言うのか？」

「あ、いえ、それはないのですが……」

うわぁ。ハッキリと否定されちゃいましたよー。お兄さんだってやれば出来るんですよー。

「問題は柳々さん自身でなくて……」

と朱里は僕を見る。いや、その視線は僕を越えて後ろの王累を見ているのだ。

「ん？兎がなんだと言うんだ？」

「えぇと……。兎さん、柳々さんが蜀に帰るそうですけど……」

「であれば私も帰ります」

ハッキリと言い切る王累。

「……と言うことです。正直、部隊の指揮ができる将は一人でも多く欲しいんです」

あぁ。そういえば最近、やたらと王累が僕にベッタリなんだよなー。就寝時と厠以外は常に後ろに控えてるんだもん。忍者に転職したのかと思ったよ。

「ですので、柳々さんの蜀へ戻ることは許可できないのです」

「う～ん、まぁ仕方ないですね。ここで出来る限りのことで諦めましょう」

そして僕は後ろに下がる。

「兎ぃー、そこの書簡取ってぇ」

「はい。どうぞ、柳々様」

只今、部屋にて書類作業中。

「兎ぃー、喉乾いたぁ」
「はい。お水です、柳々様」
サッと水を出してくれる王累。
「兎ぃー、お腹す――――」
「どうぞ、軽く摘まめるものです」
わぉ！スゲェよ、王累。青い耳無し猫型ロボットより使えるよ。
それにこの甲斐甲斐しさ……。もうメイド服を着せたいねッ！？
「柳々様、どうかなさいましたか？」
中々食べない僕に王累が不思議そうに見る。
「いや、なんでもないよー。いただきまーす」
手を会わせて、僕はそれをいただく。
「……ど、どうでしょうか？」
「ぐもぐも。……ん？美味しいですよー」
うむ。少し空いたお腹に程よい。
「うむ。あまり食べたことのないものですね。呉の地方独特のものですか？」

「え、いや、あの……。それ、私が作った、のです……」

「ふぇ？兎が？」

なにやら手をクルクルしながら答える王累。

「は、はい。それは私の母が子供の頃によく作ってくれたものなんです」

「ほへぇー。お袋の味ってやつですねー」

「は、はい。私は小さい頃からこれがすきでして、よく母にねだっては怒られてました」

「へぇー。それは意外ですねー」

「そんなことはありません。私は昔っから手のつけられない駄々っ子ですから……」

いや、だから意外なのですけど。

「厳しい母でしたからその反発もあったのだと思いますよ。いつもは厳しい母でしたが私に何か良いことがあると必ずこれを作って出してくれるのです」

「優しいお母さんですね」

「はい……」

昔話をする兎はとても楽しそうだった。それほどまでに自慢の母親なのだろう。

「そしていつも食べる私をニコニコと見つめているんです」

「ふむ。それでは一緒に食べますか？」

「……へ？」

「いや、一人だけ食べているのはなんだか申し訳ないですからねー」

「え、あ、……はい」

王累が僕の向かいに座り、一つ手に取り口に入れる。

「はふぅ～」

いや、ホント美味しそうに食べるね、兎さん。

まぁ自分で作ったものなのでどうなのかはさておくとしてください。

「幸せですぅ」

おぉう！とろけてる！？

「私、いつか大切な人とこれを一緒に食べるのが夢だったんですぅ」

ん？何か重大なことがポロリしたような気がしますが……まぁ、いいか。

夜。

「それではお休みなさいませ、柳々様」

「お休みー」

恭しく礼をして部屋から出ていく王累。

あれから王累の昔話を聞いた。

あの髪留めは王累の母が王累が仕官口を探しに町を出るときに餞別としてくれたものらしい。

乱世が終わったら一度里帰りをしようと王累は言っていた。その時一緒に来て欲しいとも言われた。なにやら紹介したいらしい。

まぁ確かに王累にはいつもお世話になってるからなー。一度挨拶に行った方がいいと思ったから了承したら、とても喜んでいたなー。

そんなにも母親に会うのが嬉しいのだろうか？

さて、僕の夜はまだ長い。何をしようかなー？

そして僕はフラフラと夜の帳の中へ歩いていった。

４０話　趣味もほどほどに（前書き）

週間アクセス数が２万を越えました！

いやぁ、ホント驚きです。

拙い才能をフルに絞り、書いた小説がこのようなことになり、作者はもう感激です。

それもこれも全て読者の方々のお陰で御座います。

これからも皆さまに楽しんでいただけるように精進しますので、よろしくお願いいたします。

４０話　趣味もほどほどに

―――――――――――――――――――――

「あ、おはようございます、劉璋殿、王累殿」

「おはよー、周泰ちゃん」

「おはようございます」

廊下で元気一杯の周泰に挨拶をされたので、僕は片手を挙げ、王累は会釈をした。

「今日も仲が良いのですね、お二人は」

両手を合わせて満面の笑みで言う周泰。

「え、はわっ、そそ、そんな～。私などが……」

なにやら顔を真っ赤にしている王累。

「周泰ちゃんはお仕事ですか？」

まぁ、華麗にスルーしときましょう。

「はい。偵察です」

「そうですかー。そう言えば周泰ちゃんも避けはしないのですね？」

「え？避けるって何がですか？」

「いや、僕のことですよ。僕って人外ですよ？普通はこう……何でしょう？」

「よく分かりませんが、劉璋殿は祭様を助けていただいた恩人ですから、私を始め、呉の人間は劉璋殿のことを慕いはしても、避けるなどはありません」

キラキラ笑顔の周泰ちゃん。

はぅあ！？ま、眩しい！

「そ、そうですか……。引き止めてしまってすみませんでした」

「いえ、それでは」

シュタッとその場から消える周泰。

おぉ、ジャパニーズニンジャ！

「ふむ。恩人、ですか……」

「柳々様？何故、あのようなことをお聞きになったのですか？」

「うん？なんとなく、ね……」

まぁ、嘘なんだけど。

僕の正体を知って、蜀の人が気味悪がらないのは分かる。だって僕が予め、魅了（チャーム）で暗示をかけてたから。でも呉の人はそんな時間なかったし、気味悪がられても仕方ないと思ってたんだけどなー。

まぁ、何にしろ好意的ならそれでいいか。

「さて、僕らも行きますか」

「はい」

只今、調練に向かう僕たち。

え？僕が調練をするのかって？いやいや、まさか。調練をするのは王累ですよー。

では何故、僕も行くのかって？そりゃ、王累が僕の側から離れないからですよ。

いや、確かに僕の死に際を見ちゃったからってのは分かりますけど。というかそういう風に“設定”しちゃったのは僕だけども……。

それにしても依存しすぎですよねー。

犬属性と言うよりかアメーバ属性？

ツンデレでなくヤンデレの心配をしてるよ、お兄さんは！？

嫌ですよ、腸裂（はらわた）かれるのは。いくら僕でも痛いのですからね！

「どうかなさいましたか？」

「え、あぁ。いえ、なんでもないのですよ、兎。さぁ、調練に行きましょう」

一瞬、兎の目が闇より深かったような気がするのだけれど、気のせいだよね。

……気のせいだよね！？

「あれは……朱里ちゃん？雛里ちゃん？」

僕らは調練の帰り、何やら本を大事そうに抱えた我が国の軍師二人を見つけた。

「あれは何でしょうね。兎は何か知ってますか？」

「えッ！？あ、いえ、その……」

歯切れの悪い王累。

「まぁ、聞けばいいのですよね。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、と言いますからねー」

「え、あッ。柳々様？」

お待ちください、と後ろから聞こえた気がしたが僕の好奇し……探究心は止められない。

まさかこの時は、好奇心は猫をも殺すという言葉を体感するとは思いもしなかった。

「あわわ、こ、これはしゅごいよ、朱里ちゃん」

「はわわ、お、落ち着いて、雛里ちゃん」

軍師二人は小屋の影で本を開き、はわわあわわしていた。

「……ゴクン。次を開くよ、雛里」

「……（コクン）」

――ゴクリ。

二人の息を飲む音が聞こえた気がした。

「――何を読んでいるのですかー？」

と僕が横から現れて、二人の本をかっさらう。

「――へ？……はわッ！？りゅ、柳々さん！いつからそこに……じゃなくて返してくだしゃい！」

「くだしゃい～」

僕は取った本を上に掲げると二人がピョンピョンと飛び跳ねて取り返そうとしてくるが、背の差があるので、ただ周りを跳ねるだけとなる。

――ジュルリ。

なに、この萌え生物？え、食べていいの？

「まぁまぁ、落ち着いて下さい、お二人とも」

スカートのヒラヒラ、堪んねぇー。

後、ちょっと。もう少し高く。ほら今、翻(ひるがえ)って……。

「そんなに何を読んで――――」

と僕は何気無しに、他意も無く、本を開いて中身を見ると……。

――――――ｏｒｚ。

劉璋、精神的に死亡。

「柳々様ッ！？」

ば、バラが……。

いや、僕も他人のことは言えない特殊性癖の持ち主だから、ある程度は許容しようと思うんだよ、うん。

というか百合は許容できるんだけど、薔薇は……。男として許容してはいけないような気がするんだ。越えてはいけない壁だと思うんだよ、うん。

後ね、何故、挿し絵の横にお館さんと僕の名前があったのか気になるんだよね。

いや、気にしてはいけない気がする。ただの誤りだと僕は信じているんだ！！

真夜中。

屋根の上で月明かりを受けて、仁王立ちしている男が1人。

「ふむ。本来、北郷一刀が蜀に降りた場合、黄蓋の火計は成功するはずだった。しかし、それは違った。外史の流れとしては変わりないが……。この外史が異常なのか？それとも余計なファクターがあるからなのか？」

男は顎に手を当て、首を傾げる。

「さて、これからどうなるか見物だな。精々、楽しませて下さいよ」

そして男は闇の中へ消えていった。

41話　最後の戦い

魏は赤壁での大敗後、少し離れた平地で隊を立て直していると、斥候たちから報告が上がってきた。

おそらくは立て直し次第、こちらに侵攻を再開するのだろう。

それで蜀呉の軍師たちはこちらから打って出ることを進言した。

これが最後の戦いになると、皆が思っていた。

「ニシシシッ。絶景かな、絶景かな」

両軍立ち並ぶ平野。それはまさに絶景。

赤壁にて戦力を削られたからといっても大国魏。

蜀呉合わせた連合とも変わらない戦力を持っていた。

だが勝利を収めているこちらは士気も高く、だからこそ軍師陣が攻めることを進言したのである。

「さてと、僕はまさに高見の見物といきますか」

本陣より遠く離れた場所で僕は両陣営を見ていた。

「あ。その前に……兎さん？」

「はい」

僕は影が如く後ろに控える王累を呼ぶ。

「いつまでそこに？」

「一生です」

重いッ！？その信頼は重いですよッ、兎さん！？

「いや、朱里ちゃんも言ってたではないですか。兎はウチの大切な戦力なのですよ？それがここに居ては……」

「私の居場所は柳々様の隣ですから」

あれ？なんか重くなってない？

「まぁそれはいいのですが……。兎が活躍するとこが見たいなー、なんて……」

「ではすぐに行って参ります」

シュタッと走り出す兎。

なんだろう、僕は何かを間違えた感がするんだけど……。

戦いの火蓋は切られた。

両軍一進一退の攻防だった。

そしてその隅では……。

「ふふふ～ん♪」

足取り軽やかに、戦場を闊歩（かっぽ）する男が１人。

その身には防具の類いは一切無く、まるで城内を歩くが如く軽装で

戦場を横断していた。
そのあまりの異質さに周りの兵はその男を認識していなかった。
識(し)っていても、認めなかった。
それは男の味方である兵も同じであった。
「ニシシシッ。フルスクリーンの大迫力ってやつですよー」
男は奇っ怪な笑いと訳の分からない言葉を話す。
「さて、何一つ面白味のないこの戦場、この劉季玉がゴッチャゴッチャにかき混ぜてご覧にいれましょう」
誰にでもなく、劉璋は一礼をした。
それはまるで道化師のように……。

「流石にやるわね……」
曹操は本陣で控え、自分たちの兵の奮闘を見ていた。
赤壁にては事前に黄蓋の火計を知りながらもあの飄々とした男にし

てやられた。だがその男も自分の信頼する部下が討ち取ったと言う。これでなんの憂いもなくなったはずだった。だが……。

（何故、こうも嫌な予感がするのかしら？）

曹操は戦場を見渡す。戦場に靡（なび）く数多の牙門旗。

その中には劉の牙門旗は一つのみ。

自分は何を怖れているのか……。

「この私が怖れる……？」

自分自身がその考えに行き着いたことに驚くのと同時に戦場の端が揺らぐ。

「何事かッ！？」

「ほ、報告いたします。こ、後曲右翼に敵の襲撃との報告です！」

「後曲ですって！？そんなはずないでしょ！？」

横に控えていた荀イクが伝令兵を怒鳴る。

「前曲もまだ崩れてないのよ？それにこんな平地に伏兵なんて出来やしないわよ」

「そ、それが……」

荀イクのあまりの剣幕に伝令兵も畏縮してしまっていた。

「相手が1人でして、しかも鎧も着けずに歩いていたもので、発見が遅れたと言うことで……」

「鎧も着けずにですって！？そんな馬鹿いるわけないじゃない。どこの馬鹿よ」

と荀イクが話題の戦場を見るとそこには……。

緑を基調に、柳の絵の描かれた“劉”の牙門旗が風に飄々と靡いていた。

「ニシシシッ。他愛もないですよー、曹魏の兵士さんたち。それでも覇王の部下ですかー？」

後曲右翼。そこは最後の砦。故に一般兵でなく、曹操の親衛隊、そして精鋭部隊が任されている。前曲は勿論であるが、後曲にも強者が配置される。

その中でいきなり現れた男、しかも鎧も着けていない男1人に魏の精鋭たちは翻弄されていた。

「ニシシシッ」

その男、笑いながら戦場を闊歩する。

刃を振りかざせば、腕が飛ぶ。

剣で貫けば、心臓を破る。

ただ、それだけだ。

いや、正確に言うならば、飛んだのは男の腕だし、破られたのは男の心臓であるのだ。

それでも彼の男は止まることなく、本陣目指して歩む。

いや、それだけならまだいい。手足を千切り、動けなくすればいいのだ。

だがその男の場合は違った。

飛んだ腕はまるで霧のように消え、その変わりに男の肩口からまた腕が生えてくるのだった。

傷口はすぐに塞がる。そのくせ衣服は破れたままなのた。

ビリビリに破れ、血が付いた服を男がピンピンと着ているのだ。

それは畏怖の対象だった。

――――――ニシシシッ。

「ば、化け物！」

そう、まさに化け物だった。

「劉の牙門旗だと……」

前曲にて自身の姉の援護に回っていた夏侯淵が唐突として自軍の後曲に現れた牙門旗を見て驚く。

「……劉備、いや……まさか――――！？」

敵の大将が自らあのような場に行くとは考えづらい、ならば自分の知る劉の名を持つのは……。

「まさか生きていたとはね、劉璋」

「ニシシシッ。こんにちはー、曹操ちゃん」

ついに本陣のど真ん中まで達した僕。

周りの兵も警戒しつつも僕の異様さに圧されて今は何もしてこない。

「呑気な性格は相変わらずのようね」

「まぁ人は早々に変わりはしないものですからねー」

僕、“人”じゃないけど……。

「それはまた奇術かしら？」

僕のなりを見て、曹操は言う。

「うん？まぁ、そうですねー」

ただし種も仕掛けもないですけど……。

「それで、たった1人でここまで来て何がしたいのかしら、貴方は？」

「散歩ですよー。最初はただ見てるだけのつもりだったんだけどねー。暇だったのでつい……」

遊びに来ました、と僕は宣言する。そして……。

「あぁ、大丈夫、首級は取らないから。取ってしまったら楽しくないじゃないですか」

あろうことかそんなことを平然と言ってのけるのだった。

「――――ッ！？馬鹿にするな！たかが文官風情に何が出来――――」

――――パンッ。

僕の不遜な態度についに堪忍袋の緒が切れたのか、激昂する曹操だったが、それは乾いた音が阻む。

――――カラン。

続いて曹操の髪からドクロの髪飾りが落ちる。

――――ニシシシッ。

曹操の正面には細い筒状の鉄を持った僕がいた。

「炎刀『銃』」

日和号が使えるのだから『銃』だって使えますよ？

「首級を取ることは簡単ですよ？」

――――ニシシシ。

「うにゃ！？その手は待ったですよー」
「駄目ですよー。待ったはなしなのですよー」
「く、ならばこの手でどうだ！」
「ならば風はこう動きますよー」
「うなッ！」
「ねぇ、あなたたち何をしているの？」
『将棋ですよー』
只今、程イクちゃんと将棋を指しています。
「だから何で敵の将がここで将棋なんてしてるのよ！？」
荀イクが睨み付けながら叫ぶ。
「いや。僕、遊びに来ましたーって言いましたよね、曹操ちゃん？」

と僕は椅子に座る曹操にそう訊ねる。

「えぇ、確かに言っていたわね……。（まさか本当に遊びに来ただけとは思わなかったけど）」

「劉璋さんの番ですよー」

「うむむむ」

何故か魏の本陣だけが和やかムードとなっていた。

４２話　嘘つきの真実

―――――――――――――――――――――

「ふむ。どちら共、消耗試合ですね、これ」

僕は魏の本陣から戦場を眺めながら言う。

「これは打って出るしかないですよ、曹操ちゃん」

僕は曹操に進言する。

「貴方ね。ウチの将じゃないでしょ？」

呆れたように頭を振る曹操。

その頭には一本しか巻き髪がなかった。

（まさかこの私が不意討ちとはいえ……）

隣にいる飄々とした男を見る曹操。

「あ、そうでした。忘れてましたね」

と不意にこちらを向いた僕に驚く曹操だったが、僕はそれを気にもせず、ほどけてしまった髪を一房掴む。

「な、何を……」

「はい、これでよし」

すぐに手を離し満足そうに頷く僕。

「だから何を……？」

そこで曹操は違和感を感じる。いや、正確に言うなら感じていた違和感が無くなるのを感じた。

「うん。やはりツインテールの人は両サイドに無いとバランスが取れないですよねー」

言ってる意味は分からなかったが、なんとなく予想がついたのか自分のサイドの髪を触ってみるとそこには2つしっかりとあった。

「貴方、やっぱりよく分からないわね」

「まぁ、大概はそんなものですよー」

「それじゃあ、打って出るとするわ」

「あれ？出るのですか？」

「何よ、貴方が言い出したのでしょ？自分の発言には責任持ちなさいよ」

「そうですねー。では僕はここで勝利を祈ってますよ」

「それはどちらのかしらね？」

「ニシシシッ」

そうして曹操もまた戦場に出ていくのだった。

「さて。……何か用ですか？」

僕は振り返らずに訊ねる。

「ふん。用件ぐらい分かってるだろ」

僕の後ろには二人。

一人は少年。

「さて、何でしょうね。僕のような善良な文官にはよく分かりませんね」

「あ〜ら、よく言うじゃなぁい、劉璋ちゃん」

もう一人はヒモパン、おさげの筋肉ムキムキの大男だった。

「いいえ、鍾離権(しょうりけん)ちゃん」

「はぁ〜。それでこの外史はあなた方の管理ではないですよね？左慈、貂蝉」

「えぇ、でも貴方も違うでしょ？ここの担当は果心居士(かしんこじ)ちゃんのはずよ？」

「自分の管理すべき外史をほったらかし、他の管理者が管理する外史に関わるなど言語道断だ」

「何故、そんなことをしたのかしら、鍾離権ちゃん？」

二人は油断なく僕を睨みながら、問う。

「だってつまらないんだぜ」

それに僕は答える。劉璋としてでなく、外史の管理者“鍾離権”として。

「いつもいつも同じ結末を繰り返し見てもなんの面白味もないだろ

？」

僕は笑いながらそう言った。

「だけどよ。自分の管理する外史じゃ干渉したって変わんねぇだろ。なぁ、左慈？」

「くっ」

「だったら他人の外史なら変わるんじゃねぇかと思ってよ。それで果心居士の外史に割り込ませてもらったんだぜ」

毎日毎日同じ番組を見たってつまらない。たまには刺激が欲しいってもんだろよ。

「とは言っても、そんな代わり映えのしない結末になりそうだけどな」

僕は戦場を見渡す。今、まさに決着が付こうとしていた。

だが、それだけではない……。

「この後、五胡が来て、三国が団結してハッピーエンド。これもまた決められたルートだな」

――――――つまんねぇ。

「そうかしら？」

「ん？何が言いたい、貂蝉？」

「結末を変えたいなら、もっと他にやり方があったはずよ。例えば、ご主人様を殺す、とか……」
「それじゃあ、外史の幕が閉じるだろ」
「例えばの話よ。それでなくてもご主人様の居る蜀でなく他の国に与すれば変わったかも知れないわよ」
「……」
「出来ないわよね。腐っても貴方だって管理者なんですものね。外史を壊すことは出来ない」
貂蝉は左慈を見る。
「……ふん」
「それに赤壁でも。あんなベタな嘘まで吐いて、蜀に残ったのは何故？」
それは……。
「いくら土人形でも、いくら不死身と言っても、心ある者なのよ。この外史を愛しいと思う気持ちを持っていたって不思議じゃないわ」
「もし、違った結末を望むなら五胡に与すればいい。そうしたら変わるかもしれないな。お前の求める刺激的なものにな」
僕の背中を見ながらそう二人は言う。

「さてと、そろそろ行きますかね。……微刀『釵』」

僕は日和号に掴まり浮遊する。

「どっちにつくのかしら？」

「決まってるじゃないですかー。僕は――――」

「劉季玉ですよー。蜀の政務官なのですから」

――――ニシシシッ！！

最終話　外史の終わり（前書き）

と言うわけでラストです。

最終話　外史の終わり

やはりこの外史はこういう結末に収まるわけだ。

五胡の侵攻は三国の前にあえなく失敗に終わった。

「いやぁ、一時はどうなるかと思ったけど、柳々のあの『鑑』って技のお陰で助かったぜ」

「いやいや、皆様の奮闘あってこそあの場で使えた技ですよー」

五胡を退けた後、三国の親睦会も含めた宴が催されていた。

「そうなのだ。鈴々たちも頑張ったのだ！」

「おッ！？今、鈴々良いこと言ったぞ」

翠と鈴々はもうお酒が回っているようだった。

「あれだけの武がありながらやはり文官にしとくには勿体ないわね」

「そうよね～。一度手合わせしなくちゃね♪」

「勘弁してくださいよー、曹操ちゃん、孫策さん」

あぁ、見せなきゃ良かった。てか孫策さん目が怖いです！？

「あ、柳々さん、居た！」

と二人と距離を計ろうとしていた時に桃香がこちらに走ってきた。

「どうかしましたか、桃香さん？」

「あ、うん。兎ちゃん、見てない？さっきから見当たらなくて……」

「兎ですか……？」

と僕は後ろを振り向く。

しかしそこには誰も居なかった。

「厠じゃないのですか？」

まぁ、その内帰ってくるでしょう。

僕は城の外で“僕を”見ていた。

いや、正確に言うなら僕を模した土人形なのだけど。

それが今、僕らしく振る舞い、宴の席に居る。

「うむ。我ながら上出来ですね」

僕の性格、言動、ついでに変体刀まで付けて置いたのだ。本物と差異はない。

いや、あれこそが劉璋だ。

「さてと帰りますか……」

と僕は歩き出す。

「――――柳々様」

だが後ろから声をかけられた。

「……私ですか？それなら人違いですよ。私はそのような名前の者ではございません」

僕は振り返り、相手を――――王累を見る。

僕の容姿も声も元のとは全く違う。だからバレるわけが――――。

「いいえ。貴方が柳々様です」

無いはずなのだけど……。

「私はずっと貴方を見てきました。いくら姿形を変えられても私には分かります。貴方こそが私の仕える主なのですから」

「……はぁ～。なんでそうも真面目かな、兎は」

「我が主は不真面目ですからね。私がしっかりしなくてはいけないのですよ」

皮肉を口にする王累。

「一応、僕それなりに仙術には自信あったんだけどなー。何がいけなかったんだろう？完璧に僕の代用品だと思うんだけどな、あの僕」

と城の中で笑っている僕を見る。

「いくら容姿や性格、仕草が似ていてもそれは似ているだけです」

王累は真っ直ぐに僕を見る。

「私は貴方の容姿や性格、仕草に惚れたのではありません。貴方自信に惚れたのです」

恥ずかしいことを恥ずかしげもなく言ってのける王累。

だからなのかな？僕がこの外史で蜀に残り続けた理由。

王累が居たから、僕は――――。

「私は言いましたよね。貴方の隣が私の守るべき国だと。貴方の隣が私の居場所だと」

あぁ、そうか。僕は王累に惚れてるんだ。このどうしようもないくらい真面目で、一直線なこの女の子に惚れたんだ。

出会うはずのなかった、画面の中でしか見れないはずだった彼女に僕は惚れたんだ。

「……ふふ」

笑えるな、これは。

外史の管理者が恋をするか……。

左慈なら鼻で笑うかな？

于吉ならあのイヤらしい笑みを浮かべるかな？

貂蝉なら多分大絶賛するかな？

いや、まぁどうでもいいのだけれどね。今、大切なのは……。

「つまらないですよ？」

「いいえ。私は柳々様と一緒であるならそれだけで――――」

幸せです、と王累……いや、兎は笑った。

「そうですか。では行きましょうか……」

「はいッ！」

僕は右手を出し、兎は左手を出す。

しっかりと握って僕らはこの外史を旅立つ。

柳々という政務官とその忠臣である王累は時の流れに風化され、後の世に語られることはないだろう。

だが確かに柳々という政務官はそこに在ったし、その傍には忠臣がいつも控えていた。

願わくは、そのことが皆さまの心の片隅に残りますように……。

――――――パタン。

「ふぅー。疲れましたよ」

私は肩を叩きながら、今終わったばかりの外史の本を閉じる。

「全く、鍾離権さんも無理矢理割り込むんだもんな。修正するのに苦労するのは私なのに……。まぁ、でも……」

私は本を眺めて、笑う。

皆、幸せ。ハッピーエンドは良いよね♪

私は本の巻末に、『管理者、果心居士』と記し、棚に仕舞う。

「次はどんな面白い物語が出来るか楽しみだなー♪」

また新たに真っ白な本を取りだし、開く。

これを綴(つづ)るのは、貴方かもしれませんよ？

最終話　外史の終わり（後書き）

さて皆様どうだったでしょうか？

拙い文才の作者の今の技術ではこれが限界でした……。

今回のオチ、二重の嘘でした。

柳々の吸血鬼設定すら嘘でした―。

と言いますか、どうやら吸血鬼設定はあまりに駄目な様でした……。感想があまりに不評だったので。

二重の嘘を考えた時に最終的には管理者にしようと思いついたのですが、前の１つをどうしようかと考えますと吸血鬼が無難かなー、と思いまして……。

まだまだ構成が甘いようで読者の皆さまの期待を裏切ってしまいましたことを謝らせていただきます。

さて最後までお付き合いいただきまして感謝いたします。

もしかしたら、また作者は外史の扉を開くかもしれませんがその時はまた読んでいただければ幸いです。

それでは皆様、本当にありがとうございました。

作者、目目連。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5351n/

その嘘つきの男は……

2010年10月16日14時51分発行